

kindkopr.ess.com  
www.kindkopr.ess.com

襲い来る殺人氷塊  
現代文明の毒唾 2

生野 以久男

## プロローグ

現代文明の基礎となった近代ヨーロッパ文明は自然（地球）支配を是とし、近代科学を武器に自然（地球）征服に乗り出すが、二〇世紀に入ると科学と技術を結合し、現代文明（現代科学技術文明）は急速に巨大化高度化大量化への道を邁進しはじめる。

第二次世界大戦末期、相次ぎ広島と長崎に投下した原子爆弾はその合図であった。

核の巨大な破壊力を掌中したにもかかわらず、いまなおさらに効率良く大量に殺戮する手段の研究開発が進められる一方で、遺伝子工学を駆使して遺伝子組み換え、クローン技術、新種生物の創造と限度がない。情報科学やロボット工学も人工脳、人工人間を目指し、人間を超えようともがく。ナノテクノロジー（超微細技術）の展開や化学物質の合成も際限なく行われ、有害かどうかさえ判然としないまま、得体の知れない物質がつぎつぎに造りだされていく。

現代科学技術の巨大化高度化大量化は止まるところを知らず、人間のコントロールを離れ、もはや誰にも行き着く先が予測できない。科学技術の主人だった人間は科学技術の言いなりになり、いまや科学技術に完全に支配されて奴隷と化し、科学の呪縛に我を忘れひたすら赴くまわれ先に先端を目指す。

現代都市は効率的な活動空間を求めて巨大化しつづけ、資源とエネルギーを大量浪費し、地球が受ける太陽エネルギーを超えるエネルギーを発散する。縦横に走る道路に犇めき膨大な量の排ガスを吐き散らす無数の自動車

と大量の廃熱と汚水を吐き出す巨大ビルの林。

地球は有限であり、地球上の資源にも限りあるにもかかわらず、大量に浪費してさまざまな製品を大量につくり出し、大量消費を促し、大量の廃棄物やゴミを出す。大量生産大量消費大量廃棄を進め、山となる大量のゴミに埋もれていく。

ゴミは固形のものだけではない。大気中に浮遊する粒子状のものやガス状のものなどさまざまなゴミが生産、消費、廃棄のそれぞれの過程で環境へ放出され、環境を汚染する。

大気中の汚染物質は雨水に溶けたり雨粒に付着して地表に落下し、土壌や水域を汚染する。水に溶けたさまざまな化学物質が地表を流れ、土壌を汚染し、水域を汚染する。海に流れ着いて海洋を汚染する。海水に溶けた汚染物質は海洋を彷徨い、地球の隅々まで流れゆく。

人間は地球を征服して住みよい人間社会を造ろうとしながら、環境悪化や資源枯渇といった地球規模の「マイナス」である地球環境問題を招いていた。現代文明は「プラス」の巨大化高度化大量化を目指しながら、「マイナス」をも巨大化高度化大量化してしまったのだ。

# 第一章

1

「なんだ、このメールは……」

地之木好夫は思わず大声を発した。自分の声に驚いて、彼は立ち上がり簡易間仕切り越しに二人の仲間たちの机を見回した。幸い昼休みの時間で、小さなオフィスには彼のほか誰もいなかった。たとえ仲間たちが仕事をしていたとしても時折奇声を発する彼の癖には慣れきっていたので、彼の大声に驚くものはいないはずだ。だがメールの内容を知ったら彼らはどう思うだろうか。

彼は仲間たちがいないときを見計らい、日に何度も、警告とも予告ともつかないメールを開く。ディスプレイに映し出された文面を見るたびに身体の芯からじわじわとしみ出るような言うに言えない奇妙な衝撃が全身を襲う。その都度彼は息を潜め、じっと衝撃が収まるのを待つだけで、ふたたびメールを閉じてしまう。

「人類絶滅序章——人類は滅亡への道を歩みはじめた」というタイトルがはじめて目に飛び込んだとき、一瞬彼はまた誰かの悪戯メールかと思った。だが暮れの押し詰まったとき、密かに忍び込むように送り込まれたメールにどこか引つ掛かるところがあった。

目を置かず、メールが予告するような大地震がスマトラ沖で起きた。大津波がインド洋沿岸諸国を広範囲にわたり襲い、三十万を超える犠牲者・行方不明者が出た。

その年は日本にとってもおかしな一年だった。

世界各地で異常気象が頻発し、年々その数を増していたので、異常気象は決して目新しいものではなかったが、その年に限って、日本列島に例年の三倍もの台風が上陸した。それに台風そのものが巨大化し強暴化していた。

赤道付近で発生した熱帯性低気圧がゆっくり西に向かい、発達しながら台風となつて中国大陸に近づいて行くが、その年の台風は決まったように途中からリターンして日本列島に南端から襲いかかるのだ。次から次と九州に上陸した台風が列島を西から北へと縦断し各地に災害をもたらした。何度目かの台風のと、突然、浅間山が噴火した。九月から十月にかけ何度か噴火を繰り返しているうちに、浅間山からそう離れていない中越地方をマグニチュード七の大地震が襲い、数千カ所で山崩れが起きた。数カ月にわたり余震がつづいた。大雨と大雪が追い撃ちをかけた。

「ホントかな……」

地之木は半信半疑だった。だが本文を読み出すと、はじめて見たときと同じように、彼はディスプレイに釘付けになった。得体のしれない戸惑いと心臓を剣で一突きされたような衝撃を感じた。

彼は最初から最後まで続けざまに二度繰り返して丹念に目を通した。

一度目は息も吐かず最後まで一気に目を通すと、二度目は途中で何度も立ち止まり、吟味しながら読んだ。彼の胸は大きな波を打ち続けた。読み終わると、彼は画面から目を離して考え込んだ。

「……地球温暖化が加速……、動植物の有毒化、バクテリアやウイルスの反乱……」

彼はふたたびディスプレイに目を戻した。仲間を送った環境対策に関する

る意見メールに対する返信だろうか。だがそれにしても詳しくすぎる。誰がどんな意図でこんなメールを書き、誰が送り付けてきたのだろうか。

メールは単なる返信か、それとも別のものか。もし彼の返信であれば、彼個人に対するものにすぎないが、それにしても全体的に内容が一般的で、多くの人を対象にしたもののようにも見える。彼はあれこれ考えあぐねながら画面に目を戻したとき、添付ファイルがあることに気付いた。彼は即座にポインターをファイルに移動する。開封しようとして一瞬思い止まった。ファイルにどんなウイルスや仕掛けを仕込んであるか分かるもんか。彼は添付ファイルを開封せずにそのままごみ箱のアイコンに移動した。

メールの添付ファイルにデータを食い荒らすコンピュータウイルスが潜んでいることが多かった。安全を考え、彼は添付ファイルを開かずして廃棄する道を選んだものの、なんとなく添付ファイルのことが気掛りだった。添付ファイルに別の重要なメッセージが入っているかもしれない。しばらく考えてから、彼はごみ箱から添付ファイルを取りだし、空のフロッピーにコピーした。それから彼はふたたびファイルをごみ箱に戻し、ごみ箱を空にした。彼はもう一度ごみ箱をクリックして添付ファイルが完全に削除されているか確かめた。

「昼飯はもう済んだの……、あ、メール？」

突然声がした。反射的に振り向くと、背後に左山が立っていてディスプレイを覗き込んでいる。いつの間にか、戻ってきたらしい。

「うん……」

まじまじと彼の顔を見つめる左山の不審そうな眼差しに気付き、彼は急いでつづけた。

「キミんここにも送ってきていないかな、変なメールだ……、つい最近送

られてきたんだが……」

とっさに彼は言ったものの、左山はこんなメールが送られてきたら黙っているような男ではなかった。

「うーん？ 変なメール？ どこから？」

左山が身を屈め、彼に覆いかぶさるようにして、ふたたびディスプレイを覗き込む。

「とにかくチェックしてくれよ、いま直ぐ。もしかしたら届いているかもしれないから」

前屈みに折り曲げていた背を伸ばし、頭の上から覗き込む左山を押し返しながら、彼はもう一度強く言う。このメールが自分だけに送られてきたのかどうか知っておきたかった。もしそうなら、内容が内容だけにこの扱いについて仲間たちと真剣に相談しておくべきではないかと思った。知らずにおいても、遅かれ早かれ仲間たちを巻き込むことになることは分かっている。

「おれのところにはそんなメールは届いてないよ……、これも違うな……、で、誰から」

左山は自分の席でディスプレイに映し出したメールをチェックしながら、大声をあげる。

「分からない……」

「なんだって……」

左山が駆け寄ると、椅子を奪い、彼のディスプレイのまえに座った。

「これはなんだ」

メールに目を通した左山が驚きの声を上げ、彼を振り返り、大きな目を向けた。だが黒目は焦点が定まらず、激しく動いている。

「おい、どうした、大丈夫か」

「これ、地之木さんの悪戯じゃないよな」

左山はディスプレイに目を据えたまま、左手で無造作に額の髪をかき上げながら言う。頬に垂れた長い髪に半ば隠れているせいか、面長の顔がいつもよりさらに細長く尖って見える。返事をする代わりに、彼は左山の横顔に目を走らせた。なぜこのメールが自分だけに送られてきたのだろうか。だがなにも思い当るものはなかった。

単なる悪戯ではないとすると、四人の仲間のうちで自分だけに送られてきたメールはなにを意味するのだろうか。

「なかなかいいことを書いているじゃないか。これは利用価値があるぞ。みんなに読んでもらおうじゃないか」

左山はひとりで騒いでいる。

「よし、全世界にばらまこう。いいよな。決まりだ」

左山は振り返って叫ぶ。

「誰が発信したか分からないやつをかね……」

地之木は左山のはしゃぎようにいささか嫌悪感を覚え、水を差す。

「え？」

「このメールは誰が書いたか分からないのだ」

「そんなことはないだろう。この内容じゃ、誰が書いたか見当付きそうだが……、そうだ、あの男かも」

「……誰のことだ」

「あの男だよ。だがそんなことより内容だ。これは地之木さんが日頃言っていることじゃないですか。それなのになぜ煮え切らないんですか。なにも躊躇することはない。バラ撒えてしまえばいい。いまがチャンスだよ」

日本経済は二十一世紀に入っても前世紀末に弾けたバブルの後遺症に悩まされていた。デフレが世界的に広がりを見せているなか、ひとり好景気に酔っていた米国経済にも陰りが見えだしたとき、米国で大掛かりな同時テロが発生した。

二〇〇一年九月十一日、乗客を乗せた旅客機が乗っ取られ、ニューヨークの世界貿易センターツインタワービルやワシントンのCIA本部ビルに目掛けて突入したのだ。

燃料油を満載した二機の旅客機が前後して世界貿易センターツインタワービル壁面に激突した。四〇〇メートルを超える高さの二棟のタワービルが炎上し、瞬く間に跡形もなく崩壊してしまった。CIA本部ビルは突っ込んできた旅客機によって一部が損傷し、炎上した。

米国はテロ報復を画策し、この機会にテロ撲滅を旗印にアフガニスタンとイラクに派兵、新政権樹立を目指す。だが国際協調を蔑ろにし、友好国のみを従え、米国単独で押し進めた目論みは思うように進まなかった。

石油資源を巡る争いにキリスト教対イスラム教といった宗教戦争の様相を加味した紛争は、アフガニスタン、イラク両国では戦闘行為が終結してもテロが繰り返されて治安がなかなか回復せず、泥沼化していく。統一に向かっていた国際社会が逆に分裂し、不安定化していった。

日本経済のみならず世界経済をデフレの波が襲う。各国政府や各企業がデフレからの脱却を試みるものの、一時明るさを取り戻し回復したように見えても長続きせず、やがて勢いを失い、ふたたび元に戻ってしまう。世界経済は情報化のなかでマネーゲーム化が進み、デフレとインフレの間を彷徨い、世界経済は振幅の大きい悪循環に嵌り込んでいった。

世界は情報化のもとで一層グローバル化が進展する一方、マネーゲーム

化した世界経済は最富裕国グループと極貧困国グループとに格差を広げ、二極化していく。最富裕国グループは互いに情報技術の先鋭化にしのぎを削り、富を独り占めしようとする激しい競争に明け暮れた。一方、極貧困国は情報化からも取り残され、グローバル化が進むなかで搾取が拡がりますます貧しくなっていくのだ。

地球温暖化など地球環境問題は年々激しさを加えていた。地球温暖化による異常気象が世界各地を覆い、世界の農作物生産にも影響が出はじめていた。熱風と水不足が大都市を直撃した。各地で熱中症による死者が相次いだ。かと思うと大雨に見舞われ、都市を洪水が襲う。

「チャンスじゃないの。このメールで地球温暖化に対する関心が一段と高まる」

左山は地之木に決意を促すように、椅子から勢いよく立ち上がった。

地之木は左山に奪われていた椅子に座り、ディスプレイに目を向ける。

左山のように単純にこのメールが地球環境問題解決の足しになるとは思えなかった。彼はメールの一字一句を見据える。別に目に入る文字を読んでいくわけではなかった。画面に映し出されている文面の奥になにかが隠されている。彼にはそう思えてならなかった。彼は必死に隠されているものを嗅ぎ取ろうとした。ひとりの男の顔が浮かんだ。

背後で左山の声があった。別の声が応える。つづいて乾いた靴音が近づいてくる。中海と右野だった。

「どう思う。わたしのところに送られてきたものだけ……」

地之木はメールのコピーからなかなか顔を上げない仲間たちを眺め回し、急ぎ立てるように言う。だが中海も右野もコピーに釘付けになったまま、

顔を上げようとしぬい。左山までがコピーに食い付いたままだ。

彼はぼんやりと仲間たちを眺めた。

四人は年齢もキャリアも違っていた。

地之木好夫は額が禿げ上がっているが、小柄で背が低いうえに童顔のせいか、誰も年相応に見えない。年よりもかなり若く見られるが、一番の年かさで、四〇に近い。残りの三人は三〇才前後だ。四人の専門はさまざまだが、共通の関心事が地球環境問題だった。

地之木は化学が専門で、長年、公立の研究機関で微量物質の分析を手掛けているが、環境問題全般に関心があった。いまは大学で環境科学の講義をしている。まだ独り身だ。

左山は医者で、名を朗という。夫婦で医院を開業しているが、対処療法的な現代西洋医療にはあまり熱心でないらしい。ときには手伝うこともあるらしいが、医院のほうは専ら細君に任せきりだ。背が高いが細身でひよろひよろとしており、極めてシャイで優しい。だが時折熱く燃えることがある。

中海清子は弁護士で独身である。少々太めの中肉中背。色白で大きめの瓜実顔に光る少々垂れ目の大きな目が際立つ。各地の住民運動にも関わっているが、しゃきしゃきとした口調で弁が立つ。テレビにもちよくよく引っ張り出され、顔が広い。

右野は名を順といい、元キャリアー官僚だ。顎が張って一見いかつく見える角顔だが、細い目はいつも笑っている。システム工学が専門で、情報科学にも強い。現在は大学の講師。

どちらかというときとまりのない連中だったが、地之木が講師となった環境セミナーで知り合い、何回か集まって話し合っているうちに溜まり場

が欲しくなり、古アパートの一室を借りて共同のオフィスとする。程なく、それぞれが代表となって、地球環境対策の活動を目的とするNGOを組織した。

地之木たちのオフィスはいつ取り壊されてもおかしくない古びた三階ビルの上階にあった。一階が店舗用で二階と三階が住宅用アパートとなっていたが、地下鉄の駅が近いこともあって、住居部分を改造して事務所として使っているものも多かった。バブル時に地上げに遭い、賃貸人は追い出しを食ったものの、そのなかの一人が積まれた札束に見向きもせず頑強に抵抗し裁判に持ち込んだ。裁判が長引くなか、バブルが弾け、空き室が目立つボロビルは取り壊されることもなく放置されたままになった。

オフィス内部はアパート用の間仕切りや造作が取り払われ、オフィス向きに長方形のひとつの空間に改造されているが、玄関の近くにあるキッチンやバストイレの一角はそのままだった。道路側にあるベランダに向かって長く伸びている室内には左手の壁際に四人の机が並べて置かれ、もう一方の壁側には二つの応接セットが手前と奥のベランダ寄りにそれぞれソファを壁に寄せて並んでいる。

四人は奥の応接セットに集まった。壁際のソファの両端で左山と右野が足を伸ばし、中海はテーブルを挟んで置いてある二つの両肘椅子のひとつに身を沈め、コピーを読んでいる。地之木は隣の両肘椅子の背にもたれ、焦点のぼやけた目で三人の顔をかかわるがわる見回していた。

「あ、そうか……」

地之木が突然大声を発した。三人がちらっと目を上げた。

「これ、多分、やっこさんからのメールかもしれないな……」

彼はなんの前触れもなくぽっかり浮かんできた記憶をふたたび辿りなが

ら、思い出したように誰とはなく呟く。

「え？ なんですか」

しばらくして、左山が顔を上げた。

「うん、ほら……」

「……………」

三人がじっと地之木を見ている。

「何年かまえにここに来た男だよ」

「地球環境の悪化は幾何級数的に加速するのだと言いつ張っていたひとかしら。でもこのメールには返事以上のものが含まれているように思うわ」

中海が隣の地之木に顔を向けて、慎重に言葉を選んで言う。

メールの大まかな内容はこうだ。

地球温暖化が加速しているなか、有害紫外線が降り注ぎ、環境を汚染するさまざまな化学合成物質と複合して相乗的な影響をおよぼす。種の絶滅、動植物の有毒化、バクテリアの耐性化、ウイルスの変異がハイスピードで進み、生態系が綻び出す……

現在進行中の地球温暖化は急激な気候変動をもたらすノンリニアタイプのものである。温暖化が幾何級数的に急速かつ急激に進むのだ。一〇年か二〇年のうちに温暖化はピークに達するが、二酸化炭素など温室効果ガスの増加を放置するならば、温暖化は暴走してさらにピークにピークを重ね、地球環境システムの大攪乱を招く。

気温を急上昇させ、異常気象を頻発させるばかりでなく、海面上昇によって火山の噴火、地震をも誘発する。急激な気候変動の度合いが大きければ大きいほど、たとえ温室効果ガスの排出を抑制しても地球環境システムの

攪乱は簡単に収まらず、気候変動システムの不安定化が長引く……

一方、地球環境システムの攪乱は環境問題の複合化を進め、地球環境を一層悪化する。オゾン層破壊、大気汚染、水域（海洋）汚染、土壌汚染などの環境汚染が複合化すれば、生き物への影響を倍加させ、種の絶滅から生態系の崩壊へと進む……

森林の大規模な枯死を切っ掛けに、生態系の崩壊が広がる。温暖化による気温上昇や強風によりマラリアなどの風土病や有害化学合成物質汚染が地球規模に拡散拡大して深刻化するほか、氷の閉じ込められていた病原菌やレトロウイルスが活動を開始し新たな感染症が蔓延する……

また世界の穀物生産が気温上昇や干害によって著しく落ち込み、増加する世界人口を養うことができず、食糧や水をめぐる国際的争いが多発する。多くの犠牲者や餓死者を出すことになるだろう……

こうして、地球上の生態系が全面的崩壊に向かい、人類は取り返しつかない事態に追い込まれ、絶滅の危機を迎えることになるが、現在の地球温暖化は巨大化高度化大量化を目指す現代文明による自作自演の人類絶滅劇のはじまりなのだ。これを回避するには地球環境問題を噴出しつつける現代文明を早急に見直し、二酸化炭素などの放出を抑え、地球温暖化など地球環境の悪化を食い止めるほかない……

「オレもそう思うんだ。それでこのメールを地球環境問題に関心をもつ人びとに広く送り付けたいと言っていたんだ。いますぐならエネルギー浪費を改善するだけでも地球環境問題を解決するのに大いに役立つと思うからだよ」

左山はわが意を得たと思ったのか、勢い込んで一気に言う。

「現代文明に酔い痴れているひとびとには、地球温暖化といった地球環境問題が人類絶滅の危険な兆候だなんて思いもよらないじゃないかな。ことにエネルギー大量消費文明にとっぷり浸かって生活している現代人にはね。われわれはそんなことも知らずに化石燃料をじゃぶじゃぶと浪費しつつ、いそいそと自ら人類絶滅に励んでいるというのになあ」

石炭や石油など化石燃料が燃焼するとき、温暖化をもたらす温室効果ガスである二酸化炭素を放出する。産業革命以後、世界における化石燃料の使用量が増大しつづけ、ことに第二次世界大戦後から急速に増えた。これとともに二酸化炭素の排出量が急増し、大気中の二酸化炭素濃度も著しく増えている。産業革命当時大気中二酸化炭素濃度は二八〇PPM程度だったが、二〇世紀に入るとまもなく三〇〇PPMを超えた。二一世紀初頭にはすでに産業革命のときより一〇〇PPMも増え、四〇〇PPMへと近づいている。

「右野クン、いいこと言うね。これで決まりだね」

「左山さん、そう単純じゃないわよ」

「え？ なにか問題があるの？」

「書いた人の許しがなければコピーすることは……」

「法律家は難しいことを言うんだなあ。書いた人のことなんか問題ないよ、誰かさえ分らないのに。オレが責任をもつ」

「左山さんは単純ね。社会を不安に陥れると非難を買うのがオチだね」

中海は負けていない。

「問題はメールを送ったその後だ。内容が内容だけに送るなら送ったものにも責任がある。そんな大げさなことでもなくとも、問い合わせにはある程度応える義務がある。単に配信するだけなら大した意味があるとは思えな



い。問題意識だけでももらえばいいというのなら別だけど、その程度ならわざわざ送るまでもないと思う」

「オレはそうは思わない。このような問題意識をもつだけでも意義がある。問題意識がなければ問題の存在すら認識できない。ましてこれを解決することは出来やしない。地之木さんはこれを機にもっと積極的になにか行動を起こそうというんですか」

「メールを読んだものがすべて地球環境問題に対して建設的な問題意識をもつとはかぎらない。このメールは現代科学技術文明（以下、現代文明と略す）を全面的に見直し、二酸化炭素の排出を抑え、以前のレベルに戻せと言っ。こんな内容のメールを不用意に配信すれば、かえって物議を醸し、新たな抵抗勢力をつくり出すことになるおそれが十分考えられる。それにまたこのメールは抵抗勢力に改革側の手のうちを知らせてしまうことになりかねない。これでは逆効果だ。こうなってはなんのためにメールを公開したか分からないではないか」

「なにをそんなに恐れているんですか。いまこそ、もう一押しするチャンスじゃないんですか」

年々世界各地で異常気象が多発しているいまこそ、左山は地球環境問題を解決するチャンスだと思っっているらしい。

「このメールが環境悪化を食い止めるためにさらに一押しするとは思えないけど、社会になんらかのインパクトを与えることは確かだ。これに加えてなんらかの具体的な行動を起せば、一層インパクトを強めることができるだろう。まあ、メールを一般に公開するか、それとも関係者に送り付けるかして、一応反応を見てから、われわれの行動を考えても遅くないかも」

右野が地之木と左山に交互に視線を走らせながら、結論を先取りするよ

うなことを細い声で言う。

「もう一度言うけど、このメールはいわゆる地球温暖化といった個々の地球環境問題をターゲットにしているように見えるけどそうではない。地球温暖化は現代文明そのものと深く関連している。いや、エネルギーを大量に消費する現代文明そのものが問題だと指摘しているのだ。ということは、このメールを公開すれば現代文明の恩恵を享受している連中全員をテキに回すことになりかねないのだよ」

「ちょっと大げさな感じがするけど、地之木さんの言う通りだろう。だが現代文明に首まで浸かっているわれわれには、このメールが指摘するように、このままではまさに『茹で蛙』の運命が待っているだけだ。このことを社会に警告するだけでも意義があると思うんだがなあ」

蛙を冷水の鍋のなかに入れて徐々に水温を上昇させると、水温の上昇に気付かず、飛び出すことも忘れ、いつの間にか茹で上がって死んでしまうという。メールは現代文明にとっぷり浸かっている現代人にはこのような「茹で蛙」の運命が待っているという。

突然、地之木の脳裏にまるでオープンのような熱風が支配する空間に佇む灼熱の高層ビル群が浮かんだ。大都市という大鍋が地球温暖化の炎を受けて刻々と温度を上げていく。巨大なビルは焼けただれ、道路のアスファルトは溶けて流れ出す。溶けたアスファルトの泥濘に車は立ち往生し、足を取られた歩行者は抜け出そうと必死にもがく。

「だが『茹で蛙』化を回避するためには、エネルギー浪費型の現代文明を全面的に見直すことが不可避なのだ。混乱なく現代文明を改善するにはそれなりの方法や手段を用意しなければうまくいかないと思う。単に警告を発しただけで現代文明が改善するとは思えない。むしろ混乱を呼ぶだけじゃ

ないか」

地之木は地球環境を元に戻したいといくら努力していても、すでに手遅れじゃないかという思いを棄てきれなかった。人類は「茹で蛙」の運命を知ったところで、余程のことをしないかぎり、地球環境問題に塗れてこのまま生きていくほかないような気がしてならないのだ。

「いや、なにをやるにもまずみんなが問題意識を共有することが重要なじゃないか」

「そのことを否定するつもりはない。みんなが共通の問題意識を有することができればいいことはない。だがものごとにはそれなりの順序や方法があるといっているんだよ。メールをオープンしたら、間髪を入れずに、具体的な行動を起こし、世論を盛り立てることが必要なんだ。これができなければ、問題意識を共有するどころか、かえって混乱を生み出すことになってしまうだろう」

地之木にはメールを信用することができなかった。どこがどうおかしいと明確に指摘できないが、どことなくすっきりしないところがあるように感じる。現代文明が問題を孕んでいることはメールをまたなくとも理解できる。彼自身まえから考えていたことだ。かといって現代文明システムを改善すれば簡単に地球温暖化が改善するようにというメールにはどことなくうさん臭さを感じる。

「ドクター左山のはやる気持ちも分からないではないが、そのまえに、四人でメールの内容をもう少し検討してみてもどうか。公開するかあるいは特定の関係者に送付するとしても、これに関わる以上それなりの責任があると思うからだ……」

なかなか結論が出なかった。

四人は明日もう一度集まることになった。

2

退社時を過ぎていた。地之木は行き交う人の群れに埋まった盛り場を通り抜け、薄暗い街路灯の小道へ折れ、坂を上る。

関係者の通用口となっている裏門から構内に入ると、人影ひとつない別世界だった。時折、冷たい風が耳元をかすめる。彼は首をすくめ、急ぎ足で植え込みの間を横切っていく。

煉瓦造りの古びた研究棟に入り、薄暗い蛍光灯に浮かぶ安化粧の白粉を塗ったような薄汚れた壁の廊下を通り抜けて、重いスチールの扉を押した。

「やあ、元気か」

奥の書類が山と積まれた机のスタンドの光のなかに黒枠の丸いメガネをかけた池田の白い顔があった。

「直ぐ済むから、一寸待ってくれ」

地之木は書類が散乱している作業机のスチール椅子を引きだしながら、辺りを見回す。高い天井までいっばいに本や書類が満載された本棚が壁を埋め、作業机のあるコーナーの回りの仕切りにも雑然と書類を積んだ本棚が置かれている。

やたらと高い天井から鎖で吊るされた蛍光灯の薄暗い光の下で、部屋の底にへばりついたような感じの椅子にじっと腰を下ろしていると、沈殿した重い空気に押し潰されて遠い過去へのめり込んでいくような気分が襲われる。彼には世界最高級の演算能力のあるスーパーコンピュータを駆使

して気候変動予測シミュレーションをやるより、蠟燭の火を灯し水晶球を覗くほうが似付かわしいように思えてくるのだった。

「おい、なにを考えている」

振り向くと、黒枠の丸い分厚いレンズの奥に悪戯そうに笑っている目玉があった。

「ここにいとなぜか星占いの部屋にいるような気になってくるんだな」

「まあ、似たようなことをやっているようなもんだ」

「そんなこと言っているのか、地球シミュレーターが泣くぞ」

地球シミュレーターは数百台のスパコンを並列して計算処理する超高速コンピュータだ。一〇年前のスパコン（演算能力毎秒八〇億回）の数千倍の計算能力をもつ。これで「地球システム」をコンピュータ上に再現して気候や地殻などの変動メカニズムを研究しようというのだ。池田は地球温暖化プロジェクトチームに加わり、何年か前から気候変動モデルを担当していた。

「すっかり思惑が外れたよ。毎日雑事の追われて一日中急き立てられている。で、突然なんだね……」

地之木と池田は大学の途中までいっしょだった。専門課程になって、彼は化学を選び、のんびり屋の池田は競争の少ない気象学を専攻したのだ。

「変なメールが送られてきてね。一度きみの意見を聞きたいと思って……」

地之木はメールのコピーを差し出す。

「うむ、ノンリニアか……」

ノンリニアタイプの急激な気候変動は最近発見されたものだった。これは従来から考えられていた漸進的なタイプと異なり、非常に短い周期で気候が激変するタイプだ。一〇年ほど前、グリーンランドのアイスコア分析

からこのタイプの気候変動の痕跡がはじめて見つかったが、過去一〇万年の間に二〇回以上繰り返されていたという。

グリーンランドや南極大陸は厚い氷床に覆われているが、これは過去数万年から数十万年の間に降り積もった雪が圧縮したものである。氷床には雪とともに当時の大気や塵などが含まれているので、氷床からアイスコアを採り、これを分析すれば当時の気候変動の様子を知ることができるのだ。

「……藤原くんがノンリニアモデルを扱っている。一度彼に会ってみたらどうか」

コピーを持ったまま、目を上げ天井の一角をしばらく凝視していた池田が視線を彼に戻した。

「え？ 彼はたしか……」

地之木は精悍な面持ちの威勢のいい若い助手を思い浮かべた。

「そうだ。ここにいた男だよ」

「いまどこにいるの」

「アメリカの大気研究センター（ACAR）にいる」

「で、メールに対するコメントは……、きみの評価を聞きたいのだが……」

「温暖化が加速しているかどうかはぼくには評価できないな。データがないし、ぼくの研究対象でもない」

「……………」

彼はじっと池田の目を覗く。目はなぜか焦点を結ぼうとしない。彼は池田が逃げているように感じた。

「そうじろじろ見られると困るんだが、サイエンティストは予言者じゃないからね。自分が証明できたと考えたものしか信じないし、迂闊に予言めいたことをいうと学界の袋叩きに遭いかねないからね」

池田が大学に残り研究を続け、アカデミックの世界に生息しているうちにますます慎重さを身に付けてしまったらしい。

「学界のトップにおれば発言内容も慎重にならざるを得ないだろうが、これはオフレコだ。ザックバランに聞くが、メールの内容は荒唐無稽なものか、それとも考えうるケースか」

「科学ですべてが明らかにできるように思われているが、それは間違いだ。科学は極めて限られた範囲でしか有効ではない。現在ですら、分からない範囲のほうが大きいと思うよ。科学者は自分が分かっている範囲でしかものを言っていないのに、社会ではそう受け取らない……」

池田は釈迦に説法の類いだろがと言いながら、つぎのようなことを加えた。

われわれ科学者は科学の方法論に従って事物の解明を行なっている。だから科学の方法論にのらないものは検討の対象とすることができないし、また、対象としていないものは評価できないということだ。ところがこのことを理解できないものや悪意あるものは科学が対象とできないものや対象としないものは科学が否定したかのように考えたり、そ言い触らす。たとえば、車や工場などから放出される二酸化炭素と地球温暖化の因果関係を証明することができなければ温暖化そのものをも否定するような言い方をする類いだ。科学が証明できないということは科学という方法論を用いて確かめることができなかつたということにすぎないのであって、科学がそれを否定したことを意味するものではない。

「それできみの答えは藤原くんに聞け、ということか」

「まあ、そういうことだ。ぼくはメールが荒唐無稽なことをいっていると  
は思わないし、全然考えられないケースでもない。もしかしたらノンリニ

アタイプのほうが現実の温暖化に合致していて、われわれが地球シミュレーターで扱っているいわば漸進的な気候変動であるリニアタイプのケースは現実とかけ離れた別のものもかもしれない。いまわれわれが検討しているケースは、このまま二酸化炭素などの温室効果ガスが増えつづけるならば、気温も比例して上昇するという条件のもとで、地球上の気温がどう変わるかということを一々大雑把に計算しているだけだからね。地球を格子状に切って全球を対象に計算しているけれども、そのモデルもまだまだ改良の余地があるものだ。データも全く不十分だし……」

池田は幾分投げやり気味に言ったが、そこには世界最高級のコンピュータを駆使して地球（自然）について知ろうと試みても思うように知ることができない苛立ちと力無さを知らされて呆然としているような趣が感じられた。

「藤原くんだって、科学を信奉する科学者じゃないのかい」

地之木は悪戯っぽく皮肉る。

「こう言ったらなんだけど、彼には特殊な嗅覚があるし、科学の方法論から逸脱する勇氣もある。このメールの発信人も多分地球温暖化を研究しているのだろう。研究中に嗅ぎ取ったことを発信する気になったんだと思うよ。ことの重大さを感じてね」

「とにかく地球温暖化は進行中なんだね」

「大気中の二酸化炭素濃度は増加しているし、二酸化炭素が増えれば温室効果によって気温が上昇するからね」

太陽から地球にとどく放射エネルギーのうち、約三〇パーセントが雲などによって宇宙へ反射され、残りの約七〇パーセントが地表へ到達する。地表に吸収された太陽エネルギーが熱となって地表を暖める。暖められた

地表は赤外線を放射する。赤外線は地球の大気層を通過して宇宙へ放出されるが、一部が大気中の二酸化炭素などの温室効果ガスに吸収されるとふたたび赤外線を放射する。地表に向けて放射された赤外線が再度地表を暖める。こんな繰り返しで二酸化炭素による温室効果のメカニズムだ。大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスの量が増えれば増えるほど、温室効果が強まって地球温暖化が進むのだ。

「これが加速しているかもしれないのか……」

「加速しているのかどうかははっきりしない。加速しているかもしれないし、加速してないかもしれない」

「加速する可能性はあるのだね」

これまで見つかった気温変動には二つの種類がある。地球の公転軌道の変化によるものとそうでないものだ。

天文学者ミランコビッチは自転軸（地軸）の公転軌道面に対する傾きの変化（約四万年サイクル）と自転軸の歳差運動（二万年）と公転軌道の離心率の変化（一〇万年）とのそれぞれにおける日射量の変動により気候が変わると指摘したが、これらは軌道の変化に応じて徐々に気候の変動を引き起こすものと考えられている。この種の気候変動は、氷床や堆積物の分析によって一〇万三〇〇〇年前、八万二〇〇〇年前、六万年前、三万五〇〇〇年前、一万年前に出現していることが分かっている。

これに対して、別の種類は大気中の温室効果ガスの増減によるものだ。

このなかで急激な気候変動現象が一〇万年から二万年前の間に二〇回以上繰り返し返されていたことが最近発見された。一〇年ほどまえ、グリーンランド氷床の分析によって発見されたもので、いわゆる漸進的な気候変動とは全く異なるパターンであった。まず温暖化が急激に進み、ピークに達す

ると徐々に寒冷化していき、途中から急速に寒冷化してもとに戻る、といったパターンだ。

「急激な気候変動では数年か数十年で温暖化がピークに達するようだが、基本的なメカニズムは明らかでない。いろいろ考えられているが、どんなきっかけで温暖化が急激に進み、どんな仕組みで終息するのかまだ判然としない」

「でも過去に何度もあったというんだね」

「そうだ」

「じゃ、今後起こりうると考えていいな。ところで、温暖化で海面が上昇すると地震が多発するということは……」

「海面が上昇すれば地殻に対してもいろいろな影響が及ぶと思うが、どの程度の上昇でどのような影響がでるか判然としない。地震発生の可能性はゼロではないだろうが、多発するかどうか分からないなあ」

地之木は相変らず当たり障りのないありきたりの返事しかしない池田をじっと見た。薄暗い照明に浮かぶ白い顔には生気がなく陶器のように見える。だが遠くを見ている池田の目が一瞬微かに光るのを感じた。

しばらく雑談を交わしてから、地之木はまだ仕事があるという池田を残して研究室を出た。

彼は両手をポケットに突っ込み、背を丸め、構内の木立の間を通り抜けていく。訪ねるときに比べて足が重かった。久しぶりで学生時代に通った居酒屋で酒を酌み交わそうと思っていたのに叶わなかったからか、それもメールにこれといった反応を示さなかった池田の態度にどこことなく距離を感じさせられたからか。

暗い構内から街灯に照らされた街路に出ると、車が疾走し、人々が忙し

そうに行き交う別の世界だった。彼は人波に紛れ、地下鉄の駅へ急ぐ。

不意に、池田の目の奇妙な光が蘇ってきた。メールに反応しようとしなかった池田が唯一反応したものだ。彼にはあの目の光がなんであったのか分からないが、池田がメールからなにかを読み取っていたらしいことに気付いた。

## 3

暖房の効いている車内からホームに降り立つと、寒風が地之木を襲った。

彼は首を竦め身を縮める。急ぎ足でホームを通り過ぎると、彼は改札口への階段を下りていく。

地之木は昨日仲間たちと話し合っているとき、なにか引掛かるものがあった、簡単に議論を打ち切ることができなかった。彼が提案して、四人で「人類絶滅メール」の取り扱いと今後の対応についても一度検討することにしたものの、まだメールを配信すべきか、またそれに備えて用意すべき対応策についても結論を出せずにいた。

メールは地球温暖化が人類絶滅にいたるサインだという。回避するには現代文明を見直すほかはない。だが現代文明システムのどこを変えればいいのか具体的な指摘はなにもない。

一部を手直しして済むのか。だが化石燃料を大量浪費する現代文明に対して省エネルギーやリサイクルだけで済むことだろうか。エネルギー浪費型の現代文明において二酸化炭素の放出を抑えることは行動原理や文明システムそのものを全面的に見直し、現代文明を根本的に変えなければなら

ないことを意味するのではないか。

メールをはじめ読んで読んだとき感じた戸惑いがふたたび蘇ってきた。

彼は会合が始まるまえに自分なりの考えを纏めておきたかった。集中して一晩考えれば対応策は纏まると思っていたが、彼にはメールそのものの扱いについてまだ迷いがあった。

オフィスにはまだ誰も来ていない。ドアを開くと、古い建物特有の臭気が鼻を突く。室内にこもった臭気が彼を包む。一瞬息が詰まる。彼は呼吸を止め、急いでベランダのガラス戸をいっばいに開く。寒風が吹き込んだ。排気ガスの臭いがする。彼はベランダのガラス戸を閉めると、自分の机

に戻り、鞆からメールのコピーを取り出した。

何度見ても、変な書き出しだ。「大気は太陽のように熱く燃え、天空から殺人光線が射す。地表には化学合成物質が溢れ、さまざまな化学合成物質が複合して有害な汚染をつくり出す。森はいたるところで枯れ、水源が涸れて干上がり、生き物が滅ぶ。生きの残った生き物は化学合成物質を溜め込み有毒化していく。バクテリアやウイルスは……、これは単なる未来予測ではなく、未来の出来事についての記載である……」か。

彼はふと、メールの取り扱いに未だに迷いを感じるの、課題が大きすぎることも、この書き出しのせいのような気がした。星占いのようなこんな書き出しで書かれたメールを誰が真面目に受け取るだろうか。真摯に書かれた内容でも、この書き出しではこれを見ただけで眉唾物と思われるやしないか。

この書き出しがどうしてもなじめなかった。かといって書き出しに囚われて迷っているわけにはいかなかった。仲間が集まるまえに、迷いを吹っ切っておかなければならないのだ。

彼はコピーのページを捲り、一字つつなぞっていく。

不意に、大きな鉤鼻の鼻下に泥鰌ヒゲをはやした奇妙な大きな顔が浮かんだ。彼はなんの予告もなく、突然浮かんできた奇妙な顔をしげしげとため回し、くまなく点検する。

大きな顔はあの男の顔だった。

目の前に纏わり付いて離れないわくあり気な大きな顔を邪険に振り払おうとしたとき、彼は無意識のうちにメールとこの男のいかかわしさとを結びつけていたことに気付いた。どこか胡散臭い感じの男がもっともらしいメールの書き手であることに耐えきれず、頭からメールを拒否しようとしていたのかもしれない。

彼は異相ともいえる大造りの大きな顔をもう一度思い浮かべた。鉤鼻の大きな顔が彼から率直さを奪い取り、メールの内容より表現や言い回しにケチをつけ、どうでもいいようなことを問題視していたのだ。

だがそんな表面的なことよりもメールに込められたメッセージこそ問題だ。彼は表現方法や文章形式にとらわれるよりも、メールに込められたメッセージそのものを率直に受け入れるべきであることを悟った。と同時に彼は無意識のうちに鉤鼻男が突き付けてきた刃から無意識に身をかかわそうとしている自分によく気付いた。

彼から迷いが消えた。

「温暖化だというのに、結構、寒いね」

背後から声がした。左山だった。

「例のメールのことだけど……」

左山は一瞬言いにくそうに口を窄める。

彼はじっと左山を見た。

「実は……、ほうほうに送り付けられているらしいんだ、あのメールが……。まさか地之木さんが配信したわけじゃないですよね……」

左山は探るような目付きをした。

「なんだって？」

「とすると、別ルートからすでに配信されたということになる……」

「じゃ、なにも寒いさなかに集まることもなかったな」

「ということになりますか」

左山は騒ぎを起こしたことを忘れたような冷やか言い方をした。彼は一瞬むっとした。だがもしメールがすでに広く配信されているなら、いまさら議論することもあるまい。地球環境問題に関心をもつわれわれとしては、むしろ、あのメールを受けていかなる行動を起こすべきかについて真剣に考えるべきではないのか。

「本当にこのメールと全く同じものが広く配信されているというのだね。それなら、早急に、われわれのつぎの実行計画を纏めなければ遅れを取ることになる」

彼はもう一度念を押す。

「実物は見ていないのですが、そうらしいですよ。友人が偉そうに転送してやるうかと言うから、手元にあると言ってやった」

「そうだったのか。実はこのメールにファイルが添付されていたんだ……」

発信人はメールを広く配信すること期待していたのか。添付ファイルには配信先アドレスが載っていたのだろうか。

彼は添付ファイルを頭から無視していた。添付ファイルを見なかったばかりに、無用な神経を使い、時間をムダにしたことを悔いた。

地之木はふたたび迷いを感じた。このまま仲間とメールの検討を続ける

か、それとも止めてしまうか。一歩進めて、行動計画を考えるべきか。

「メールがすでにほうぼうに配信されているなら、この件について議論することはないということになりますか。でもいつ誰が配信したのかしら」

「一番遅れて現れた中海女史が地之木の隣のアームチェアで額をハンカチで押えながら、黙りこくってる三人を見渡し、口を開く。

「まあ、そんな具合だから、こちらからメールを送り付けるのはしばらく様子を見てからでもいいと思うよ。で、この際、地之木さんが言うように、このメールの内容を吟味して、今後のわれわれの行動戦略を話し合っただろうかと思うけど……」

左山が昨日とは打って変わって、のんびりした調子で言う。

「率直に受け取れば、メールの意図はわれわれに対して警告し、これに対する行動を促すことだと思う」

地之木は左山に伝えるように、穏やかに言う。

「脅しや悪戯ではないというわけね」

もじゃもじゃ頭の右野が呟くように言って、興味なさそうに左手の人さし指と中指で眉をこしこし掻く。

「でもこんなメールをわざわざ配信しなくともいいと思うけど……、なにか裏があるのかしら」

中海は疑わしそうな目を地之木に向ける。

「人類絶滅なんて、とても俄に信じがたいことかもしれないが、単なる脅しや悪戯ではないと思うな」

「でも人類絶滅のスケジュールなんてどうかしている」

メールに人類が絶滅にいたる詳細なスケジュールが添付されてあった。「例の新型ウイルスの発生……」

二一世紀に入ってもまもなく、アジア各地で新型ウイルスが猛威を振るい、大量の鶏が死んだ。人への感染も見られ、犠牲者が続出した。

「左山さん。あれが未来のスケジュールだというの」

「このところ、流行も終息に向かっていようだけだ」

「見かけはね。でも人類が刻々と絶滅の淵へと追いやられていることには変わりない。生き延びたければ、環境をこれ以上悪化させないことだ。そのためには地球環境に無頓着な現代文明を見直し、地球環境に配慮する新しいタイプの文明への転換を急がねばならないということ」

右野がいつものように要約する。

「そのまえに、メールが言っているように、果たして地球温暖化が加速しているのか確かめておきたい」

彼はメールについてコメントを求めるために池田を訪ねたことを話した。

「それで地之木さんは加速しているかを確かめるためにわざわざアメリカへ行こうと思っているの」

中海が素っ頓狂な声を出した。

「え？ アメリカ……」

彼は藤原とはメールのやり取りで済むと考えていた。だが中海の指摘を耳にした途端、彼はふと藤原に会って話してみても悪くないと思った。

「石油や天然ガスの殆どを海外に依存している日本はエネルギー浪費型の現代文明から一刻も早く脱却したほうが国の安全上得策だから、メールの内容をわざわざ確かめるまでもないことだと思う。二酸化炭素の排出量削減のために、この際、このメールを大いに利用すればいいんじゃないか」

「右野くん言う通りだよ。このメールは利用価値がある」

「左山くん、このメールは広く配信されているんですよ。そのうえ配信を



重ねれば内容についてうちに問い合わせがくる。そのときどう応えるのか。それに備え、われわれはそれなりに納得させうる対応策を用意しておくべきではないのか」

地之木は池田の慎重過ぎる話し方と彼の目に一瞬灯った奇妙な光を思い浮かべた。なにかを隠している。もしかしたら、地球温暖化についてマスコミや学界で指摘されている以上のことが第一線の研究者仲間の間で語られているのではあるまいか。池田はメールの行間からそれを感じ取って焦りを覚えたのではないか。このことを確かめるためにも彼は藤原を訪ねてみようと思った。

4

その日の夕方、地之木は慌ただしく成田を発った。

途中で日付変更線を越えるので、サンフランシスコ国際空港にはその日の早朝に着く。そこで国内線に乗り換え、デンバーへ向かうのだ。

入管の手続きを了えると、彼は税関を素通りして国際線ロビーに出た。早朝にも拘わらず、ロビーには出迎えの人々が群がっている。誰も迎えない当てもないのに、彼は歩きながら見覚えのある顔がないかと群がっている人々に視線を走らせる。藤原の顔がないことを確認すると、彼はデンバー行きの搭乗ゲートのある国内線ターミナルビルへ向かう。

乗り換えの時間はたっぷりあった。だが途中のファーストフードやお土産屋、レストランには目もくれず、彼は行き交う人々の間を縫って長い連絡通路を急ぎ足で通り抜けていく。

国内線ロビーの入口で手荷物検査とボディチェックを受け、途中洗面所に寄ってから搭乗ゲートへ向かう。各社のカウンターが連なるロビーには、早朝のせいかわ、ビジネスマン風の人々が目立つ。彼はデンバー行きの搭乗手続きカウンターを探し、チェックインを済ませた。

まだ出発時間まで一時間程あった。彼は空いている椅子を探して腰を下ろすと、鞆を抱え、目を閉じた。

この便に乗ると、十一時までにデンバーに着く。空港からACARのあるボルダーへ直行すれば、一時過ぎには藤原を訪ねることができるはずだ。彼はメールで二時ころACARへ何うと連絡していた。

突然、微睡みのなかで自分の名を呼ぶ声を聞いたような気がした。夢かと思った。彼は目を閉じたまま、耳を澄ます。もう一度声がした。

目を開けると、口の回りに濃いヒゲを生やした浅黒い顔が覗き込んでいる。

「地之木さんですね。藤原です。もしかしたら同じ便になるかと思って……」と言いながら、藤原は大きな布バッグを床に置き、分厚いダウンジャケットを脱いで隣の席に腰を下ろす。スタンフォード大学での研究打ち合わせが夜遅くまで延びて、とうとうボルダーに戻ることができず、昨夜は空港近くのホテルに泊まることになったのだという。

地之木は池田の研究室で会ったときとすっかり見違えた藤原の顔をしげしげと見た。濃いヒゲのせいかわ一段と精悍さが感じられる。立場が逆だったら、彼に藤原を見付けることができただろうか。藤原にしても地之木をはっきり覚えていたわけではなく、当てずっぽうに声をかけたらしい。幸いデンバー行きの待合いロビーには日本人は彼だけだった。

「突然メールをして……、お忙しいんですね」

地之木は急の訪問を詫びた。藤原がスタンフォードに出張しているとは知らなかった。

「いや、今日の午後、新しいモデルの計算結果がでるところなんですよ」

「そうでしたか。どうしても教えて欲しいことがありますね」

「私でなくとも……、地球温暖化のことでしたら日本にも研究している方が大勢いらっしゃるじゃないんですか」

藤原は照れ臭そうに顔を歪めて言い、「コーヒーでいいですか」と立ち上がる。

一瞬、日本にも研究している方が大勢いるといわずに池田を名指してもよさそうなのと思う。彼はあえて池田の名を出さない藤原と池田との間にどんなことがあったのかと思いつらしながら、目で藤原の後ろ姿を追った。

搭乗のアナンスが響く。搭乗客が立ち上がりゲートへと移動をはじめた。

藤原が両手に紙コップを持って戻ってきた。

「飲んでから乗りますか、機内に持ち込みますか」

「まだ時間があるのでしよう」

地之木はコップを受け取る。藤原は立ったままコーヒーを飲みだす。

コーヒーはかなり熱い。少し飲んだところで諦め、彼は藤原に目を向けた。

「搭乗しましょうか。これについてコメントを頂きたいのです」

彼は用意してきたメールのコピーを差し出す。藤原は左手でコピーを無造作に受け取り、右手で空になった紙コップを握りつぶし、近くのダストボックスに放り込む。

空になったコピーを通り抜け、二人は搭乗口から機内へと入っていく。

機内は満席だった。地之木の座席は前の方で、後方の藤原とはかなり離れている。ここからではメールを読んだ藤原の反応を窺い知ることは不可能だった。彼はコピーを渡してしまったことを悔いた。

彼はメールを見たときの第一印象を思い浮かべた。妙な書き出しだが、そのときは別に違和感はなかった。この一、二年、世界各地で大雨に小雨、高温や熱波、暴風雨が激増しており、気候異変ともいえるべき異常気象が常態化してきたときだけだけに、人類もそろそろ年貢の納め時かなと思っていたからだった。

だが人類が二酸化炭素をたかだか三〇パーセント強増やただけで絶滅という高い代償を払わされることになるとは……。

彼はいつの間にか微睡み、薄靄のなかを彷徨っていた。遠くの方から黒い人影が近づいてくる。だが間近に來ると、彼を避けるように通り過ぎて行く。彼は必死に呼び止めようとするが、つぎつぎに現れる人影も同じ軌跡を描いて遠ざかっていく。

「地之木さん、着きましたよ」

いつの間にか、熟睡していたらしい。乗客はあらかた降り、藤原が微笑んでいた。彼はまだ朦朧としている意識のなかで立ち上がり、藤原の後を追う。

「お疲れですが、直行しましょう」

地之木をターミナルビルのエントランスに待たせ、藤原は駐車場から車を持ってくると、彼を助手席に乗せてすぐ走り出した。一刻も早く研究所に帰りたいらしい。

車は空港を出ると、ほどなくランプからハイウェイに入る。道路はすっかり乾いているが、両側は一面の雪野原で、建物や樹木が点々と暗い影を

落としている。

「混んでいないようだから、三〇分もあれば着くでしょう。昼飯はポルダーでいいですね。前方の山々がロッキー山脈です」

雪で真っ白い山並みが連なり、陽光に輝いている。

彼は藤原の横顔に目を向ける。メールについてどう感じたか聞きたかった。だが藤原は前を向いたまま口を開こうとせず、一心に車を走らせている。

藤原は街の中心から離れたホテルのカフェテリアに地之木を案内した。

よく利用するという。昼時を過ぎているせいか、食事を了えてコーヒーを飲んでいる男女の二組を除いて、客の姿がなかった。

「メールを読みましたよ」

地之木がビーフサンドイッチを食べたえ、レモンティーを飲んでいるとき、藤原は突然言う。彼は藤原の目をじっと見た。だが藤原はそれっきりメールには触れようとせず、コーヒーを飲み続けている。

「今年は雪が多いのですか」

「暮れにちよつと降りましたが……、スキーはなさいますか。いいゲレンデがありますよ、ここには」

「新雪を滑降したら気持ちがいいでしょうね。雪質も抜群によさそうだし……」

高地にあるデンバーは一マイルシティと言われている。ポルダーの標高ももほぼ同じレベルだ。ゲレンデは粉雪に覆われているにちがいない。

「私はこれから研究所に出ますが、お疲れでしたら一休みしたころホテルの方に伺いましょうか」

「お差し支えなかったら、さきにお話をお伺いたいですね」

彼はメールに対する藤原の考えを早く知りたかった。

「ここではなんだから、それじゃ……」と言いながら、藤原は立ち上がった。

ホテルを出ると、車は街を抜け、山麓へ向かう。

「あれです。坂道を上っていきます」

藤原は指さすACARはロッキー山脈を背にした麓の小高い台地にあつた。

山腹を巻いている坂を上りきると、ピンクがかつた薄い赤茶色の石造りの建物が現れた。一帯が国立公園で、研究所の建物は付近の景観にマッチするように配慮されて近くの山から切り出された岩石が用いられているのだ。

吹き抜けのエントランスで事務室に用事があるという藤原を待っていると、ガラス越しに鹿の姿が目に入った。雪の間からのぞいている枯れた芝生を食べている。彼がガラスに近づくと、顔を上げてじっと窺うような目を向ける。

「鹿ですか。よく出てくるんですよ。それじゃ、行きましょうか。研究棟は奥のほうの建物です」

書類の束を持って戻ってきた藤原が彼に笑顔を向けて促す。

藤原の研究室は四階の一番奥だった。長方形の室内には窓側に研究者用の机が二つと書架、ドアに近いスペースに大きな作業机と数脚の椅子、それにホワイトボードとロッカーが並べてあった。

二人のほか誰もいない。窓から差し込んでいた陽光もほどなく消え、室内は沈んでいった。

「現在起こっている気候変動はこれまで考えられてきたタイプとは異なる別の新しいタイプじゃないかと思っています……」

「グリーンランドで見つかった急激な気候変動をもたらすタイプのようなものかどうか」

地之木はホワイトボードの前に立つ藤原を見守った。

「グリーンランドタイプは突然加速して急激な気候変動をもたらすのが特色です。いま進行中の地球温暖化も同じように今後さらに加速していくことでしょうか……」

藤原はホワイトボードに右上がりに急上昇するカーブを描いた。

「縦軸が気温です。アイスコアの分析によると、このタイプでは気温が数年から二〇数年でピークに達するのです。ピークが過ぎると寒冷化がはじまるといいます。寒冷化は数一〇〇年から数一〇〇〇年つづくようですが、はじめはゆっくりと進み、途中から急速に寒冷化するらしいですね……」

こう言いながら、藤原はさきの上昇カーブに下方に向かうなだらかな長い線を引き、そのさきに急に落ち込む線を引いた。

「急激な気候変動はこんな形ではじまり、こんな形で収束するようですが、いまの地球温暖化がこれに類似するものであれば、当面の問題は急激な気温上昇ですね。これによって人類が絶滅を迎えるかどうかは分かりませんが、条件が揃えばかなりきつい影響を被る可能性は大にあるのではないのでしょうか……」

藤原はホワイトボードの上昇カーブを赤のフェルトペンで何度も擦る。

「急激な気候変動が起きるといふ根拠はなんですか」

藤原の顔が幾分紅潮して見える。彼は池田とまるで違う藤原の言い方にいささか不安を覚えた。

「根拠？ まあ、強いて言えば、カンですか」

藤原はいたずらっ子が悪戯を見つけられたときのような薄笑いを浮かべた。

「カン？」

彼にとって全然予期していない返答だった。

「釈迦に説法でしょうが、気候変動予測はモデルの出来に依存するものです。それにデータの問題やコンピュータの能力のこともあります。予測はこれらの制約を受けざるをえないのですからね」

気候変動予測モデルでは地球規模の気象システムや海洋システムという極めて複雑な構造を対象とし、この系における各種の要素間の運動を超高速のコンピュータを用いて数値シミュレーション手法で解析する。地球のすべての点を網羅することが不可能であるので便宜上地球表面を格子状のメッシュに切り、そこに代表的な値を入れて予測計算を行なう。メッシュの大きさは全球モデルでは一〇〇キロメートル四方程度であるが、コンピュータの能力に応じてこれをさらに細分化することもできる。それでも現在は一〇キロ四方程度までだ。だがデータが問題である。たとえば雲について言えば、その大きさは数キロ程度であるのでメッシュの大きさと対応させてどのような数値を与えるか問題となる。またすべてのメッシュに対応してデータを揃えればその数は何十兆以上にもおよび、極めて膨大なものとなる。といっても地球上の観測データが全部揃うということはまずない。これに代わる工夫が必要となる。

「でもシミュレーションでモデルの検証しているのでは？」

「ひととおり過去の気候の再現テストは起こないですが、よく再現できたからといっていいモデルだとは言い切れません。これだけでは予測に有効

かどうかは判定しようがないと言ったほうが正しい」

「じゃ、これまでおこなわれてきた予測はムダだということですか」

彼は声を上げた。

「そんなことは言っていないですよ。これまでのシミュレーションからさまざまなことが分かってきました。でもそれはこのモデルでこのデータを用い、この仮定のもとで計算すれば、この結果（予測）となるというものです。雲を例にとっても、雲には熱を閉じ込める効果と日射を反射させて遮る効果がありますが、それも雲が形成される高さや形状次第なのです。そこである研究チームが同じモデルを用い、これらの仮定を二〇〇〇通り以上いろいろ変えて計算したことがありますよ」

「それで……」

「大気中の二酸化炭素が二倍となったときのケースでは、仮定の違いによって気温上昇が二度から一二度程度の範囲ばらついたそうですよ」

「……………」

「いまおこなっている気候変動シミュレーションには手法とデータとに限りがあります。このことを熟知したうえでその結果を活用することです。

シミュレーションによってしか知り得ないことが沢山あるのですから」

「それでカンに頼るといわけですか」

「そう、複雑系における予測には想像力が不可欠です。データが欠如していたり、仕組み自体に分からないことが沢山あるからです」

「科学的でないということ……」

「厳密な証明を要求する科学ならそうも言えますが、再現可能性があれば科学的成果として評価の対象となります。気候変動のシミュレーションはそういった種類の仕事なのですよ」

「……………」

彼は池田の顔を思い浮かべた。

「グリーンランドのアイスコア分析で発見された過去に発生して急激な気候変動パターンの基本的な仕組みはまだ完全に解明されていません。これが解明されれば、現在進行中の地球温暖化についても理解が深まり、予測モデルも一段と進化するにちがいません。そこで私はここでこの種の気候変動パターンの基本的な仕組みの解明を試み、新しいモデルの構築に取り組んでいくところです」

氷期から間氷期へ移行するときには温室効果ガスである二酸化炭素やメタンが大幅に増加する。大気中における二酸化炭素濃度は五〇パーセント、メタン濃度は七五パーセント幅で変動しているという。現在人間活動によって、すでに大気中における二酸化炭素濃度は以前より三〇パーセント、メタン濃度は一六〇パーセント増加している。とすればいまの間氷期のなかでさらに温暖な間氷期が始まることになるということか。それは過去と同様の急激な気候変動のはじまりなのか。それとも別の新しいタイプの気候変動を引き起すのか。

過去の急激な気候変動現象は「亜間氷期」と名付けられた気候激変現象である。亜間氷期は突発的に始まり、ゆっくり寒冷化して急激に亜氷期に入っていくパターンをたどる。

亜間氷期にはメタン濃度が上昇する。降雨が増えるせいだ。また突発的に温暖化が始まる。数年あるいは数一〇年で一〇度前後急上昇し、積雪は二倍以上、降下する塵は一〇倍以上に急増する。それに亜間氷期が始まるるときと終わるときには寒暖の揺らぎあるというのだ。

ではなぜこのような亜間氷期特有な急激な気候変動が生じるのか。これ

までその仕組みについていろいろな説明が試みられてきた。そのなかでも海洋におけるベルトコンベヤーと呼ばれる深層海流大循環が関係しているという説が有力だった。だが温暖化が始まる切っ掛けはなにか。温暖化が終わり寒冷化に移行する切っ掛けはどうか。寒冷化が終わる切っ掛けはなにか。こういった肝心なメカニズムがまだ判然としていないのだ。

「それでこれらが解明できたというのですか」

彼は藤原の熱のこもった話しぶりに次第に引き込まれていく。

「過去の急激な気候変動における二酸化炭素濃度変化については、いまのところ、こんなふう考えているんです」

大気中の二酸化炭素濃度は亜氷期に増加し、急激な気候変動が始まる亜氷期にはむしろ減少し出すというパターンを描く。すなわち急激に温暖化してから寒冷化していく周期をたどるひとつの気候激変期である亜氷期だけを見ると、この時期の急激な温暖化過程では二酸化炭素が殆ど増加せず、逆に、温暖化のピークを迎えるまえから徐々に減少し出しているのだ。

「二酸化炭素が増加して温暖化が始まるのじゃないのですか」

「温暖化の過程において大気中の二酸化炭素濃度の低下によって寒冷化が呼び起され、二酸化炭素量の減少とともにゆっくり寒冷化が進み、あるレベルに達すると一気に寒冷化が進行して亜氷期が終り、亜氷期に入っていく」

「ということは寒冷化が収まった末期の亜氷期に二酸化炭素などの温室効果ガス濃度が増えるというのですか」

「まさにそうなんです。いいかえれば、亜氷期において亜氷期が準備されるということですよ」

「それで急激な温暖化は……」

「まあ、温暖化は低緯度よりも高緯度に顕著に現れるのですが、北極圏周囲が温暖化するのには北極海に温かい海水が大量に流入するからです」

藤原のシナリオはつぎのようだ。

地球の表面の七〇パーセントが海で、深いところは一万メートルを超えるが、広大な海洋の深層を縦横に走る巨大な流れが存在する。コンベヤーベルトと呼ばれる地球表面の熱分配を担う深層海流大循環だ。これは一〇〇メートル以深の深層を北大西洋から南極付近を経由して北太平洋へ至り、そこで上昇して元に戻る。一巡するのに一五〇〇年から二〇〇〇年かかる。

深海に潜り込み深層海水となるのは塩分の多い冷たい海水であるが、その生成スポットは限られている。主なところは北大西洋グリーンランド沖付近と南極ウェッデル海だ。

熱帯地方で温められた塩分を多く含む濃厚な海水がメキシコ湾流ののって北上し、グリーンランド南東で急速に冷却されて沈降し、北大西洋深層海水となって深層を南半球まで流れ、ウェッデル海付近で沈降してきた南極底層海水と混じり合ってインド洋や太平洋の底層に入っていく。北大西洋で上昇した一部がウタターンしてインドネシア多島海を通り抜け、インド洋で上昇した一部と合流し、温かい塩分高濃度海水となって北大西洋を北上するメキシコ湾流に流れ込む。これが深層海流大循環のメカニズムとルーパターンだ。

ところで、深層海水の元となる北上した塩分高濃度温海水が十分冷却がされなかったり、塩分濃度が足りなかったりして北大西洋で深層海水が十分生成されないとどうなるか。

そうなれば深層海水になりそこねたメキシコ湾流（暖流）の暖かい大量の海水が北極海へ流入することになるのだ。その結果、北極海の海水温が上がり海水が溶け出し、シベリア、アラスカ、カナダの北極圏が急激に温暖化しはじめる。

急激な温暖化によっていままで氷に覆われていた地面が顔を出し、草木が繁茂する。海水が溶けた海洋では植物性プランクトンが大繁殖し、大気中の二酸化炭素を大量に吸収し出す。また、氷が溶けて露出した海面からも大気中の二酸化炭素が大量に吸収されるようになる。

こうして大気中の二酸化炭素の減少が始まり、地球の気温が低下して熱帯地方における水蒸気の発生量も減り出す。これにともない、北大西洋への温海水の供給も減り始めることになる。

一方、北極圏の温暖化の進行によって氷が溶けて塩分濃度の薄い大量の海水が北大西洋に流れ込み、深層海水の生成をさらに妨げ、コンベヤーベルトの動きが次第に鈍くなる。

こうして大気中の水蒸気が減り、乾燥化が進み、やがて寒冷化が始まる。二酸化炭素の吸収源だった草木は枯れ、地面や湖沼は雪や氷で覆われる。

太陽光線の反射量が増えて地表面が冷え、凍土が広がっていく。海面は氷で覆われ、海水の蒸発量も減り、乾燥化が一層進み、さらに二酸化炭素濃度が低下し、やがて本格的な寒冷化を呼ぶ。

「実際はさらにさまざまな要素が組み合わさってもっと複雑な構造になるのですが、大まかに言えば、亜間氷期はこんなふうになり終りを迎えるんじゃないかと考えているところです」

「では亜氷期では……」

「寒冷化によって極度に冷やされた冷気が北極圏周辺に拡がり、亜氷期が

始まるのでしよう。でもこの冷気が北上してきた暖かい高塩分の海水を十分に冷却して深層海水の生成が始まると、コンベヤーベルトが次第に回復することになる。深層海流大循環が回復し始めると、北上する暖かい海水（暖流）の量も増え、次第に寒冷化も緩和され、氷の中に閉じ込められていた枯れ木や動物の死骸などの有機物が腐敗し出す一方、凍土が溶け出して二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスを放出し始める。こうしてつぎの亜間氷期を準備し演出するというわけです」

「なるほど、それで温暖化が急激に進行するきっかけは……」

「急増した二酸化炭素などの温室効果ガスの効果に加え、これをさらに促進させるさまざまな作用が同時に働くからです。その主なものは大気中の水蒸気の増加とその温室効果であり、熱帯地方で熱せられて温くなった海水が高緯度へ大量流入するからだと考えています」

「寒冷化のほうは……」

「二酸化炭素の減少とコンベヤーベルトの機能低下が結合して寒冷化を呼び起こすと考えていますが、地表面に雪氷が広がって日射が反射されるようになってさらに寒冷化を強めていくのかな」

「寒冷化が長期間継続して進行するのは……」

「コンベヤーベルトの弱まりや停止でしょうか。もしかしたらコンベヤーベルトが正常に動き出すまで寒冷化が続くことなるんじゃないでしょうか」

コンベヤーベルトと呼ばれる深層海流大循環は海洋における熱輸送の大半を受け持ち、その割合は大気と海洋を合わせた地球全体の約半分に相当する。この熱輸送は地球上の熱分布が極端に偏らないように調整するためのものだ。もしこのコンベヤーベルトが弱まったり停止したりすると地球上の熱分布に極端な偏りが生じ、気候システムは極めて不安定化すること

になる。全面的な回復には数一〇〇年か数二〇〇〇年を要する。

「すると、急激な気候変動は……」

「要するに、温暖化をさらに加速させる正のフィードバックと寒冷化への正のフィードバックの作業ということになりますか」

「現在進行中の地球温暖化はこのタイプと違うものですか」

「一見同じようにみえるのですが……」

藤原は執務机の上に放り出していたコピーをもつてくると、ホワイトボードに広げてクリップでとめる。

「上が大気中の二酸化炭素濃度の経年変化のグラフ、下が世界の年平均地上気温のグラフです。二酸化炭素濃度が一五パーセント増えたころ、六〇年代後半ですが、このころから気温の上昇傾向が見られますね。九〇年後半まではかなり揺らいでいたのがここに来て気温の上昇傾向がはっきり出てきています。急激な温暖化がはじまるまえの揺らぎまでは過去の急激な気候変動と同じパターンをたどっているようですが、これからさきはどうなりますか」

産業革命前まで大気中の二酸化炭素濃度は〇・〇二八パーセントだったが、その後毎年増え続け、すでに三〇パーセント以上増えて二酸化炭素濃度は〇・〇三七パーセントを超えている。一九六五年頃から気温が上昇し出したが、平年の平均気温に比べてまだ低かった。二酸化炭素濃度が〇・〇三四パーセントに達した一九八〇年頃から平均気温が平年を超えはじめ、温暖化へと転じているのだ。

「過去の急激な気候変動では気温は数年から二〇数年でピークに達し、それからゆっくり下降しはじめるのでしたね」

「そうです。大気中の二酸化炭素濃度が低下してね。でも現在の状況では、

人間活動による二酸化炭素の排出が抑えられ、数年から二〇数年で大気中の二酸化炭素などの温室効果ガス濃度は減少に転じそうにないですね。多分、このままでは今後も二酸化炭素などの温室効果ガスは増え続けていくでしょう。人口増加と経済発展、それに世界的に生活水準が上がるとどうなるか。エネルギーの消費量が急増し、これまで以上に二酸化炭素が大量に放出されれば、温暖化がどこまでも加速され、気温上昇のピークが更新されつづけることになるのでは……」

藤原は溜息をつく。

世界の人口はすでに六五億人を超え、二〇五〇年には約九一億人になると予測されている。いま世界の約二〇パーセントの豊かな人々が八〇パーセントの自然資源を消費しているが、残りの八〇パーセントの人々が同様の水準を達成しようと経済成長に励み、中国やインドなど世界人口の五〇パーセントを占める国々が世界市場に殴り込みをかけている。世界のエネルギー消費量は増えることがあっても減ることはないのだ。

「一体どうなるのですか」

「北極海へどんどん温かい海水が流入することになるかもしれない」

「コンベヤーベルトはどうなるのですか」

「急激な気候変動タイプではコンベヤーベルトの動きは二酸化炭素などの温室効果ガスの減少による高塩分温海水の供給量の減少と連動して低下していったと考えられているのですが、以前にも増して大量の高塩分温海水の供給が続くとうなるか……」

「コンベヤーベルトが弱まるとメキシコ湾流の北上も衰えてくるのですか」

「そう、そうなる可能性がありますね。地球のような巨大で複雑なシステムではひとつの変化が思わぬところに影響をおよぼすことがたびたび観測



されていますから、メキシコ湾流の北上が弱まることも考えられるのですが、二酸化炭素濃度が増え続け、メキシコ湾流に乗って北大西洋へ大量の高塩分温海水の供給も続くとすれば、この大量の高塩分温海水はどこへ流れていくのか。すべてが深層海水となって海底へ潜り込むことになるのか、それとも余りがでるのか。余りの深層海水となれなかつた高塩分温海水の一部が風に流されて北極海へ行きつき、北極海を急速に温め、高緯度地方がますます温暖化していくことになるのか。もし北極海へ流れ込み、海水を温めることになれば、北極圏の氷が溶けるだろう。海水やグリーンランドの氷床が溶け出せば、海水が太陽光線を吸収しますます温暖化していくことになる。これは最悪のシナリオですが、これは北半球だけの話ではない。こんなふうに考えて計算した結果がこれなんです」

藤原はアウトプットのコピーを机に広げる。

「これが北極圏ですか……」

彼は息を飲んだ。気温が二〇度以上も高くなっている。

「これは現在のペースで二酸化炭素濃度の増加が続くとしたケースですが、中国やインド、それにブラジルなどの国々が豊かな国の仲間入りするようになれば、二酸化炭素の放出量は倍増することになるでしょう。決して減ることはない。こうなればどうなるか。多分、過去の急激な気候変動と別のパターンを辿ることになるでしょう。でもそれがどのようなものであるか……」

ベルトコンベヤーがフル回転しても間に合わないほどの大量の高塩分温海水が押し寄せてきて大量の降雨をもたらしたり、北極海の海水やグリーンランドの氷床を溶かして、大量の淡水を北大西洋へ流出させるようになる。海水の塩分濃度が薄まり深層海水の生成が滞ることになる。ベルトコ

ンベヤーが影響を受けて深層海流の大循環が滞るようなことになれば一転して寒冷化に突入することになるだろう。

それよりも北極圏に温海水が溢れ、上昇気流が渦巻くようになったら世界の気象はどうなるのか。氷床や氷河など地球上の水が溶け出すと海面はどうなるのか。

地球上にある水の大半は南極にある。南極の氷床は地上の水全体の九〇・六パーセントにおよぶ。グリーンランドの氷床は九・一パーセントで、残りが山岳などの氷河である。南極の氷床が溶けると海面が一〇〇メートル以上上昇する。グリーンランドの氷床は海面を一〇メートル前後押し上げる。

「グリーンランドの氷床は簡単に溶けてしまうのですか」

「簡単に全部溶けてしまうとは考えられません。でも条件が揃えば二〇〇メートル以下ではかなりのスピードで溶けるでしょう。アラスカではすでに氷河や永久凍土がかなりのスピードで溶け出しています」

「異常気象が常態化して大雨や暴風、干ばつや熱波がところかまわず襲うことになるのですか。海面も急上昇して大都市を水浸しにしたり、臨海の原子力発電所や工場などが水没してしまうことになるのですか」

「そのまえに生態系が壊滅的な被害を被ることになるでしょう。気温が急上昇すれば森林がかなりの広い範囲にわたって枯れていくことになるでしょう。山火事も頻発することになる。でも陸上よりも海洋のほうがダメージがさらに大きいと指摘されています」

「すると……」

「そうです。なんとかしてこれを食い止めなければとんでもないことになる。かといって、自然資源の八〇パーセントを消費して豊かな生活をエン

ジョイしてきたわれわれに後から来る人々に対して豊かさを断念しろと強制することはできないでしょう。世界中のひとびとが豊かな生活をエンジョイしようとすればもうひとつの地球が必要となる。それでも足りないかもしれない」

「エネルギーの節約だけでなく、豊かな国々は早急に生活全体を見直し改善すること」

「たとえ豊かな国々がそうしたとしても、豊かさを追い求めてあとからつづいてくる国々もそうしなければなら効果がない。だがそんなことが果たして期待することができるでしょうか」

「といってもこのまま進めば、人間社会は破産するほかないでしょう」

彼は暗澹たる思いに襲われて口を嚙み、目を窓に向けた。薄明かりのなかに闇が広がっている。

「二酸化炭素濃度の増加傾向がどこまで続くか見当が付きませんが、それに応じて温暖化が進むものかどうかは分かりません。コンピュータの結果はあのようなものでしたが、あの予測は必ずしも当てになるものではない。科学には限界があってすべてを解明することは到底できないことですから」

藤原は暗い目の地之木を慰めるように言う。

「ところで海面が上昇すると火山の噴火や地震が頻発するようになるのですか。でも大量の噴煙が大気に放出されれば日傘効果で温暖化が抑制されるかもしれませんね」

「海面の上昇と火山噴火や地震と関係があるかよく分かりませんが、海面上昇によってプレート付近からマグマへの海水の注入が増えることがあるかもしれませんね。それに海面が広がった分だけ地盤への影響が増すことになるかもしれませんね。もしそうだとすると火山噴火や地震が起こりや

すくなることもあるでしょう」

「そうですか。メールの指摘はあなたがチタラメではないということですね」

「というより、私はかなり核心を突いていると思いますよ」

地之木は藤原の目をじっと見た。現在進行中の地球温暖化は過去に何度も発生したタイプの急激な気候変動なのか、それとも別種の新タイプなのか。

5

僅かに残っていた薄明かりも消え、外はすっかり闇に包まれていた。A CARのエンジントランスを出ると、眼下に街の光が見える。

「明日、お帰りになるんですか。いいところですよ。ゆっくりなさればいいのに」

ハンドルを切りながら、藤原が言う。

予約したホテルは街の中心にあった。チェックインを済ませると、車をホテルの駐車場に置いて二人は歩いて街に出た。

歩道の石畳は乾いているが、片隅に溶けかかった雪が残っていた。時折肌を切るような冷たい風が吹く。

「あの醸造所を改造したレストランにしましょうか。いろんな地ビールがあるんです」

煌々と中の光が透けて見えるガラス張りの建物が目の前に見える。藤原のあとを追って道路を横切り、ガラスのドアを押す。

醸造タンクの間には吹き抜けの狭い通路が奥に延び、これに並行して細長いスタンドがあった。そこに若者たちが集まり、スタンドに寄りかかりビールを飲んでいる。

藤原は通路の奥の階段を上る。醸造タンクのうえの空間に造られた中二階にはテーブルが並んでいた。

奥に数人がテーブルを囲んでいるほか、客の姿はなかった。

二人は窓際の空きテーブルに席を取る。奥にいる一人が藤原に手を上げて合図した。一瞬藤原の顔が曇った。

「あの男は同じプロジェクトの仲間ですよ。学生たちでしょう、一緒にいる連中は。で……なににしますか。ピザでも飲みながら、ビールを飲みませんか。いろんなのがありますよ」

地之木は藤原が空港からの車のなかで州立大学があると言っていたのを目指し出しながら、一群に目を向ける。合図した男もこちらを見ている。彼はメニューを見ている藤原に目を移す。

オーダーを取りにきたウェイトレスが立ち去ると、連中に挨拶してくると言いつて藤原は椅子から立ち上がった。

「あそこに合流しませんか。連中が地之木さんの話を聞かれていますよ」

戻ってきた藤原が椅子を引き寄せながら言い、無理強いしても思っているのか、ちらっと彼の顔色を窺う。

「もし温暖化が止まることなく加速していけばカタストロフィクな結末が訪れることになるのですよね」

藤原は突飛とも思える彼の発言の真意を探るような目つきで地之木を見た。それからおもむろに口を開く。

「多分そうなるでしょう。グリーンランドの氷床が溶けるようなことがなければ……、でもそれが……」

「私もあの人たちに伺いたいことがあります。参りましょうか」

米国政府は国連が勧める地球温暖化対策のための二酸化炭素削減に対して極めて消極的だった。

温暖化を防止するために各国が温室効果ガスを削減する枠組みを定めた国際条約「気候変動枠組み条約」が締結され、一九九四年に発効した。これに基づき、温暖化防止のための具体的行動について話し合いがつけられ、一九九七年十二月、京都で開かれた第三回締約国会議（地球温暖化防止京都会議、COP3）で先進国に対して温室効果ガス削減義務を課す「京都議定書」が採択された。この「議定書」は二〇〇四年になって漸く五五カ国の批准（承認）をえて翌二〇〇五年二月一六日に発効したが、世界最大の温室効果ガス排出国である米国は離脱し、参加しようとしなかった。

彼はこのことについて若い連中がどんな意見を持っているのか知りたかった。カタストロフィクな結末の到来を傍観していようというのか。それともこれを回避できると思っているのか。

地之木は藤原のあとにしたがって一群のテーブルに近づいていった。四方から好奇の視線が集中する。彼はこれに耐え、笑顔で挨拶を交わして腰を下ろすと、藤原のプロジェクト仲間だという正面のアンダーソンが顔を向ける。

「プロフェッサー イケダとは会議でよくお会いしますよ。それで地之木さんはいつまでこちらに……」

人懐っこい目がメガネの奥で微笑んでいる。スキーをするのか、ブラウ

ンの短髪に濃い顎髭を生やした丸い顔は雪焼けして浅黒かった。地之木は笑みを返しながら、握手した手が白く毛深かったことを思い出した。

「明日にも帰ろうかと思っっていますが……」

「忙しいのですか。スキーはなさいませんか。」「一緒でできれば……」

「残念ですが、つぎの機会にお願いしましょう。ところで、みなさんと知り合いになれた機会にお訊ねしたいことがあります。実は……」

地之木は例のメールのこと、これについて意見を求めるために藤原を訪ねてきたことを話した。

「それでどんなことですか」

アンダーソンは身を乗り出すようにして彼を急かす。

「では第一問。いま大気中の二酸化炭素濃度が増加して地球が温暖化の傾向にあるようですが、これについてどう考えますか。メールは加速していると警告していますが……」

「地球温暖化についてだ。諸君どう考える」

アンダーソンは学生たちに問い掛ける。

「地球温暖化と二酸化炭素濃度の増加は関係があると思う……」

「いまの温暖化傾向は人間活動にともなう二酸化炭素の放出によるものだろう……」

学生たちは異口同音に地球温暖化は人為的なものだという。アンダーソンも頷きながら聞いている。

「第二問。人間活動による二酸化炭素の放出が続くとすればどうなると思うか。ますます温暖化が進み、さらに加速して破滅的な結末を迎えると思えば、これに対してわれわれはいまどう対応すべきか」

地之木はできるだけ冷静に質問をつづける。

「急激な気候変動か、それとも漸進的な温暖化か。そのどちらかといえば、はじめは漸進的でも徐々に加速して急激な気候変動になるだろう……」

「このままでは急速に温暖化が進むと思うな……」

アンダーソンはグリーンランドの氷床分析から見つかった急激な気候変動のパターンを説明し、問題は大気中の二酸化炭素濃度が増加し続けた場合はどうなるかということだと指摘する。

「シミュレーションの結果はどうなの」

アンダーソンが藤原の顔を覗く。

「多分、北極海へ温かい海水が流れ込み、北極圏を急速に温暖化する。これに対応してグリーンランドの氷床が溶け出し、大量の淡水が北大西洋へ流れ出す。これがコンベンヤールベルトの深層海水生成を妨げ、熱塩海洋大循環を衰退させる。さらに大量の温海水が北極海へ流れ込むと、温暖化がますます加速して氷床を溶かし、大量の淡水が深層海水の生成をストップさせ、大循環が停滞しはじめる。温暖化が次第に緩みはじめ、ゆっくり寒冷化へ向かう。大気中の二酸化炭素などの温室効果ガス濃度も次第に低下して北極海への温かい海水の流入が途絶え、急速に寒冷化し出す。だが、それでも人間活動による二酸化炭素の放出が続く、大気中の二酸化炭素濃度が増加し続くならどうなるか。そうなれば寒冷化に転ずることはなく、温暖化の加速が続くことになるかもしれない。となれば、グリーンランドの氷床など北極圏の水がかなりの勢いで溶け出すということだよ」

藤原がコンピュータの計算結果を思い描きながら、アンダーソンに応える。

「グリーンランドの氷床が全部溶けてしまうのですか。それで海面はどうなるのですか」

赤いセーターの色の男だ。

「全部溶けると六メートル程度上昇するが、全部溶けるまえに寒冷化へ向かうことだろう」

「半分溶けても三メートルですか。北極だけの話ですか」

「南極でも同じようなこと起こる」

「それでは臨海部に限らず、低地は水浸しですね。沿岸都市や臨海工場地帯が壊滅する。それで人間活動にともなう二酸化炭素の放出量も低下していくということですか」

「海面が広がると、海への二酸化炭素の吸収も増大する」

「とにかく壊滅的な被害を被るまで二酸化炭素の放出を続けるか、それとも二酸化炭素の放出を抑えて温暖化の進行を緩和し、被害発生を食い止めるようにするか。きみたちはどう考えるか。どちらを選択すべきか」

アンダーソンが学生たちの顔を見る。

「壊滅的な被害が避けられないなら、言うまでもなく二酸化炭素の放出を減らすほかない。米国は最大の二酸化炭素排出国だから率先して減らすべきだ。だがいまの政権は経済成長優先で二酸化炭素削減には消極的だよ……」

「削減するといってもこの国でどのようにして減らすのだ。車に乗らなければ二酸化炭素も出さなくてすむが、この国でどうやって生活するんだ。すべてが車を前提としている車社会だ。車がなければどこにも行けないじゃないか……」

「電気自動車のような二酸化炭素を出さない車を……でもムリか……」

「社会構造を変えることだ……」

「節約するだけでかなり減らせるはずだよ……」

「節約なんて、知れている……」

「車に乗る回数を減らすとか、ムダな乗り方を止すとか、みんなで工夫すればいろいろあるかも……」

「世界中で一人ひとりが気をつければかなりの量の二酸化炭素を減らすことができると思う……」

「エネルギー消費タイプの技術そのものの見直しも必要ね。省エネタイプの技術開発とか……」

「温暖化だけじゃなくて、資源の浪費も問題ね。これも見直すことだ……」

「現代文明そのものを一度リセットしたら……」

「温暖化で生産量が落ちて穀物や石油などの価格が急騰しても、市場経済のもとでは富裕国に資源が集まる。グローバルで世界市場化が進めば資源を世界中から調達できるだろうから、この国はなにも心配することはない」

「これを見込んでこの国のリーダーは市場経済を堅持してグローバル化を押し進めてきたというわけか」

若者たちはビールの酔いも与ってますます饒舌になっていく。

アンダーソンと藤原が顔を寄せ、小声で話している。ときおり藤原が陰しい表情で頷く。

「……天気予報並の予測……寒冷化に向かわせる方法……」

地之木は若者たちの議論に耳を傾けているふうを装い、二人の話に聞き耳を立てるが、よく聞き取れない。

「そんなことムリだよ」

突然、藤原の大きな声が響く。アンダーソンは大仰に両手を広げた。

「ドクター藤原はモデルづくりの天才だ。気候変動についてもいざれ天気

予報並の予測が可能となるかもしれない。でもそれまで待っていては手遅れだ。水浸しの都市から逃げ出すほかないだろう。だがどこへ逃げ出すといいのか。山の中か。逃げ出した先に今度は寒冷化が襲ってくるのだ」

「それはいつの話ですか。何千年も先の話ではないのですか」

若者のひとりが声を上げる。

「残念ながら、きみたちが生きている時代の話だろうな。温暖化はすでに始まっているのだ。現にグリーンランドの氷床は溶け出し、南極の棚氷が崩壊し出している。温暖化が加速し続け、五〇年後、いや二〇年後には南極や北極でかなりの氷が溶けることだろう。その間、毎年異常気象が世界各地を襲い、われわれは大雨、洪水、暴風、日照り、干害、熱波に苦しめられよう。海面が毎年上昇し続け、やがて低地を水浸しにすることだろう」

不意に、赤々と燃える夕映えの残照に映え、海の中に取り残されたビルの残骸が浮かんだ。地之木はふとゴースタウンと化した大都市が最後の叫びを上げているような気がした。

## 第二章

6

地之木は成田国際空港に降りたとき、その足でオフィスに立ち寄り、一刻も早く仲間に報告しておきたいと思った。だが気が重かった。

サンフランシスコから成田までの間、彼は食事も摂らずほとんど眠りの中にいた。時折、藤原やアンダーソンが夢に現れたが、直ぐ消えていく。彼はまだA C A Rの建物のなかにいるような錯覚のなかで成田に降りたのだった。

機内から外に出たとき、彼は急に尿意を催した。デンバーからサンフランシスコまでの機内で胸の内のざわつきをなんとか抑えようとコーヒーを何杯もお代わりしたことを思い出した。

洗面所で顔を洗っていると、突然、彼の脳裡にホテルから空港まで送ってくれた車の中で藤原が呟くように話していたことが鮮明に蘇ってきた。

「このまま二酸化炭素が増加しつづけると、温暖化は加速して暴走することになるでしょう。たとえ二酸化炭素の放出をゼロにできても大気中の二酸化炭素濃度がすぐ減りだすことはない。海洋や森林などに吸収されなければ、二酸化炭素は大気中にそのまま留まり、何十年何百年にもわたって温室効果をもちつづけるのです。厄介です。できるだけはやく手を打たなければ手の施しようがなくなる……」

温暖化が加速すれば地球上の氷河や氷床が急速に溶け出し、海面が急上昇して臨海部の都市などが水没することになるでしょう。気温上昇で気候

帯が変わり、熱帯や亜熱帯が広がり、温帯や寒帯の森林が消失し、植物や動物に絶滅する種も出ることでしょう。でもこの程度で済まないでしょう……

急激な気候変動は生態系全体にとって極めて強いストレスとなるのですが、生態系を構成する個々の動植物はすでにさまざまな化学合成物質に汚染されたり有害紫外線を受けてかなりのダメージを受けて弱っております。いわばこれらは免疫不全の状態に陥っているため、温暖化による強烈なダメージが加われれば、生態系そのものが広範囲にわたって全面的に崩壊してしまうかもしれません。生態系の構成要素である動植物群が強いストレスに耐えられず、内部的に崩壊するほかないだろうと思われるからです……

さらに懸念されることは、温暖化と他の地球環境問題の複合化による未知の複合的影響であり、それらによる生態系崩壊の加速と拡大です。たとえば温暖化による異常気象は環境汚染を拡大激化することでしょう。肥料や殺虫剤として大量に散布される化学合成物質である農薬や、生産と消費の過程から環境に放置放出されるさまざまな化学合成物質が大雨、洪水や暴風、さらに干害などによってさらに広く拡散され、大気や海洋を通じ地球上の隅々まで汚染しつくすことでしょう……

このようにして地球上をくまなく汚染した化学合成物質は生態系における食物連鎖を通して何千万倍何億倍に濃縮されて、個々の動植物や人間の体内に蓄積されていきます。大気中の窒素酸化物や有機揮発物などの化学合成物質は日射や気温上昇によって反応が促進され、光化学スモッグを頻発させるかもしれません。これにオゾン層破壊によって増加した有害紫外線が加われれば反応がさらに促進することでしょう。ウイルスやバクテリア

が突然変異をおこしたり、激症化して動植物や人間を襲うことでしょう。こうして生態系はさらに倍加したダメージを受けるでしょう……

熱波、大雨、暴風といった異常気象の頻発、異常な気温急上昇、急激な海面上昇など、地球温暖化は地球環境システムそのものを大攪乱するものなのです。急激な気候変動においてはそれらが急激に現れるのです。ですからオゾン層破壊による有害紫外線の増加、化学合成物質による大気汚染や水域汚染といった環境汚染なども当然その大攪乱に取り込まれ、個々の問題が複合化してひとつの塊となって急激な影響をおよぼすことになってしまふ……

当面は温暖化のピークを抑えることが最優先課題ですが、かといって、温暖化対策のみを取り上げ、二酸化炭素の人為的な放出を問題にするだけでは不十分です。環境問題のすべてを対象とする全体的な対策を考え、そのなかで温暖化対策を実施することです……

こんなことは明白なことなのですが、温暖化が暴走しても寒冷化させればいいと単純に考える傾向が結構強い。そんな小手先のことで問題を解決しようとしても、かえって問題を複雑にするばかりでしょう。それにもかかわらず、温暖化を国際政治や経済活動に利用しようとする国際資本の動きすらある。全く嘆かわしいことです……

温暖化などの地球環境問題は地球規模をカバーするものであり、地球上のすべての人々になんらかの影響がおよぶものですが、被る被害がすべての人々に平等かというところではないのですね。強者と弱者では自ずから異なってくる。自由な市場経済下では強いものはますます強くなり、弱いものはますます弱くなる。強者はこの程度の温暖化など屁の河童と思っっているに違いない。中途半端な対策ならむしろやらないほうがいい。邪魔す

る者は消えればいい。この国を牛耳っている連中のなかにはこんなふうにいるふしがありますね……

でも生態系が全面的に崩壊するようなことになれば、誰彼の区別なく、全人類もかならず道連れになることでしょう。人類が生態系に支えられて生きていることを強者も弱者もすっかり忘れてしまっている。生態系が崩壊すれば、これを構成する動植物ともども人類も遠からず消えていくことになるでしょう。いや、逆に、生態系を保持するために、最初に人類が動植物によって消されることになるかもしれません……」

「温暖化が暴走してしまうのですか」

左山はまだ納得できないらしい。彼は左山の顔をじっと見つめた。

「これまでのデータによると、急激な気候変動においては温暖化がピークに達すると寒冷化しはじめるというパターンをたどるが、今回のものはそうならぬらしい。人為的な二酸化炭素の放出が続くかぎり、寒冷化することなくそのまま温暖化がピークにピークを重ねるように進行するということだ」

「暴走の果てが生態系の崩壊ですか、それともグリーンランド氷床の溶解ですか」

右野は念を押す。

「生態系が全面的に崩壊するまえに世界の大都市が水浸しになって現代文明の息の根が止れば、二酸化炭素の人為的放出がゼロになって寒冷化がはじまるのかしら。それとも……」

「中海さん、水浸しが先ですよ。でなければ生態系の崩壊によって人類が滅亡してしまうからね。でも人類が滅亡すれば現代文明もないですよ。」



とにかく、水攻めによって現代文明の崩壊を待つよりも、われわれが自ら二酸化炭素の放出を抑えて人為的増分をゼロにするほかないですよ。でもそのあとが寒冷化というのはどうなんですかね」

左山には寒冷化が気掛りらしい。

「温暖化の暴走が止まればまず寒冷化するわけではないようだ。温暖化から寒冷化に移行する期間もしばらくあるだろうし……、そのあとともそう急激に寒冷化していくわけではないらしい」

過去の急激な気候変動のパターンを見るかぎり、短期間のうちにピークまで上り詰める急激な温暖化のあと、数一〇〇年から数一〇〇〇年にわたって長期間緩慢な寒冷化がつづく。急上昇した気温が長期にわたって徐々に低下していくらしい。

もし現在進行中の温暖化もこのようなパターンをたどるとすれば、とにかく温暖化のピークを抑えることがなによりも重要だ。そのためには二酸化炭素の放出量を抑える必要がある。藤原も指摘していることだ。

だが二酸化炭素の放出をゼロにしても温暖化がすぐ収まることはない。大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスが留まっているかぎり温室効果がつづく。寒冷化するといっても現実には平均気温が下がりだすのは大気中の温室効果ガスが森林や海洋などに吸収されて自然レベルまで減少してからである。

だが生態系には気温や海水温の急激な上昇は激しいストレスになる。そのうえ問題なことは世界各地で生態系を構成する個々の動植物が化学合成物質汚染や酸性雨などによってかなりのダメージを受け、免疫不全のような抵抗力低下や生殖機能障害などさまざまな影響が見られることだ。寒暖や乾湿の振幅の大きい急激な気候変動が大気汚染や海洋汚染など他の環境

問題と複合化すればさらに大きなダメージを与えることになる。

温暖化の暴走の果てに、すでに綻びが見られる生態系が崩壊へと進み、全面的崩壊にいたるのだろうか。地球の生態系が崩壊すれば、否応無しに人類も道連れになるのか。こんなことが果たして現実に起こりうるというのか。

藤原が急激な気候変動の影響として生態系崩壊を指摘したとき、底知れぬ深淵を覗き込んでいるような目をしたのを彼は思い出した。

地球は生まれてから四六億年になる。マグマオーシャンの原始地球から地殻が固まり、固体地球ができあがるまで二億年を要した。さらに数億年経てようやく生命のかけらが誕生する。それから人類が誕生するまでさらに四〇億年前後の時間が必要であった。

このような地球の歴史を地球環境システムの発展段階から見れば、最初には生命が存在しない物質やエネルギーだけのシステムで、いわば物理化学的地球環境システムともいえるべきものであった。この段階のシステムを土台に生命が誕生し、生態系を張り巡らし、新しいつぎの発展段階に至ったのだ。これが第二段階で、いわば生物的地球環境システムというものである。人類が誕生したのはこの段階だった。人類は生物生態系の一員として生まれ育てられてきたのだ。

第二段階に出現した生物たちは当初、あくまでも前段階の物理化学的地球環境システムを土台としてそのなかで順応することによってのみ生息できたのである。言い換えれば、物理化学的地球環境システムの条件のもとでしか生存できない生物集団であった。

生物集団を構成する生物群集は地球環境システムに生起するさまざまな出来事に左右され、何度も絶滅の危機に襲われたものの、このような危機

を進化の契機として生き残り、生物たちは地球環境システムとの一体化を深めていく。各生命体が共生することによって多様な生物群集が生まれ、生命維持システムである生態系を形成する。

さらに安定化を目指して多様な生態系をつくり上げ、危機への備えを強化拡充していく。生物群集が生態系の多様性維持のために選択した戦略方法が「共生」であった。

無尽蔵に降り注ぐ太陽光エネルギーを受け、光合成を行なう植物は草食動物に食べ物を提供する。肉食動物は草食動物を餌とするが、棲む範囲を決め、必要以上の個体を殺すようなことはしない。あるものは生産者であり、あるものは消費者（捕食者）となり、さらにあるものは分解者となる。生物たちは自然（地球環境システム）の摂理に従い、地球環境システムのもとで共生し、安定性と多様性を維持してきた。地球環境システムは最適な方法を求めて生命の進化と促しながら、第一段階の物理化学的地球環境システムから第二段階の生物的地球環境システムへと展開し、両者を融合させてよりよい地球環境システムを築き上げてきたのだ。

そこに人類が誕生した。人類は科学技術文明を生みだし、生物的地球環境システムの摂理を無視して独自の道を歩み、地球環境システムのなかに独自の社会経済システムをつくり出す。

地球環境システムには時間性、空間性、有限性、全体性、階層性といった五つの特性がある。地球環境システムはこのような特性のもとでエントロピー（無秩序）を減少させながら多様化を図り、安定化を目指して進化を遂げてきた。

ところが、生態系の一員として誕生した人類が地球環境システムの特性を無視し、科学技術文明のもとに独自の社会経済システムをつくりだす。

そして生態系を食いものにして地球環境システムの多様性を奪い、安定性を阻害するばかりでなく、地球環境問題を噴出させ、生態系そのものを破壊の危機へ追いやっている。人類は生存基盤である地球環境システムを台無しにして自ら自分の首を絞めているのだ。

人類を生み育てた生態系が崩壊すれば、やはり人類は住処も食べ物も失い、自ら絶滅へと突き進むことになるほかないだろう。なぜこんなことになってしまったのか。どうすれば生態系の崩壊を避け、絶滅の危機を切り抜けることができるのか。

彼は焦点の定まらない目を外に向ける。なにかが動いている。誰かが長い棒を振り回しているように見える。彼は立ち上がってベランダのガラス戸に駆け寄った。天に伸びたクレーンのアームだった。

「昨日から急に工事が始まった」

彼の目を追っていた左山が応える。

「どうしてこんなことになったのか」

「まえから決まっていたそうだよ」

彼は左山の顔をじっと見た。いつもなら大笑いするところだったが、左山のちぐはぐな応えが彼の耳になぜか妙に真実味をもって響く。いまさらもがいて何になる。人類が生態系を大規模に破壊する現代文明を選択したときから、人類は滅亡することが決まっていたのかもしれないのだ。

「温暖化の暴走といい、ダイオキシンやPCBなどの有害化学合成物質の地球規模の汚染といい、一体なぜこんなことになるのですかね。化石燃料や鉱物資源の枯渇、食糧や水の不足など、どうしてこうなるのですかね」

右野が自ら問い、おもむろに立ち上がると、ホワイトボードを引き寄せ

「地之木さん、われわれはどこで間違ったのですかね。世界人口や生活レベルは現代文明の展開過程で右上がりとなりますよね」

右野はホワイトボードに縦軸と横軸を描き、右上がりの曲線を入れる。

「文明の展開に応じて、生活レベルが上がり、人口も増えてきたということね。でも生活レベルの中味が問題ね」

中海が目を光らせる。

「ところで問題は、温暖化や化学合成物質の汚染などによる環境悪化や資源枯渇などの状況が全く同じように右上がり曲線になってしまふことだ。現代文明の展開スピードに合わせてこれらも急上昇していくのはなぜか」

現代文明の進展によって物質的な生活レベルが向上し、世界人口も増加してきた。だが同じように、環境を著しく悪化させ、必要な資源の枯渇をも招いているのだ。

「温暖化の暴走をストップさせるには、生活レベルを下げるか、人口を減らすほかないということになるのか。でもそんなことできると思う？もし生活レベルを下げたくなければ、人口を減らすために殺し合いするほかないというのかい」

左山は困った顔をした。

「ところが、この世の中には自分だけ損せず済まそうと考えている連中がいるんだよ。これからもそんなことができるかどうかは分からないが…」

…

「地之木さん、ほんとですか」

「いま世界人口は六五億人を超えている。二〇五〇年には九〇億人を超えるかもしれない。だが世界人口のすべてが同一の生活レベルをエンジョイしているわけではない……」

生活レベルを高中低の三つのレベルに分けると、現在世界人口のなかで、高レベルに属するのは富裕国の一〇億人、経済成長へ前のめりの発展途上国の中レベルは三五億人、低レベルは最貧国の一五億人だ。高レベルグループは競争の自由を主張し、弱肉強食の掟に従い、権益を守ってきた。自由競争、自由貿易、市場経済、開放政策、グローバリゼーション、これらすべて高レベルグループが自分たちの生活レベルを確保するための手段であり、仕掛けなのだ。これに対して、低レベルグループはか細い声で分配の平等を主張するが、高レベルグループは耳をかそうとしない。ならば追いつき追い越し高レベルグループに加わるほかないと、中レベルグループは懸命にダッシュしてスピードを上げる。

「これまでは高レベルグループが他のグループを犠牲にして、自分たちの高い生活レベルを維持してきたということですかね。でも中レベルグループが高レベルグループに加わればどうなりますか。国際社会では貧困の撲滅が叫ばれていますが、貧困が撲滅されればどうなりますか」

「中レベルグループが追い上げて生活レベルの向上を追求するようになれば、生活資源や食糧の不足が現実のものとなってくる。中レベルグループが高レベルグループに加わることになれば、高レベルと中レベルの四五億人が資源や食糧を奪い合うことになるというわけですかね。いよいよあのグラフ通りの世界となっていく」

「それじゃ、温暖化の暴走がストップするどころか、ますます加速するようになるんじゃないの」

「高レベルの人々がいままでエンジョイしていた生活レベルが維持できなくなればどうなりますかね。やはり、戦争ですか」

「温暖化して気温が一度上昇すれば穀物生産は一割減少するという。年々

人口が増加する一方で穀物生産が減少していくとなればどうなるか。穀物価格は急騰し、最貧国は死活問題だ。世界中に飢えに苦しむ人々が増え、社会不安、暴動、紛争、戦争の火種がいたるところに生じることになるだろう」

「資源や食糧は高中低のレベル間で奪い合いすることができても、温暖化や化学合成物質汚染といった環境悪化は高中低のレベルを区別しない。だが皆が平等に影響を受けるかという受け手の対策の違いで被る被害は異なる。クーラーを持っているものと持っていないものの違いのように」

「世界中が一つになって温暖化の暴走を止めることだ。高レベルグループは生活レベルを抑え、中低グループは人口爆発を抑止する。更新不能な資源の平等な配分と同時に、更新可能なエネルギーの利用技術、省エネ省資源技術や環境改善技術といった新しい技術開発と実用化だ」

左山はようやく元気な声を出す。

「とりあえず、二酸化炭素を放出する石油などの消費量を削減することね、温暖化の暴走を止めるために」

「いや、それだけでは不十分だ。急激な気候変動は生態系を直撃する。生態系が崩壊するようになれば、人類の未来はないのだ。その生態系を構成する個々の動植物はDDT、PCBなど種々の化学合成物質や排気ガスなどですでにかなりダメージを受けている。生態系はすでに内部から蝕まれているのだ。いかなれば、地球上の大半の生態系が免疫不全の状態にあるということだ。だから、生態系の崩壊を回避するためには、温暖化対策ばかりでなく、個々の動植物に直接ダメージを与える化学合成物質などの対策も考えないといけない大問題だ。ほかに、酸性雨、オゾン層破壊など……、まあ、あらゆる環境問題を抑制し、環境悪化を防がなければなら

ないということだ」

「でもまず温暖化の暴走を止めることが先決では……」

「暴走を止めるのは生態系の崩壊を防ぐためだ。極論すれば、温暖化が暴走しても生態系が崩壊しなければいいのだ。だがそれはできない。とにかく当面は二酸化炭素の排出削減と生態系保護保全対策の二面対策が不可欠だよ」

「エネルギー浪費の現代文明を全面的に見直すということね。ということは、地球環境を悪化させる現代文明を見直して、地球環境を悪化させずに生活レベルを向上させるような新しい文明へ転換できればいいのね」

中海が軽い調子でぼつんと言う。

「え？ 文明転換……」

「でもいまの文明を転換するとすれば、全世界を相手にすることですよ。これは至難のことじゃないかしら。かといって、日本だけが新しい文明へ転換しようとしても意味がないしね。この問題は大きすぎて到底わたしたちの手に負えることではないわよ」

中海はこんなことを考えることさえムダだと言わんばかりだ。

「もちろん、一気に現代文明を新しい文明へ転換することはムリだ。徐々に手直ししていくことはできないかな。小さいことから始めて、次第に全体におよぶようにしていくようなことができれば……」

彼には文明転換というアイデアが極めて新鮮に響いた。

当初、彼は当面の緊急対応として地球温暖化をターゲットに二酸化炭素削減を念頭においていた。まず、エネルギーの浪費を止め、エネルギーの節約を図ることで大気中へ放出する二酸化炭素の量を少しでも減らせばいいと考えていた。

だが彼はこの考えが通りであることを藤原に気付かされたのだった。空港への車のなかで前方に目を向けたまま、まるで自分に言い聞かせるように話していた藤原の妙に抑揚を抑えた声がふたたび蘇ってきた。

地球温暖化だけが他の地球環境問題から孤立しているのではない。地球温暖化に、オゾン層破壊や海洋汚染、それに森林破壊、砂漠化など、さまざまな地球環境問題が地球温暖化によって攪乱された地球環境システムのなかで絡み合って複合化し、一体となってひとつの問題群としての複合地球環境問題を形成しているのだ。

環境問題は地域からはじまり、地球規模に広がっていった地球環境問題へと発展する。ある地域で放出された環境汚染物質などの原因体はその地域の環境容量を超えて外へ溢れ出て広がっていき地球環境問題を惹起する。

ということは地球環境問題とは地球の有限な容量とかかわる問題であり、地球環境問題は地球の大きさが有限であるために発生する問題であるということだ。地球温暖化とかオゾン層破壊といった別々の地球環境問題でも同じ根から生じた問題であり、これらは地球というひとつの限られた容れもののなかでこっちゃん混ぜになって複合化しているということである。

とすれば、地球温暖化だけを取りだしてこれのみをターゲットにしても意味がない。というのは、地球環境システムのような有限性の支配するところではそこで生起する事象が個々に孤立しているのではなく、事象を構成する要因要素レベルまで複雑に絡み合い、相互に密接不可分に結び付いて全体を構成しているからだ。となれば、地球温暖化の対策といえども、二酸化炭素の排出量を抑制するだけでは足りず、元凶である現代文明（現代科学技術文明）を全面的に見直すほかにないということになるのだ。さもなければ、地球環境問題が改善することも解消することもなく、その果て

に生態系が崩壊して人類も滅亡するか、それともそれより先にグリーンランドや南極の氷床が溶けて、世界中が水浸しになるかのいずれかだろう。

とはいえ、いかにすれば現代文明を見直し、新しい文明へと転換できるというのか。一体どうすればいいのか。どんな方法があるというのか。

彼は自問自答を繰り返す。

なぜ現代文明が人類を道連れするような地球環境問題をつぎからつぎに噴出させるのか。それにしてもなぜ現代文明がこうも巨大化高度化大量化していったのか。もし現代文明が巨大化高度化大量化していなければ、たとえ環境問題を発生させたとしても地球規模の地球環境問題となることはないだろうし、人類を道連れするようなことにもならなかったのではあるまいか。

目の前に突然岩石だらけの荒野を彷徨う人類の後ろ姿が浮かんだ。ポロを纏い憔悴しきった老若男女の群れが地平を目指し重い足を運ぶ。幼児の手を引き赤ん坊を抱いた母親たちが歩き疲れて路傍で助けを求めて手を差し伸べているが、目も耳も失い、ただ歩くことしかできないのか、道行く人は誰一人目をくれようとしない。

彼はそのとき、人類が生態系の一員であることを自ら放棄し、現代文明を構築しはじめたことが今日の生態系崩壊のはじまりであることを悟った。自分を育み育ててくれた生態系を征服し、わがもの顔に蹂躪し、現代文明の巨大化高度化大量化を図ってきた人類にはもはや生態系の崩壊を防ぐ術がないのだ。人類はもはや消えていくほかない。

「地球環境問題が発生するまえから、人類は生態系を蔑ろにしてきている。生態系を活用してきた農耕は、いまでは生態系の活用というより分断しているのだ。単一種栽培の大規模農業は生態系の単純化であり、生態系を脆

弱化するものだ。かつて地球上で何百種類も栽培されていた穀類がいまではコメ、大麦、小麦、トウモロコシの四種類で大半を占めている。都市もそうだ。人類は生態系を切り裂いて現代文明を展開させてきたのだ。文明化とともに生物の多様性を喪失し、現代文明にいたって地球環境問題を発生させてしまい、生態系の全面的崩壊の危機を招来してしまった。人類は自らが生まれ育った生態系を文明の展開を通して都市を開発し、生態系を脆弱化してきたと言える。自分で自分の首を絞めていることに気付かずかね」

地之木は自分を笑いたかった。だが口がゆがんだだけであった。

7

「ACARへ行ってきたんだって……」

受話器の奥から池田の驚いたようないつもと違った甲高い声が響いた。

「うん、明日にでもそっちに行くよ」

地之木はもう一眠りしたかった。受話器を乱暴に戻すと、彼はふたたび机にうつ伏せになった。

朦朧とした意識のなかに一部妙に透明に澄んだ部分があった。そこは底なしの深淵のようにも見える。彼はおそろおそろ近づく。足を踏み外したのか、身体がふわふわと落下していく。浮遊感のなかで彼は自分の名が呼ばれているような気がした。

「地之木さん」

中海が身体を揺すっていた。

「起きた……、池田さんが……」

応接セットのソファにいつもより小さく縮こまった池田がいた。

「なんだ、やってきたのか。今到着いたんだ」

地之木は大きな欠伸をした。

「アンダーソンからメールがあつてね……」

池田は顔を寄せて彼を覗き込む。藤原がどんな話をしたか早く聞きたいらしい。

彼は仲間たちに話したことを機械的に繰り返す。

「温暖化が暴走するか……、藤原らしいな」

「で、温暖化を国際政治や経済活動に利用しようとする動きや陰謀があるのか」

彼は車の中で藤原が呟くように言っていたことを思い出した。

「え？ そんなこと言ってたのか」

「いや、はっきり言っていたわけではないが……」

「まあから環境操作を兵器に利用しようという考えがあるにはあった。環境兵器のことだ。ある地域の気候を自在にコントロールできれば、これは究極の兵器となるというわけだ。生活用水や穀物生産まで支配できる」

地球温暖化の影響が各国まちまちであることがこの問題の扱いを複雑にしているという。生態系や健康への影響はもちろん、政治、社会、経済の全般にまで影響が及ぶ。国際社会ではこれを巡っているいろいろな駆け引きが行われるのだ。

米国政府が二酸化炭素削減に消極的で、京都議定書締結にも参加しようとならないのは石油資本の影響にちがいない。米石油資本はまあから温暖化に非常に関心を示してきた。だが石油資本だけじゃない。国防省もそうだ。

情報機関や軍需産業もそうだった。企業の存続や国の安全に関わることだからだ。

「温暖化をめぐるっていろいろな思惑や噂が絶えないんだよ。もし温暖化が暴走するとしたら……、もし一〇年、二〇年のスパンでピークに向かうとなれば、いろんな動きが出てくるだろうな。ACARは軍関係の研究機関じゃないけど、藤原が参加しているプロジェクトのメンバーに軍関係の研究機関に所属している研究者が入っている。彼らはどうしたら寒冷化に向かうのかについて関心をもってしている。温暖化の制御に利用できないかと、そのメカニズムをやっきとなって説明しようとしているらしい。温暖化の加速が避けられないものとなったとしたら、ますますその動きが熱を帯びてくるにちがいない……」

地之木はふとアンダーソンが小声で藤原と話していたことを思う出した。あのととき、たしか寒冷化の方法とか言っていたような気がした。するとアンダーソンもそれに関係しているというのか。

「環境兵器の開発のため？」  
「まあね。温暖化を回避することは、現体制を維持するためにも必要なこと」

「そんなことよりも大型車を取り回して湯水のように使っている石油の消費を抑え、二酸化炭素の排出量を削減するほうが真実じゃないの、あの国は」

「石油資本がウンと言わない」  
「ホントに石油資本かね」

「現在投機的に石油価格が上昇しているが、あれも市場を操作して意図的にやっているのじゃないかと思うよ。石油価格が高くなれば、コストがか

かるところでも採掘が可能になるからね」

「石油資源が枯渇しはじめているから価格が上昇しているんじゃないの。埋蔵量が底を突きだしているのと違うの……」

「金をかけることができれば地球にはまだまだ石油がある。それに石油価格をつり上げて消費量が増えだした中国やインドなどの追い上げに水を差す狙いもあるかも」

「だからといって、二酸化炭素をじゃんじゃん出しても寒冷化できればいいというわけじゃないだろうな」

「シベリアには石油や天然ガスが豊富に埋蔵されている。温暖化が進むとどうなると思うかね」

「凍土が溶け出せば現在採掘中の井戸など、生産設備はダメージを受けるだろうが、凍土が溶けてしまえば逆に新規採掘が容易になるだろう」

「温暖化が進むなか、それぞれの思惑のもとで、米国はテロを口実に石油のあるイラクに進攻し、ロシアは石油資本をなんとか国の影響下におこうとしている」

「枯渇しつつある石油に命運をかける気なのかね」

「いくら偉そうなことを言っても、所詮金儲けしようとする連中は目先のことしか見ようとしなないんだ。温暖化が加速して進んでいるというのに」  
二人はしばらく沈黙のなかにいた。

温暖化が現実の問題として認識されてからすでに二、三〇年を経ているが、いまもって二酸化炭素を放出する石油、天然ガス、石炭といった化石燃料を大量に消費し続けている。エネルギー産業は今後もこのような状況が続くものと考え、またこれを続けさせようとしているのだ。一体これはどういうことだ。現実を目をつむり、温暖化を甘く見ているのか。それと

も化石燃料に代わるエネルギー源がないというのか。化石燃料ほど手取り早いものがないからか。面倒な技術開発を回避して一番金儲けになるからなのか。枯渇するまでとことん掘り出し消費してしまおうという魂胆なのか。彼らは二酸化炭素を放出しようが、有害な重金属が混じっているのが知っちゃいないのだ。

地之木は大気中への二酸化炭素の大量放出がつづき、温暖化が急速にピークへ向い、さらにピークへとピークを重ね、暴走するさまを思い描く。

世界各地を極度の異常気象が襲い、熱波、日照り、大雨、暴風、洪水、干害が頻発する。快適な温帯域が消え、熱帯域と化して、マリアアや西ナイル熱など熱帯地方の風土病を媒介する蚊が群がり、人々を襲う。シベリアの永久凍土が溶け出し、そこに閉じ込められていた温室効果ガスのメタンが大量に大気中へ放出し、さらに温暖化が加速する。ヒマラヤやアルプスの氷河を後退させ、グリーンランドや西南極の氷床を崩壊させる。海面が急上昇しはじめ、海岸を侵食し、都市や工場地帯が水浸しになり、水没していく。

「温暖化が進むなか、世界人口が増えつづけているが、増大する食糧需要に応えることができるのだろうか。人口増加を抑え、生活を見直し、エネルギーを節約することができなければ、到底温暖化を抑制することはできない」

「温暖化がつづけば異常気象がますます頻発し、世界の穀物生産が落ち込み、世界各地で食糧不足に悩まされることになる」

「だが当分人口増加はつづくだろうし、二酸化炭素も増加しつづけるだろうな。誰もこれまでの生活を変えようとしないうからなら。一度味を占めたものは自らこれを変えようとしないうからなら、またできることでもな

い」

「大都市が水没し、大量の飢えた人々が出てもか」

「それでも二酸化炭素の増加を抑えられることはできないだろうな」

「できるかできないかじゃない。なんとかやるしかない、人類が生き残るためには……」

「どんな方法でやるんだ。方法があるというのか」

彼は池田の暗い顔から目を離れた。二人はふたたび黙りこくって深い沈黙に沈んでいった。

8

「黄砂かな」

地之木はベランダのガラス戸越しに空を見上げる。朝はなんとも感じなかった空が霞み出し、黄色味を帯びていた。

例年日本列島を襲う黄砂はタクラマカン砂漠やゴビ砂漠から春先の強風に舞い上げられた砂ほこりであるが、黄砂は単なる小さな砂粒の集まりではない。飛来する黄砂は視程を妨げるばかりでなく、通過する中国の都市や工場地帯の大気汚染物質や農耕地で散布された農薬などさまざまな物質や微生物を取り込み、複合汚染物質と化している。黄砂は偏西風に運ばれ、中国、朝鮮半島を覆い、日本列島を越え、北米大陸東海岸へ達する。黄砂は東アジア地域の汚染物質を国境を越えて運ぶ国際的運び屋だった。

「年々酷くなるじゃないか。これも温暖化のせいですか」

左山が背後から空をのぞく。



「温暖化で砂漠化が進んだり、強風が頻発するようになったせいなのかな。でもダスト（微粒子の塵）には地球を冷ます日傘効果もある。もっとも粒子の大きさにもよるらしいが……」

粒子には日射を反射する冷却効果と日射を吸収して熱を帯び大気を暖める効果の相反する二種類の働きがあるが、どちらに働くかは粒子の大きさや形状によるのだ。

「さまざまな大きさや形のものがあるんだろうね。それに含まれているものもさまざまということか」

風で運ばれるダストは中国北西部からだけのものではない。さまざまなところから飛来する。アフリカのサワラ砂漠など世界には大きい砂漠が方々にある。砂漠に限らず、乾燥化または半乾燥化している農耕地も多い。

ダストには地域特有の物質が含まれている。アルミニウム、シリコン、鉄の多いものやリン酸塩、硝酸塩、硫酸塩といった栄養素を含んでいたりと、なかにはDDTといったすでに多くの国で使用が禁止されている農薬が含まれていることもある。人糞や動物の排泄物にさまざまな腐敗物が混じった汚泥も乾燥してダストになる。また微生物、医薬品、抗生物質、化学合成物質、重金属などを含んでいることもある。これらのなかには発ガン性物質や環境ホルモン（内分泌攪乱性物質）もあるにちがいない。粒子の極く小さなダストは人間の肺の奥まで入り込み、健康に重大な影響をおよぼすが、ダストは小さいほど遠くに飛んでいくのだ。

「マラリア対策として媒介する蚊の駆除に使用された残留性の高いDDTなどの殺虫剤が世界を駆け巡り、食物連鎖を通して高濃度化し、使用禁止している国の人々の体内にも大量に蓄積されている」

「え？ 温暖化が環境汚染物質の拡散平準化に寄与しているというの。特

定の地域規模の環境汚染を地球全域規模の環境汚染にしてしまうわけ」

左山は目を大きくして空を見上げている地之木の顔をじっと見る。

しばらく二人は空を見ていたが、右野が顔を見せたのを機に応接セットに戻る。つづいて中海が現れ、会議がはじまる。

「いま生態系崩壊の危機に直面しているとすれば、なんとかこれを打開しなければならぬ。ではどうするか。『現代文明を新しい文明へ転換すること』だ。これがわれわれの行動目的だ。とすれば実現すべき目標は新しい文明の実現ということになる。では具体的に実現目標をどう設定するかが問題だ。具体的な実現目標が決まれば、このための実行計画を作り、これを実施すればいい」

右野は任せておけと言わんばかりに声を張り上げる。

「新しい文明は『有限な地球に適した文明』ということかしら。無制限前提の現代文明を破棄して有限性支配の文明を実現することだね」

「晩寝てリフレッシュしたのか、中海は右野の声色を真似て幾分明るい声で言う。

「まあ、言葉で言えば、そんなところだろうが、問題はその内容であり、それをどうやって実現するかだ。その担い手は誰か。なにしろ全世界が対象だからなあ。どうしますか、地之木さん」

個々の患者相手の医師には想像を超えているのか、左山は途方に暮れたような眼差しを地之木に向けた。

地之木は口を開こうとしない。現代文明を見直さなければならぬことは分かっている。だが新しい文明への転換となるとまるで宙を掴むような気分が襲われてしまうのだ。

池田の暗い顔がちらつく。彼はすっかり迷っていた。

新しい文明とはどんなものか。巨大化高度化大量化した現代文明を新しい文明へ転換するための戦略戦術をどう考えればいいのか。というより文明を転換することが一体可能なのか。そもそも文明転換ということは考えうることなのか。

「実現目標が決まっているんだから、それに合わせて実行計画をつくれればいいんだよ。これをみんな力で合わせて実現することだ」

右野は相変わらず単純で強気だ。

この種の計画化手法は、実現目標と現況とのギャップを対象として、これを効果的に解決解消する方法や手順が考え、これを計画的に実行して目標の実現を図ろうとするものだ。このためにはまず目標を具体的に設定することと現況を正確に把握することがポイントとなる。これができないと実行計画の対象となる両者のギャップを明確に把握することができないからである。

「右野さんは簡単にそう言うけど、目標そのものの設定が問題じゃないの。みんなが納得するようなものを具体的にどんなふうにかえるのかしら」

中海は一度右野に目を向けてから、口を閉ざしたままの地之木にちらっと目を走らせる。

「そうでしょう、問題は……」

彼は自分の考えをなんとか纏めようと思いつつ、三人の仲間の議論に耳を傾けていた。中海の甲高い声を耳にした途端、彼は目の前を覆っていた靄が消えていくように感じた。

「そうだね。有限な地球を前提とする新しい文明は現代文明とはかなり異なることだろうが、かといってまるっきり正反対ではあるまい。それに考えておかなければならないことは、有限な地球を前提とするといっても、

これだけで文明の中身までがア priori に決まるものではないということだ。文明は所詮多様な人間活動から産み出される多様な所産の集積といったものだから」

急に饒舌になった彼に三人の視線が集まる。

「ということは、新しい文明の中味を前もって特定することはできないということかしら。となれば実行計画の目標を具体的に描けないことになる……」

「特定することはできないのじゃなくて、特定しても意味がないということかな……」

「とすると、新しい文明への転換実行計画そのものがつくれないということになるのか」

右野が気色ばむ。

「それはわれわれには……、もはや現代文明から抜け出る方法がないということ？ 現代文明と心中するほかないのかい」

左山がつづく。

「そうじゃなくて、この種のケースでは右野式アプローチじゃなくて、全く別の方法を考える必要があるということかな」

彼は右野の目に不満の色を感じて、さらに説明をつづける。

「あらゆる情報が分かっているようなケース、いわば完全に情報を支配できるような場合には目標を設定してこれと現実との乖離を埋める方法や手順を決めて実行する右野方式アプローチは非常に効果的で、まさに最適なアプローチなんだが、新しい文明のような中味が特定されていないケースでは、これに関する情報自体が決定的に不足しているので、この種の手法を適用することは妥当でないのだよ」

文明のようないわば動的な複雑系のシステムでは、われわれ人間がこれについての情報を完全に手に入れることも、また自由に操作し支配することは至難というより不可能なことである。たとえ一時的に情報を完全に支配できたとしても、複雑過ぎてこれを操作することがまた難しいだろう。

この種のケースにおける情報はつねに動的で、いわば増殖過程にあるのだ。「なるほど。でも新しい文明への転換が急を要することであれば、取り敢えず、大枠だけ決めて、転換への最適な道筋を探ることが必要じゃないのかなあ」

「そうできればね。どうしてもというのであれば、まず大まかな枠組みを設定して仮の実行計画を作って実施する一方、新しい情報が見つければ、その都度実行計画を見直すといったことを繰り返すことになるね。これも前もって、なんとか新しい文明の大枠を決めることが可能であればできることだがね。それができれば悪いところを部分的に取り除いていくほかないが、実際できるかな」

「……………」

「目標を設定するにしても、新しい文明で基本となるのは有限な地球ということになるが、これをどうイメージする？ まあ、地球が宇宙船のようなものだとしても、人間が活動可能な空間の大きさや容量をどうやって決める？ こんなことに時間をかけては、結果的に遠回りすることになりかねない。それでも目的地に到達できればいいが、無駄骨になる可能性も高い」

「完全情報を前提とするのがムリなら、不完全情報を前提にした手法を考えればいいじゃないの」

「そういうことになるね。右野くん、どうかな」

彼はどうしても右野の専門知識を活用したかった。

「新しい文明の大枠というか、基本構造というか……………これだけを考えておいて、先に進んでは……………」

左山が急かす。

「そうだね。新しい文明は未来にかかわることだから、取りあえず、最終的なゴールは有限な地球にマッチする文明ということにして、それを目指して当面は現代文明の見直しに重点を置くことにしてはどうかな」

「それで具体的な行動計画を立てることができるなら……………、いいわ」  
「で、具体的にどう考えるか」

左山は相変らず自分に言い聞かせるように呟く。彼は説明をつづける。

「新しい文明は現実の地球を前提とする。これは地球を支配する有限性を基本的前提とするということだ。有限な地球では地球の環境容量（地球環境容量）も有限である。それゆえ、ここでは宇宙船のごとき厳密な管理を考える必要がある。すなわち、人間活動（文明活動）は地球の限界からはみ出さないように注意しながら、地球の有する環境容量に合わせて行なうことが新しい文明の基本となる。これを前提に、現代文明を見直すのだ。とはいっても、はじめから方向性を決めて人間活動を拘束することは妥当ではないが、かといってこれまでのように野放図というわけにはいかない……………」

「そんなこと考えることができるの」

中海には深い目をした。

「今日地球環境問題の噴出を招いている現代文明の問題点として、まず、地球と人間活動の関係を探る必要があると思う」

左山は口の中で「なるほど」と呟き、大きく頷く。中海と右野も左山を

見習う。

地球（自然）対人間の関係をみれば、われわれ人間は地球環境システムから独立して生きているのではなく、地球環境システムのなかの一要素として他の要素と全体的な相互依存関係のもとで生かされているということだ。それゆえ、人間本位に考えずに、地球（自然）と人間の関係を一元論的に捉え、地球環境システムのなかのヒト（人間）であり、人間を地球環境システムそのものを形成している一要素と考えなければならぬ。われわれ人間は有限な地球の構成要素のひとつであり、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

また有限な地球はひとつの全体を形成しているもので、個々の構成要素とはいえバラバラに独立して存在するものではなく、これらはすべて他の構成要素と相互依存の関係のもとでひとつの全体として地球環境システムを構成しているのである。われわれ人類はそのなかで生まれ生かされているのであり、これらと無関係に別個独立して存在し生きているものではない。

「現代文明の最大の問題点は無限性を前提とする『プラス』最大化原理のもとに、地球（自然）の征服・支配を野放図に押し進めたことだ。地球温暖化など今日噴出している地球環境問題は、現代文明が巨大化高度化大量化を重ねてきた結果、現実の地球が有する有限な壁と衝突して生じたものだ。それゆえ、地球環境問題を産み出す構造や仕組みを取り除くことに焦点を置いて現代文明を見直してはどうか」

「では個々の温暖化対策を試みるということ……」

三人から失望の声が漏れた。

「そう。それを通して無限性を前提とする現代文明の行動原理を変え、従

来のシステムを改善していくのだよ……」

これまで日本をはじめ各国で試みられてきた各種の公害規制や環境アセスメントの制度化などさまざまな対策や持続可能な社会を目指す循環型経済社会システムの構築などはそのひとつの試みといえるが、これらは現代文明を変えようというより、むしろ延命策の域を出ないものばかりだ。というのも、これらは現代文明の基本である無限性を前提とする地球（自然）の征服・支配という構造を見直し、変革するものでないからだ。

「そうか。有限な地球の現実を無視するなら、地球環境問題の噴出がいつき、人間の生存条件が一層劣悪化することは避けられないよね。これではいづれ、生態系は崩壊し出し、人類は絶滅の危機を迎えることになる。これを回避するためには、無限性を前提とする行動原理に換えて、現実の有限な世界（地球）を前提とする行動原理への転換を計るということだね。で、その行動原理は……」

左山がまた自分に言い聞かせる。

「わたしは地球のイメージを空間的規模や容量に限りがある巨大な宇宙船のようなものと描いているんだが……、さまざまな生き物が棲んでいる小ささまざまな部屋（空間）があるが、空間的広がりや容量には限りがある。そこでまず、われわれ人類や生物への悪影響を取り除き、船内をクリーンに保つことだ。いわば地球環境対策の徹底だ」

「一人ひとりが行えることは地球環境問題の原因となるものなどをできるだけ少なくすることかしら。エネルギーを節約するとか、このようなことを積み重ねることよ」

「地球環境問題などといった『マイナス』を最小化するのだね」

行動に際して自分の欲するもの（『プラス』）を優先して最大化するこ

とを「プラス最大化」行動原理と名付ければ、これに対して、地球環境問題のような「マイナス」と思われるものをまず最小化するのが「マイナス最小化」行動原理である。前者の「プラス最大化」が現代文明の行動原理であり、これに代わる新しい行動原理が後者の「マイナス最小化」であるというわけだ。

「マイナス最小化」行動原理では行動に先立ち「マイナス」をチェックし、行動のまえに対策を講じて「マイナス」を最小化するのだ。それでも「マイナス」を最小化できなければ行動を取り止めるほかない。

現代文明の行動原理は「プラス最大化」であり、個々の「プラス」を追求するためにエネルギーを浪費して石油などの化石燃料資源が枯渇することも眼中にない。だからこの行動原理に代えて「マイナス最小化」を徹底することができれば、その都度「マイナス」を取り除くことになり、こうすることで「プラス」至上主義の現代文明の暴走を抑え、新しい文明への扉を開くことができるかもしれないのだ。

「最初は極めて不完全でも、できるところから『マイナス最小化』を繰り返えし、次第に範囲を拡大していけばいい。まず現代文明の暴走を抑える。それから新しい文明を目指す。現代文明は今日まで、明日から新しい文明だ、というふうにしようとしてもできるものではない。劇的な文明転換なんて土台現実的とは思えないからね。なし崩しに行なうほかないと思うよ」

「では『マイナス』と『プラス』をどうやって区別するのかな。やはり分かり易いなんらかの具体的な基準が必要だろう」

「限界を超えているものはすべて『マイナス』よね」

「それでは曖昧すぎる」

「まぢまぢな基準では問題だ。ターゲットとする『マイナス』を客観的基

準で明確にすることが必要だね。これに基づき、『マイナス』最小化を図る運動を日本から全世界に広げていく」

「当面は地球環境問題だけを対象にしてはどうかしら」

「いや、最初からはつきり『マイナス』の範囲を決めてしまっていないんじゃないかな。そのかわり優先順位を決めておくのがいい。徐々に範囲を広げていくとどこまで広がっていくのか不安を覚えるひともいるかもしれないからな」

「誰にも分かるように『マイナス』の範囲を最初から明確しておくほうがみんなの協力をうるためには戦略的かも。それにそんなに悠長に構えている時間が残されていないじゃないか」

地之木は一人では手に負えない問題であることは十分承知していた。前に進むためにとにかく仲間の同意を得ておきたかった。そのためには「マイナス」を分かり易い範囲に限定したほうがいいと思っていたのだが、果たしてできるのか。

「『マイナス最小化』の対象は現代文明がもたらす『マイナス』のすべてだが、当面はそのなかから優先順位を決めて取り上げることにしよう」

「『マイナス』には直接人間に関わる生存条件や活動条件などのほかに、地球の有限性に関わるもの、地球システムに関わるものもある。有限の世界では『プラス』といえども限度を超えれば転化して『マイナス』となるからだ。これらの『マイナス』すべてが行動原理の対象となるが、取りあえず分かりやすい形で優先順位を決め、当面のターゲットを絞り込むというわけだ。」

彼はダメを押すように、目をゆっくり左山、右野、中海へと移す。

「それだけでは足りないのでは……」

中海が考えながら呟く。

「え？ なにが……」

左山が即座に反応する。

「だっていくら『マイナス』を最小化しても『マイナス』を産み出す現代文明システムそのものをもターゲットにしなければ、新たな『マイナス』がつぎからつぎに産み出されていつまで経っても『マイナス』がなくならないんじゃないの」

「『マイナス』を再生産するシステムも『マイナス』じゃないか」

「うん、そういうことになるな。『マイナス最小化』を定着させて現代文明の暴走にブレーキをかけて減速するとともに、現代文明システムを見直して問題点を取り除くことになる」

「大量生産大量消費大量廃棄システムもターゲットだ」

「科学や技術の見直し、政治システムや経済システムの改革、社会システムや都市の改造などだね」

「だが問題はどのように変えるかだ。ヘタをすると現代文明の延命策に終わる」

現代文明が延命しても生態系崩壊は避けられない。どうしても現代文明システムを新しい文明へと変換する必要がある。だが現代文明システムをどのように変えればいいのか。

「現代文明システムを放置しておくわけにはいかない。生態系崩壊によってわれわれ人類が道連れにされるかもしれないのに、無為に現代文明システムの自壊を待つこともあるまい。より積極的に作り替えていくべきだ」

左山が地之木を代弁するように言う。

「そうよ。即刻現代文明の『マイナス』を最小化する運動と現代文明シス

テムを見直す行動を起こしましょう。こうして現代文明の綻びを突いて、現代文明の見直しから新しい文明への転換を促すことだわ。人類一人ひとりに地球を守る義務があるのよ。議論はもういいわ。さあ、やりましょう。でも、殺し合いは無しよ。反対者には説得して納得させること。戦争になっ

ては元も子もないわ」

中海は住民運動家の顔になった。

「じゃ、覚悟を決めよう。この仕事は生半可なものじゃないんだからね。当面のターゲットは地球環境問題だが、究極のターゲットは現代文明のモ

たらす『マイナス』のすべてであり、『マイナス』をもたらす現代文明システムそのものが相手だからね。いいね」

地之木は念を押すように三人の仲間の顔をひとりづつゆっくり見回しながら、自分に言い聞かせるように言う。

中海が目を輝かせた。左山と右野が頷く。

「エンドレスの仕事になるかもしれないが……」

「道連れよりマシよ。そうよね」

左山と右野が中海に大きく頷く。

彼は三人の仲間たちと交互に目を合わせた。頭のなかからもやもやしていたものが消え、彼に重くのしかかっていた躊躇いがいつの間にか吹っ切れてしまっているのを感じた。

9

冷房車からホームに吐き出された途端、地之木は宙に浮いたような気分

に襲われた。彼はホームの柱につかまり乗降客の大群をやり過ごし、気分が落ち着くのを待つ。

乗降客が去って、ホームは打って変わって閑散となった。彼はおもむろに柱から離れ、ベンチを探した。熱風が吹きつける。ベンチに近付くが、熱風が彼を追いかける。熱風を振り切るようにベンチの前を通り過ぎると、彼は改札口への階段を下りていく。

階段下のホールにはつぎの電車を待っている人の群れがあった。彼は頭上の吹出口から吹きつける冷気を浴びて一息入ると、駅前の雑踏を縫い、歩道にはみ出して並べられた商品を避けながら、商店街を通り抜け、オフィスに向かう。

薄汚れた灰色の大气を通して、濁った陽光が彼に纏わりつき、背を焼く。クーラーから吐き出された熱い排気が頬を撫でる。彼は知らず知らず足速を速める。

オフィスにはまだ誰も来ていなかった。ドアを開くと、古い建物特有の臭気が鼻を突く。室内にこもった熱気が彼を包む。彼は一瞬身を引く。呼吸を止め、急いでベランダのガラス戸をいっばいに開いた。熱風が吹き込む。

彼はクーラーを入れようとして、躊躇った。クーラーを入れれば室内が涼しくなるが、外に吐きだされた室内の熱気が外気をさらに温めてしまう。悪循環だ。それは豊かな生活を求めて電気エネルギーを浪費し、環境を悪化する現代文明の典型そのものだった。自ら二酸化炭素を放出して温暖化の原因をつくり出しておきながら、熱いと言ってクーラーをまわす。

突然、無意識で通り過ぎてきた駅前の商店街が浮かんだ。いつもならいそいそと商品を並べる店員たちの動きに活気が醸し出されていた商店街に

はかれらの姿がなかった。濁った陽光を浴びた商品の山が熱風に曝され、死んだように沈んでいた。

彼は一瞬、街が熱風を浴びて悲鳴を上げていたように思えた。都市がゴーストタウン化しはじめているのではないかと感じた。その瞬間、巨大ビル群が廃虚と化し、都市が崩壊していく様子がまさまじと目に浮かんだ。

彼はしばらく、都市崩壊のパノラマのなかに立ちつくしていた。地球の片隅で小さくなって生きてきた人類が独自の文明社会を築き、地球の支配者となり、地球の資源や生態系を思うままに利用してさまざまな便益を得てきた。だが人類はいつのまにか、便益を与えてくれた文明に首根っこを鷲掴みにされていたのだ。

熱風が彼の顔に向かって吹きつけた。

彼は我に返った。その途端、顔面一杯に汗を垂らして駆け込んでくる左山、中海、右野が浮かんだ。彼は躊躇いを押し退けて、急いでクーラーのスイッチを入れた。

クーラーから冷気が吹き出す。彼は冷気をまともに顔に受け、一瞬眩暈を感じて椅子の崩れ込む。

四人組は行動計画についての議論のあと、具体的な行動戦略を巡って意見が分かれた。調整するのに時間がかかったが、結局、新しい文明をめざす現代文明の見直しをスムーズに行なうために、当面の作戦として、新しい文明の間に継続性をもたせて現代文明の見直しを実行することになった。

巨大化高度化大量化している現代文明を急激に転換すればこれにとまなう犠牲や混乱も巨大化高度化大量化するにちがいない。とすれば、転換にともなう犠牲や混乱を最小限度に抑えることが最優先課題となる。そればかりでなく、新しい文明への転換をスムーズに行なうことは、現代文明擁

護派の反対を極力抑え、結果的に文明転換活動にできるだけ多くの人びとの参加を促すことにもなるのだ。

だがスムーズな文明転換をどう進めるかがつきなる難問であった。

地球温暖化などの地球環境問題対策を通して現代文明の見直しを進めるとしても、一個人や一国でどうこうできることではない。たとえ精一杯やったところで高が知れている。日本だけが地球環境問題の原因体の放出放置を未然に防いだとしても、その他の国々の協力がなければ地球環境問題を解消することは不可能である。だが日本だけでも地球環境問題の原因体の放出放置を未然に防げば、日本から地球に溢れ出る原因体がそれだけ少なくなり、幾分なりとも地球環境問題の解消に役立つことになるのだ。それに日本が環境問題の原因体発生の未然防止に成功したことを世界が知れば、これを見習う国が出てくるはずだ。これがドミノ倒しの様に広がれば新しい文明へ至るかもしれないではないか。

「でもそれはまるで『賽の河原の石積み』のような作業になるんじゃないかしら」

「闇雲にやっても効果がない。だから、どういう筋道でどのように進めるかが重要なんだ。それにみんなにその気にさせることだ。これにはまず実現目標となるトータルビジョンと具体的な分かり易い実行計画をつくることだ」

今回は右野の意見に従って、簡潔な行動宣言が載せた「未来の代理人」のホームページが新しく編集され、公開された。そのなかには「地球環境倫理の確立」「現代文明の暴走阻止のための行動原理の転換」「現代文明システムの見直しと新しい文明システムの構築」「新しい文明のサポートシステムの構築」といった項目もあったが、まず地球環境問題をターゲット

とする対策を取り上げ、あくまで現代文明と新しい文明の間に継続性を保ちながら文明転換をスムーズに図る計画内容であった。

四人組は関係者にメールを発信して行動への参加を呼びかけた。消費者や企業に働きかけ、政治家や行政担当者をも巻き込む作戦であった。これとともに、科学者や技術者に対して必要な新しい技術開発を促すのだ。

ホームページ「未来の代理人」を通して、四人組は現代文明の現状や問題点を訴え、文明転換の必要性とそのための行動計画を内外に向けて発信しつづけた。

先進富裕国は現代文明にとっぷり浸かり、大量生産大量消費大量廃棄システムのもとでさらに世界の富を掻き集めようと市場経済とグローバル化の徹底を図り、わがもの顔に世界中を闊歩しつづける。後進貧困国に対して半ば脅迫気味に市場経済への移行を迫り、国内市場の完全開放を促す。人口爆発下で貧困に喘ぐ後進貧困国はなけなしの一次産品を買いたたかれ、流入する安価な外国製品に国内経済はますます疲弊していく。

日本も例外ではなかった。

マネーゲームに明け暮れ、富を求めて右往左往する人びとを尻目に、世界各地で記録的な異常気象の発生がつづいた。

異常高温はヨーロッパや北米を襲った。連日熱波が渦巻き、軒並み週平均気温が二度から五度平年を上回った。スペイン、フランスを熱風が襲い、イタリアからアフリカ北部では週平均気温が平年より三度から四度上回り、トルコから紅海沿岸でも週平均気温が平年より二度から四度上回る。米国の東、中西部では週平均気温が平年より三度から五度も上回った。チュニジアのチュニスでは六月末に最高気温四六度（平年三二度）を記録した。フランス南部では四三度、ミラノでも四〇度を超え、ジュネーブでは過去



二百五十年間で最も暑い六月となった。

一方、アジア周辺では大雨に見舞われた。中国南部の江西省で六月二十三日から二十八日までの合計降雨量が四七〇ミリ（平年三〇〇ミリ）を記録し、重慶でも一カ月降雨量が三七七ミリ（平年一七〇ミリ）だった。これに対して、バイカル湖の南からモンゴル北部、スカンディナ비아半島、トルコなどでは異常小雨が続く、最近一カ月の降水量は二〇ミリ以下で、平年の二〇から三〇パーセント以下の降水量だった。

年々世界各地を襲う極度に異常な気象異変は頻度を増し、激しさを加えていった。異常高温・小雨・熱波・干ばつ・森林火災、異常多雨・洪水、暴風雨・大雨、異常低温・寒波が繰り返えされ、毎年気温が上昇していく。地球は確実に温暖化していた。とりわけ高緯度地域が著しかった。

北極圏の温暖化がことのほか急速に進み、なかでもアラスカ全土が飛び抜けていた。地球の平均気温に比べ、北極圏全体では二、三倍であるが、アラスカは数倍から十倍のスピードで気温が上昇しているのだ。

冬には道路代わりになる川の氷が薄くなって割れやすくなった。夏には氷河や永久凍土が溶け、川が増水する。雨が降らなくなって山火事が頻発する。海水温が上がって寒流魚が全然取れなくなった。海上の天気や風向きもくるくる変わり、漁業もできなくなっていた。

生態系へのプレッシャーが増強しに強まり、環境変化に必死に適応しようとする生態系そのものにも変化が現れた。だがそれは崩壊の兆しでもあったのだ。

北極海やグリーンランドの氷も急速に溶けていった。夏には氷床や氷河が溶け、大量の淡水が海に流れ出す。溶け出す面積も拡大していた。グリーンランドだけでなく、南極の氷床の崩壊が年々増加していった。

急速な温暖化はさまざまな方面に激しい影響をおよぼしていた。温帯を亜熱帯・熱帯に変え、大都市を灼熱地獄と化した。穀倉地帯を襲った干ばつが生産量を半減させ、穀物の国際価額を急騰させた。電力や水の不足が常態化し、食糧価格の値上がりで低所得層を直撃した。

現代文明の吐き出す毒唾（「マイナス」）が有限な地球に充ち満ちて人間の首を絞めていく。だが現代文明にとっぷり浸かった人々は「茹で蛙」のわが身に一切頓着せず相変わらず自先の快楽（「プラス」）追求に明け暮れていた。

地之木らは気がでなかった。現代文明は暴走しつづけ、エネルギーの大量消費は相変わらず続いている。二酸化炭素の大気中濃度は日増しに増え続け、年々温暖化は加速していく。

エネルギーを浪費する現代文明をリセットできれば即座にそうしたいところだった。だが現代文明をリセットすれば、現代文明にとっぷり浸かっている「茹で蛙」はどうなるか。赤子のように成す術もなかった死を待つほかないのか。資源を独り占めして大量の二酸化炭素を吐き出している富裕国が滅び、貧困国は喝采することになるのか。

四人組による情報の発信が続けられた。だがなぜか、四人組の行動に対して日本では殆ど関心を呼ばなかった。

現代文明の現状や問題点をいくら訴えても、眠っている人々の意識を覚醒させることはできなかった。現代文明を見直おそうという呼びかけに対しても反応は全く鈍かった。

地之木は気が重かった。次第に、どんなことをやっても手遅れのような気がしてくるのだった。

火のうえの鍋のなかで安閑としている人々を無理やり目覚めさせ、鍋か

ら飛び出させようとする」と自体が無意味なことのように思えて仕方なかった。いまさら大騒ぎしてジタバタせずに、現代文明に身を任せ、なにも知らずに「茹で蛙」となって死ぬほうがマシなのかもしれない。だが人類の行く末をそんなふうに決めていいのか。

彼は迷い悩んだ。戦略に誤りがあったのだろうか。スムーズな転換作戦は誤りだったか。現代文明を一度に破壊するようなもつとインパクトのある行動はないのか。

中海は心配そうな目つきで彼の顔をじっと見ている。

「こんなことをやっていいのかな」

彼はふと呟く。ひとりでに口から吐いて出た。

「オレもそんな気がする」

後ろから声がした。左山だった。

「こんなこと、もう終わりにしましょうよ。ねえ、地之木さん」

「うん……」

「眠っているひとはそのままにして、四人で手分けして文明転換の行動を起こしましょうよ」

「はあ……、文明転換……」

「どうしたんですか、地之木さん」

彼は左山が全然別のことを考えていることによく気付いた。

「うん……」

左山の提案はこうだった。単なる情報発信は終わりにして、早急に文明転換のための行動を開始すること、四人の役割分担を決め、これを同時並行的に進めようというものであった。担当者がそれぞれ自由に進め、出来るだけ早く文明転換を軌道に乗せようというのだ。

「あうだ、こうだ、と議論することもいいけど、時間が惜しい。文明転換には結構時間が掛かる。とにかく、生態系が崩壊するまえに、なんとかしなければ意味がないんじゃないですか」

地之木は口を閉じたままだ。中海と右野が寄ってきた。左山はひとり喋りつつける。

「『茹で蛙』の覚醒を待っていては手遅れになってしまう。地之木さん、そう思いませんか」

地之木はすでに手遅れと思っているころのなかを見透かされたような気がした。

「とにかく文明転換のための行動を起したらと思うんだ。中海さん、右野くん、どう思いますか……」

左山は提案を繰り返した。

「そうよね、のんびり構えている時間はないわね。いいわ。左山くん、やりましょう。右野くん、いいわね。地之木さん、やりましょう」

決断の早い中海がすぐにも行動を起そうと腰を浮かす。

「まあまあ……、右野くんもOKですか」

地之木は中海を制して腰を下ろさせ、右野に目を向ける。

「ええ、まあ……、でもできるかな、オレに」

「分担といっても、互いに助け合うことはこれまでと変わりはないんだ。困ったときには相談すればいいんだよ。でも分担を決めてやれば全体を並行して進めることができると思うんだ」

地之木は左山の意外な一面を見た思いがした。

「じゃ、そうしよう。いいね」

彼は念を押すように三人の顔を交互に見つめた。誰もがやがて訪れる未

来の地球を見定めるかのように遠くに目を向けたまま、口を開こうとしな  
かった。

## 第三章

10

「地球環境問題対策として『マイナス』最小化を徹底し、現代文明の行動原理の転換を果すのだったわね」

中海は地球環境問題対策を通して現代文明を見直すことを確認するように呟く。

地球に比べて人間活動があまりにも巨大化高度化大量化してしまった以上、これまでのように人間は勝手気儘に振る舞うことは許されない。だからこれまでの「プラス」最大化の行動原理を見直して自ら振る舞いを糾すほかないのだ。

宇宙船のような有限な地球に適した行動原理は「マイナス」最小化だ。これまでの「プラス」最大化は、喩えていえば、手当たり次第とところかまわず散らかし放題にして部屋を使用していたようなものだ。これに対して「マイナス」最小化行動原理はあらかじめ散らかさないように心掛け、整理整頓しながら部屋を使用しようというものだろう。

だが行動原理の転換は口で言うほど容易なことではない。これまで勝手気儘に振る舞っていた行動が大きな制約を受けることになるからである。いかにしてスムーズに行動原理を転換するか。反対派の抵抗力を殺ぎ、協力を呼び起こすような戦略戦術はないか。

彼女は迷った。

環境問題（地球、地域）の原因（マイナス）対策から入り、まず、法規

制や「マイナス」の事前評価システムである環境アセスメントなどの充実を図る。つぎに、地球環境倫理を踏まえて地球の有限性に違背するものを取り込み、発想の転換を促しながら、「マイナス」の範囲を段階的に拡張拡大していくのだ。最終的に新しい文明において対象とすべきすべての「マイナス」を取り込む。

こう考えながらも、彼女には文明転換という気の遠くなるような目標の実現を目指すよりも、差し当たりなんとか生態系の免疫不全をいくらかでも改善できればという思いが強かった。

グリーンランド氷床融解による水攻めによって現代文明が頓挫しても、生態系の崩壊が回避されれば人類は滅亡を免れるかもしれないのだ。彼女は密かに生態系を構成する動植物に有害な影響を及ぼしている化学合成物質汚染を当面のターゲットにすることをここに決めた。それはまた人間の健康を脅かす化学合成物質に対する対策でもあった。

彼女は早速住民運動家や環境NGOの仲間たちにメールを送り、環境汚染の原因追及の徹底を呼びかけた。

環境汚染対策は各国まちまちながらそれなりに進められていた。日本においてもかなりの水準に達している。残留性の高い有害化学合成物質や重金属類については規制が行われ、許容基準が制定されていた。だが規制対象はまだまだ少なく限られたものであった。

行動原理を「プラス」最大化から「マイナス」最小化に転換するにはさらに規制を強化し、対象範囲を拡大されなくてはならない。

同時に、意識改革が必要だ。とくに企業の意識改革が重要だった。日本では行政が企業寄り、環境規制は企業が成否の鍵を握っているからだ。

企業が環境対策にどの程度協力的が知りたかった。厳正な第三者の目を

期待して、彼女は外国の調査機関に日本企業の環境意識や社会的責任意識について調査を依頼した。

「原因物質の対策や規制をいかにして『マイナス』最小化につなげるかが問題ですね。苦し紛れに原因対策から始めればいいと言ったけど、もし行動原理の転換へつなげることができれば、ひとりで文明転換へと進むことになるでしょうね」

地之木がキーボードを押して仲間呼びかけている彼女に背後から声をかける。

「原因対策から入るのはいいアイデアだと思うわ。行政担当者を引き込むにはこれしかないんじゃないかしら」

彼女の考えはこうだった。

まず、住民が個人や企業などによる環境汚染物質の放出放置に対する監視を強め、環境問題対策強化の世論を喚起する。その後押しを受けて国や自治体に対して法規制や行政指導を迫る。併せて、環境アセスメントやテクノロジータセメントなど事前の「マイナス」チェックシステムの徹底化を図り、広く制度化を押し進めていくというのだ。

彼女の呼びかけに応えるように、各地で環境悪化の原因追及活動が熱を帯びてきた。だが保守的で伝統的に業界寄りの行政担当者たちは重い腰をなかなか上げようとしなない。つねに勇み足を恐れ、減点されないように動く習性はなかなか直らず、当然為すべき行動さえ途中で止めてしまうことが多いのだ。

彼女に疑問が浮かぶ。

このままではいざれ行き詰まるような気がしてならない。行政担当者を相手に問題となっている原因物質に対する規制強化を求めたり、対象範囲

の拡大を図るだけでいいのか。こんなことが文明転換のための行動原理転換へ果たして結びつくものだろうか。なにか別の仕掛けを考えなければならぬのではないのか。

「清子、いる？ こっちだと聞いて、やってきたわよ」

抑揚のある高い声が出た。開いたドアから小太りの小さい身体があたふたと近づいてくる。

「まあ、喜久枝じゃないの」

札幌で弁護士を開業している同期の本田喜久枝だった。

「突然、環境汚染の原因追及を呼びかけたのはどういうわけ？ そんなことまえからやっていたことじゃないの」

応接セットのソファにどかっと腰を下ろし、大きな息を吐きながら、出張のついでに中海を訪ねる気になったのはこのことを尋ねるためだと言う。

「環境を汚染するまえに十分気をつけてもらいたいのよ」

環境汚染を防止するために事前チェックを徹底させたいのだ。これにはプラス最大化という考えをマイナス最小化へ転換させる必要がある。

「例のHPと関係あるのね」

「そう……」

「え、ほんと……」

本田喜久枝は目を丸くして中海を見ている。

「でも対象が広がって、具体的にどこからどう始めればいいのか、これが問題なのよね」

二人は互いに顔を見合わせる。多くのひとびとに関心を持たせるには、とにかく社会にインパクトを与える必要があるのだ。

「訴訟はどうかしら。いま、相談されている件があるのよ」

しばらくして喜久枝が口を開いた。

産廃処理業者の焼却炉から出たダイオキシンによって息子を死に追いやりられた母親からの相談だという。

「ダイオキシン？」

「その影響で生殖機能障害を被ったと言っている」

「環境ホルモン？」

環境に放出放置された化学合成物質で内分泌を攪乱する化学物質のことだ。魚類や爬虫類のオスの肝臓などに女性ホルモンが増加したり、オスの精巣に卵母細胞が出現するといった「メス化現象」が見つかり、湖水や河川を汚染する化学合成物質に疑いがかけられた。

この種の作用をおよぼす化学合成物質が環境ホルモンで、正確には内分泌攪乱化学合成物質といい、「合成エストロゲン」に分類される。環境ホルモンは人間に対しても生殖機能障害のほか神経系や免疫力に影響をおよぼす恐れがあると問題化しているが、マメ科植物の窒素吸収能力をも阻害しているらしい。

「環境汚染の原因追及の一環として、環境ホルモン訴訟を起こしたらどうかしら」

「その産廃業者を相手に……」

中海は温暖化からはじまった話が環境ホルモンに行き着いていることに若干違和感を覚えた。だが環境ホルモンなど各種の化学合成物質は生物個体に直接働きかけて、さまざまな影響をおよぼしているのだ。その結果絶滅する種もあるかもしれない。こうなれば、生態系全体にも大きな影響がおよぼはずだ。環境ホルモンなどの化学合成物質は生態系を構成する個々の動植物にダメージを与え、生態系そのものの綻びを誘い、内部から直接

生態系を破壊する毒薬のひとつなのだ。

「ダイオキシンを発生させる塩化ビニール類やポリエチレン類を製造した企業も含めるのはどうかしら。大体、家庭ゴミはプラスチック類が大半なんだからこれを抑えておきたいのよ」

清子はすでにその気になっているらしい。

「なるほど。大量生産大量消費大量廃棄システムに対して一撃を与えるのが最適かもね。ところで、うちの地之木さん、まえに会ったことあるわね。彼は化学合成物質に詳しいのよ。一寸待って」

中海は立ち上がったかと思うと、地之木を連れて引き返してきた。

「環境ホルモンですか。いいですね。温暖化によって化学合成物質の影響がさらに量的にも質的にも拡大するおそれがありますからね。ところで、訴訟を起すならダイオキシンよりもビスフェノールAを取り上げたほうがいいですよ。製造業者を相手にね」

地之木は二人に交互に目を向けながら言う。

「ビスフェノールA？」

アセトンとフェノールから合成されるビスフェノールAはポリカーボネート樹脂やエポキシ樹脂などの原料で、一九四五年頃から大量生産されるようになった。現在ポリカーボネート樹脂は自動車部品、シート、窓ガラス、デスクなどに、エポキシ樹脂はコーティング、接着剤などに広く使用されており、二〇〇〇年には全世界で約一七〇万トン、日本国内では約三万五万トンが生産された。二〇〇三年には約四一万トンに達したが、今後まだまだ増える勢いだ。日本国内では主にポリカーボネート樹脂（七三パーセント）とエポキシ樹脂（二二パーセント）の原料用である。

「プラスチックの原料のほかに、塩化ビニルの安定剤としても用いられてき

た化学合成物質ですが、環境ホルモン作用が疑われているのです。先だって、先天性尿道下裂の男児の母親と一般の妊婦とでビスフェノールAの血中濃度を比べたところ、前者が約二倍高かったという研究報告がありましたよ。メーカーサイドからいろいろ反論がなされて賑やかでしたが……」

「その子も先天性尿道下裂だったわ、相談があつた件の……」

先天性尿道下裂は男児の尿道口が正常に形成されない先天性異常である。胎児に尿道と外生殖器が形成される妊娠初期に胎児や妊婦のホルモンの状態が乱れると起きるらしいという。環境ホルモンが原因のひとつとして疑われているのだ。

「メーカー大手が研究会をつくってビスフェノールAの安全性を訴えています、訴訟にはビスフェノールAを是非加えるべきですよ。ただ問題は……」

地之木は因果関係の立証が難しいという。環境ホルモンには複数の化学合成物質の複合作用も考えられ、原因物質と被害との因果的な関係を証明することは困難なのだ。低濃度でも複数の化学合成物質による複合汚染で毒性が高まることが分かっているが、数多くの化学合成物質で汚染されている現実の環境ではこれらの相互作用のメカニズムや相互関係が複雑極まりない。

「確かに、難しいことよね」

中海はため息を吐いた。

「なにを言っているのよ。そんなことでへこたれてはなにもできないわよ。業界の連中はそれをいいことにしてやりたい放題やってきたんじゃないの。環境ホルモン訴訟を提起しただけでもインパクトを与えるわ。良心的な科学者たちを巻き込んで大々的に闘うのよ。これも環境汚染の原因

追及の一環ではないの」

喜久枝はまくし立てる。

「……………」

地之木は黙って、喜久枝のいそがしく動く口をじっと見ていた。

不意に全身に戦慄が走った。激しい衝撃が襲う。

「ビスフェノールAは行動原理転換の対象として最適だ。この訴訟を勝訴すれば『マイナス』最小化への突破口が開けるかもしれない」

彼は誰にも聞こえないような低い声で呟く。

「とにかく、わたし、はじめるわよ。地之木さん、味方になる科学者を探しておいてね。清子、いいわね。覚悟しなさい」

「やりましょう。中海さん、突破口になるかもしれませんよ」

地之木は思わず、大きな声を出した。

公害問題の裁判では排煙中の有害化学物質と被害発生の中に蓋然性があれば、両者間に因果関係があると推定される方向にあった。このような「疑わしきは罰す」の原則が複雑極まりない複合汚染のケースにも広く認めさせることができるかが問題だった。この「疑わしきは罰す」原則をさらに行政の分野にも広めることができれば、これによって新しい行動原理である「マイナス」最小化へとつながることが可能となるだろう。

だが個々の企業や業界団体はこのような行政の動きには力づくで反対するだろう。ある化学合成物質について動物実験や細胞実験でアレルギーや発ガン性などの毒性が確かめられても、いざ行政が規制を行なおうとする、関係企業や業界団体はさらに複雑な条件でのフィールド実験を要求して、なんとか規制を免れようとするのがいつものやり方だった。複合汚染に対してはあくまで厳格な因果関係の証明を求め、反論するにちがいない。

もし化学合成物質の複合作用のメカニズムが解明されれば、複合汚染の評価ができ、そのための方法論が確立されるようなことになれば、まさに新しい文明の扉を開く契機にもなるというものだ。

地之木は久しぶりに熱いものが体中を駆け巡るような感じがした。

三人は最大の効果を求めて、具体的な戦略と段取りについて話し合う。

訴訟のための法廷戦術ではなかった。訴訟を契機に、環境の安全を求める一大市民運動を展開しようというのだ。これは環境の安全を超え、未来の人類の生き残りのための行動であった。

環境ホルモンは尿道下裂や男児の死産増など人間や生物の生殖機能に異常を引き起こすばかりでない。行動や脳神経系への影響のおそれもあった。環境ホルモンは現世代はもちろん、次世代への影響も避けられないのだ。

いかにしてマスコミを味方に引き込むか。マスコミの関心を長期にわたっていかに保つか。いかにして世論を盛り立て市民を行動に駆り立てるか。問題を直視しようとしめない国や見て見ぬふりをする自治体の担当者たちの目をいかにしてこれに向けさせるか。自分たちの目先の利益第一の企業をこの問題に立ち向かわせるにはどうするか。利権にしか目を向けない政治家の反対をいかに封じるか。政治家の大鼓持ち官僚や小役人の邪魔をいかにして封じるか。企業や財界の超保守派の分らず屋どもにどう対処するか。破廉恥極まりない御用学者御用評論家をどう説得するか。

「障害となる古い体制とどう対峙しますか」

「とにかくぶち壊さなければならぬのよ」

「焦らず、静かに忍び寄って行って、確実に息の根を止めること」

「環境ホルモン訴訟の提起と前後して、関係商品の不買運動を全国大で実施することね。それとプラスチック類による過剰包装の拒否運動を起こし

ましようよ」

「スーパー店頭で包装用のトレーやラップを取って、中味だけ持ち帰るなんてどうかしら」

「疑わしい化学合成物質を片っ端しから槍玉に上げて、法廷闘争を盛り上げるのはどうですかね。最終的目標は企業に自分の責任で使用する化学合成物質の安全性評価を義務づけさせることだ」

二〇〇三年十月、欧州連合（EU）欧州委員会は化学物質による人体や環境への影響を予防するために、産業界で使われている化学物質の安全性評価を企業に義務づける規制案を取りまとめた。当面規制対象とするのは農薬や食品添加物、化粧品、家電製品、衣服などに使用されている一般的な約三万種類の化学物質で、製造や輸入量が年一トンを超える企業は自らの負担で安全性を評価し、評価内容を欧州化学品庁（新設予定）へ登録することを義務づけるという。

「大体、化学合成物質が何万何十万種類にもなると、政府や自治体だけでこれらを把握することができないからな」

「新しい行動原理のもとでは当然しなければならないことよね。でもすべての企業が真面目にやるかしら」

「そうならないと行動原理の転換はムリよね。企業はもちろん、組織や個人もね」

「そうよ。自ら『マイナス』を最小化すべきなのよ」

いつの間にか、地之木から戦慄も衝撃も消えていた。彼は二人を残しておもむろに椅子から腰を上げた。



「直下地震で何パーセント破壊されたら、東京を見捨てるつもりかね。それとも一〇〇パーセント破壊されても復旧するつもりかね」

右野は机の端に山積みされた書類を横に押しつけながら、元同僚の眠そうな目をじっと覗き込む。

「土地がある以上は復旧するほかない」

無数の既得権者が絡む都市を改造することは、喩えていえば、湯船に気持ち良さそうにどっぷり首まで浸かっている湯浴み客を無理やり引きずり出すようなもので、なかなか難しいのだ。

「地震がつづいて収まる気配がないときはどう？」

「そんなことは起こらないよ」

「でも起こったとすれば……」

「そのときは……、廃虚と化した東京を放棄して別のところに新たに都市を建設するほうが得策かもね」

「じゃ、それを見越して設計図をつくってみないか。関心のある連中を集めてさ」

「え？ 本気かよ……」

「現代の大都市にはいろいろな矛盾や欠陥がある。いかんともしようもないものがしみ込んでいる。こんなに問題を抱えた欠点だらけの現代都市に代わる理想的な未来都市を設計するんだよ」

「右野、お前はいつからそんな大それたことを考えるようになったんだ」

「自動車が発明され、生活が便利になったのに排気ガスに悩まされるなんておかしんじゃないか。そう思わないか、小山。オレの問題意識なんて、

極めてプリミティブなんだ」

右野はスチールの執務机のまえの椅子から体を乗り出し、神経質そうに目を瞬かせている小山の妙に白っぽい生気のない顔をじっと見た。

システム改造対策を担当すると決まったとき、右野は官庁勤務時代に議論を闘わせていた同僚たちを思い出し、若手の官僚たちを集め、彼らにシステム改造を手伝わせようと考えたのだ。それには小柄ながらもエネルギーシユな小山をその気にさせて旗振り役として抱き込む必要があった。

彼は地球温暖化の被害抑制をテーマにして、取りあえず、エネルギーを浪費しヒートアイランドと化している東京の改善改造策を手掛けたかった。だが政治家や大企業の相手に明け暮れている官僚たちにはなんとなく緊迫性が乏しいような気がして、いつ来てもおかしくないと言われている東京直下地震をもちだしたのだった。

「いまの大都市にはムダなものが多すぎないか。大量のエネルギーを貪り食い、大量の水を使い、大量の汚水を吐き出す。エネルギーや水やだけじゃない。地球のさまざまな資源を浪費する場が現代都市だ。大都市では人間も浪費の対象となっている。おかしいと思わないか、小山」

「うん……」

「東京はいずれ地震に襲われる。地震が収まっても、つぎは地球温暖化だ。待ったなしだ。地球温暖化で東京は熱帯になり、灼熱の地獄となる。日照りがつづき、干害に襲われれば水が途絶える。海面が上昇して一面が水浸しになり、地下街や地下鉄の地下空間が海水プールと化するのだ。それでもキミたちはエネルギーを使い、クーラーを回しつづけ、遠方から延々と水を運ぼうとするのか。尽きぬ海水をポンプで地下プールから汲みだそうとするのかね」

「まさか……」

「富士山が噴火すれば関東平野一面に火山灰が降り積もる。地震で原発が事故を引き起こせばどうなる。これらはすべて絵空事ではないんだ。キミたち国を預かる官僚たちはこれらにどう対処しようとしているのかね。どんな準備をしているの」

右野はふたたび地震に話を戻す。

東海地震が切迫しているなか、富士山直下で火山特有の低周波地震が増していた。過去にも東海地震と富士山噴火が連動して起こったことが多い。

「国のやるべきことは……」

「あくまでも東京のブランドを死守するつもりかね、キミたちは」

「……」

「超巨大化した東京を捨てる時期が来たのではないかな。ダメージを受けて廃虚と化した東京を復旧しようとしても水浸しになってはもう遅い。火山灰に埋まった都市を掘り起こそうとしてもムリだ。放射能で汚染された大都市をどうやって除染しようというんだ。小山、お前はどのようなつもりなんだ。まさか、逃げ出すんじゃないだろうな」

「オレにはなにもできないな、逃げ出す以外は」

小山はニヒルな薄笑いを浮かべ、右野を見ている。

「いまから新しい都市を造るんだ。これは新しい公共投資だ。新しい産業だよ。キミたちは死に体の旧い経済システムの息を吹き返させようと必死のようだけど、ムダだよ。ムダな高速道路を建設したり、ただ消費するためにムダなものを大量につくり出して経済を成長させても意味がない。本当に必要なものだけをつくることだ」

「新しい産業か……」

「そうだ。だが間違っても箱モノだけを造くろうなんて考えるなよ。エネルギーや資源を浪費し、大気や水域を汚染するこれまでと同じような都市を造っても意味がない。『環境に優しい』人間都市を造ることだ」

「人間都市？ それはなんだ」

「人間にとって理想とする都市だよ」

右野は「新しい文明都市かな」と言おうとした。だがまだ早いと思い、急いで言い換える。

「理想都市？」

「騙されたと思って始めるんだな。キミが課長になるまでに、新しい東京がきつと必要になるだろう。そのときになって慌てても間に合わないぞ」

「具体的には……」

「どうやるかは自分で考えることだ。参考までに言えば、こうだ」

地球温暖化は大気中に蓄積した二酸化炭素などの温室効果ガスによって生じるが、問題はたとえこれらの温室効果ガスの放出をいまずぐゼロに抑えたとしても、地球温暖化が即座に収まることはない。これまで放出されて大気中に蓄積している温室効果ガスによって気候システムの攪乱はさらに何十年何百年も続く。このため、地球温暖化対策においては原因対策にも増して、被害の拡大を抑える被害抑制対策が不可欠なのだ。

地球温暖化の被害は都市生活、農業、森林、水資源など日常生活から生物生態系まで地球上のあらゆるものにおよぶ。とりわけ都市は地球温暖化に極めて弱い。ことに人口の集中している大都市への影響が甚だしい。にもかかわらず、都市人口は今後とも増大する傾向にあるうえ、近年とみに加速しており、今後世界人口の約半数が大都市に集中するという。巨大都

市東京も例外ではない。

巨大都市は現代文明の巨大化高度化大量化の究極の姿であるが、図体が大きければ大きいほど脆い。都市はまた現代文明の吐き出すさまざまな「マイナス」を集積する空間でもある。温暖化の影響がこれら「マイナス」と複合してさらに甚大化するのだ。

東京をはじめ、世界の現代都市は水の便がいい河畔や河口、湖畔、海岸など水辺に立地し、大量の水を使い、大量のモノやエネルギーを消費し、大量のゴミや汚水を吐き出す。供給や処理が途絶えようものなら、現代都市は自ら吐き出す「毒唾」に塗れてのたうち回り、息を絶え、廃虚と化する。

地球温暖化がもたらす異常気象や海面上昇、気候帯変化は現代都市の存立の基盤を揺るがす。熱波が襲えば強烈な熱風が吹き荒み、豪雨や長雨が襲えば大洪水となる。氷河が融け、海面が上昇すれば海水が襲う。干ばつが続けば、水が断たれ、農作物も干上がってしまう。熱帯と化した都市にはマラリアなどを媒介する蚊が群がり、ウイルスや病原菌が蔓延り、感染症危険地帯と化す。

「灼熱地獄の東京で何日にもわたって断水したり、新鮮な野菜など生鮮食料が途絶えたらどうなると思う？ 悪臭が充満し、感染症が蔓延し、暴動が起きるだろうな」

「……………」

「現代都市東京に代えて、地球温暖化に強い都市に早急につくることだ。だが堤防を高めたり、ライフラインを強化してお茶を濁そうとしても無駄だ。海拔数十メートル以上の地点を探して、モノやエネルギーの大量消費システムとしての都市構造を見直し、段階的に節約タイプのシステムに改造する一方、大量廃棄システムにリサイクルシステムや循環システム

を導入強化することだね」

現代都市の多くには水浸しの危険があり、急激に温暖化すれば電気や水の供給も万全とはいかない。食物の供給も同様であるし、一端、ライフラインが途絶えれば不衛生極まりない汚染環境と化し、感染症の蔓延を誘う。

「現代文明に代わる来るべき新しい文明のもとでは、大都市は解体され、これに代わる空間は地球環境倫理の実践の場として、従来の都市の代わる生活活動空間を目指すはずだ。これを先取りして新しい文明都市を創造するのだ」と右野はつぶやいたが、呑み込んでしまう。

「まあ、こんなところだが……、とにかく、地球温暖化が進んでいるいま、重要なことは二酸化炭素削減といった防止対策はもとよりも、発生する被害をいかに抑制して被害を最小限に止めるかということがとても重要なんだ」

けしかけるだけけしかけると、右野は椅子から腰を浮かし、小山の目を覗く。頭の切れそうな小山の切れ長の目にはまだ疑いの色があった。もう一押しすべきか迷った。エリートを強く押しすぎたらかえって反発を買う。

彼はそのまま立ち上がり、軽く目で合図すると、踵を返した。

外に出ると、湿気の多いベトベトした空気が肌に纏わりつき、排気ガス臭が鼻を突く。片道三車線の道路には赤信号でせき止められた自動車群が数珠繋ぎになって犇めいていた。歩道には行き交うひとが列をなし、交差点は信号待ちのひとで溢れている。右野は人の群れのなかで信号を待ちながら、東京というところがなんと異常なところかと思った。

交差点を渡り、僅かに緑が残っている公園へ入る。排気ガス臭も薄れ、車の疾走音が遠のいていく。彼は心持ち大きめの呼吸をする。排気ガス臭を感じて息を止めた。ベンチを横目で見て通り過ぎる。公園のなかの道を

突き進む。目の前にそそり立つビルの壁が現れた。車道を挟んだ向こう側の高層ビル群だった。

オフィスに戻るかどうか一瞬迷い、ふと足を緩めた。近くのビルの一室で建設事務所を開いている先輩の顔が浮かんだ。

「東京の温暖化対策はどうしますか」

「温暖化？　なんだ、藪から棒に。いま何をやっているんだ」

太田伊知郎は大きな目をぎよろつかせ、突然訪ねてきて突拍子もないことを言い出した右野を呆れ顔でじろじろ見ている。官庁に勤めているころは度々会っていたものの、いつの間にか疎遠になっていた。だが応接セットのゆったりした大きな椅子でいつもの笑顔の太田を目の前にしているうちに、彼はついいつもの調子に戻ってしまったのだった。

右野は非礼を詫びて、近況を報告する。

「なんだって？　新しい都市を造る？　暑くなりゃクーラーでも回せばすむんじゃないのかね」

「温暖化によって海面が上がると、東京のゼロメートル地帯が水浸しになるおそれがあるんですよ」

「南極や北極の氷が融けるといふ話。でもそれは今日明日の話じゃないだろ。温暖化なんてそんなに緊迫した問題じゃないでしょ。堤防の高上げで対処できる話じゃないの」

「そう簡単な話じゃないですよ。」

「存知の通り、日本は……」  
日本は国土の七二パーセントが山地で、残りの低地が生活活動の場となっているが、山間部から流れ込む無数の河川によってつくり出された沖積平野が一〇パーセントにおよぶ。海沿いの沖積平野では都市や工業地帯など高密度な土地利用がなされ、五一パーセントの人口、七五パーセントの資

産が集中しているのだ。

それに島国である日本は面積に比して海岸線が非常に長い。総延長は約三五〇〇キロメートルにおよぶ。その約二七パーセントの八三〇〇キロメートルにはすでに堤防や護岸が施されているものの、海面が上昇すると波の打ち上げ高さが上昇するので、異常気象で増える大型台風時の高波や高潮にこれらの海岸保全施設が役に立たない恐れがある。そのうえ、海面上昇によって頻発するおそれのある地震で崩壊する危険もあるのだ。

「放置すればかなりの資産が水没することになるか」

現在ゼロメートル地帯は約八六一平方キロメートルで、二百万人が生活し、五四兆円ほどの資産があるが、もし海面が一メートル上昇すると、ゼロメートル地帯が三倍近く増えて二三三九平方キロメートルとなり、人口および資産は倍増し、被害規模が四一〇万人、一〇九兆円に拡大するとう。

また高潮や津波による氾濫危険区域は、一メートルの海面上昇で、六二六八平方キロメートルから八八九三平方キロメートルに拡大する。影響を受ける人口は一五四二万人、資産は三七八兆円に達する。

「ではどうすればいいと思いますか。差し当たり東京では……」

「堤防の高上げ以外ちょっと考えられないな。水没させるにはあまりに資産が大きすぎる。所有者たちは必死に守ろうとするだろうな、自分の財産をね」

「高上げで済みますかね。ゼロメートル地帯には隅田川をはじめ、天井川がいくつも流れているじゃないですか」

東京のゼロメートル地帯は二二四平方キロメートルで、葛飾、墨田、江東、江戸川各区のほぼ全域と千代田、中央、大田、港、台東各区の一部に

広がり、二十三区の二〇パーセントにおよぶ。東京湾岸に五メートルを超える防潮堤や水門を設置し、大型台風時の高潮に備えているが、一メートル海面が上昇すればそれをゆうに超える高潮が発生するのだ。

そのうえ、ゼロメートル地帯では隅田川、荒川、江戸川、綾瀬川、中川といった大小の河川が地面より数メートル高いところを堤防に囲まれて流れている。この堤防が破れば大量の河川水が市街地を襲い、鉄砲水となって建物を破壊し、一面を水浸しにしてしまう。

「天井川は洪水の給水管みたいで、危険極まりないけど……、かといってゼロメートル地帯を放棄することはできないだろうな」

「温暖化によって、百年後、海面が約一メートル上昇すると予測されていますが、温暖化の影響は今後何百年も続くそうですよ。いまずぐ温暖化の原因となっている二酸化炭素などの温室効果ガスの増加をゼロに抑えたとしても、ひとたび攪乱した地球の気候システムがもとに戻るには長い時間を要するというわけです」

「堤防の高上げ工事はエンドレスに続けなければならないということなのかね」

「高上げだけでなく、基礎の補強も欠かせませんね。でもそんなことは不可能じゃないですか。それよりも、別のところに、代りの都市を造るほうが……」

「それでいまから代わりの住み処を確保しておこうというのかね」

太田は大きな顔を傾げたまま軽くうなずき、漸く納得したような表情をした。

12

「まず、ビスフェノールAを取り上げて、訴訟を起こすことにしたわ。それでみなさんに協力してほしいの……」

中海は久しぶりに顔を合わせた右野をしげしげと見てから、大きな目をギョロリと隣の地之木に向ける。

「環境ホルモンと疑われているヤツか……。それでいつ……」

左山が正面の中海と斜め前の地之木に交互に目を移しながら、割り込んできた。右野は左山の隣で目を光らせる。

「明日、裁判所に訴状を出すことにしたわ」

「え？ 明日ですか……」

左山は目を輝かせ、右野が腑に落ちないような顔をした。地之木は黙って頷く。

窓から差し込む午後の陽射しがリサイクルで求めた窓際古びた応接セツトに達し、四人組を照らしていた。初冬とはいえ、陽射しはかなり強い。

陽射しが地之木の左頬を射る。陽を受けた頬が熱い。それでも彼は動くこととしない。ブラインドを下ろそうかと思いつながら、彼は立ち上がる気になれずにいた。

一九九七年、ビスフェノールAなどいくつかの化学合成物質が生殖機能を攪乱するおそれのある「環境ホルモン（内分泌系攪乱化学合成物質）」として問題化した。それからかなり日が経つが、日本国内ではビスフェノールAの沿岸域への流入量が相変わらず増え続けている。

環境ホルモンは極超低濃度でも胎児の発生発達に悪影響をおよぼす。他のさまざまな化学合成物質の複合作用によって、さらに毒性が高まる可能

性があるという。

だが現世本位の現代文明は環境ホルモンのような次世代への影響を軽んじる傾向にあった。さまざまな化学合成物質が次世代への影響を問われぬまま、食べものや日用品にじゅじゅと湯水のように使われている。

化学合成物質が環境ホルモンとして問題化しようが、相変らず化学合成物質は大量に生産され、殺菌剤、殺虫剤、化学肥料、食品添加物、各種の薬品、塗料、接着剤、各種の工業用原料や製品などとして生産され、市場に大量に流通し、生活環境の隅々まで入り込んでいた。生産過程や消費段階、さらに廃棄過程でこれらの化学合成物質は環境に放置放出され、大気や水域、土壌を汚染し、環境の隅々まで拡散する。無数の化学合成物質によつて汚染された環境に棲息する生物や人間は汚染した空気を呼吸したり、汚染された水や食べものを摂取して化学合成物質を体内に取り込む。

人間は農薬に汚染された農作物、大量の抗生物質を与えられた薬品漬けの畜産物や養殖魚介類、食品添加物や殺菌剤など各種の化学合成物質を添加された加工食品などを無差別に摂取させられ、脂肪組織に数多くの化学合成物質を蓄積していく。

こうして生物や人間をとりまく外環境を汚染した化学合成物質が生物や人体に取り込まれて蓄積するが、化学合成物質は生態系のなかでプランクトンから小型捕食動物、大型捕食動物へと進む食物連鎖で生体濃縮が繰り返されていく。この過程で生態系を構成する動植物が免疫不全や生殖障害などの被害を被り、絶滅する種も現れ、生態系が綻び出していく。

食物連鎖の頂点にいる人間は、化学合成物質を直接呼吸や飲み水を通して取り込むほか、食物連鎖によつて、外環境の何千万倍何億倍にも増幅されて最高濃度に濃縮汚染された食物を摂取させられているのだ。これによつ

て環境中の濃度よりはるかに高濃度の化学合成物質が体内に取り込まれ、人体が蝕まれていく。こればかりでなく、一度体内に取り込まれて脂肪組織に蓄積した化学合成物質は生殖出産を通して子に移転し、世代間を超えて汚染を広げていく。だが人間では世代交代のスパンが長いために汚染の影響が見えにくい。

化学合成物質汚染の影響と見られるアレルギー症候群が倍増し、化学物質過敏症や奇形発生が確実に増大してきている。各種化学合成物質による複合汚染によつて、人間はもちろん、生物全般における催奇性の増大など突然変異圧力がますます増大しつつあるのだ。

「訴訟を契機に、すべての化学合成物質の事前チェックを求めるつもりよ。有害なものは当然だけど、とくに分解し難い残留性の高い化学合成物質を排除することだわ。そうでないものでも長い間継続して広く使用されている化学合成物質も要注意ね。化学合成物質の複合汚染についても明らかにしたいわ」

日本における化学合成物質の事前チェックはまだ不十分なものだった。工場から排出する特定の有害化学合成物質のうち三百数十種類についてはまがりなりにも事業者が自ら公表する制度があるが、日常的に使用されている一〇万とも二〇万種類ともいわれる化学合成物質全体からみれば問題にならない。個々の化学合成物質のチェックがこんな程度にすぎないうえ、化学合成物質の複合汚染については全く手付かずの状態なのだ。

地之木は人体におけるさまざまな化学合成物質による複合汚染を思い浮かべ、一瞬、身震いを感じた。

無数にばら撒かれている化学合成物質の複合汚染の実態が明らかになったとき、どんな全容が現れるのだろうか。さまざまな化学合成物質に曝さ

れ、すでに何万ものさまざまな化学合成物質を体内に取り込んでしまっている人間の脳や内蔵でどのような複合反応が起き、どのような影響が生じているのか。

「ビスフェノールAを突破口にしようというわけですか。行動原理転換の……」

左山が大きく頷きながら、呟く。

「でも問題はビスフェノールAだけがマスコミに取り上げられて、議論がそこだけに集中することだわ。そうなると特定の環境ホルモンだけが問題とされてしまうことになりかねない。これでは行動原理の転換どころか、文明転換という目的からもはずれてしまうわ」

訴訟という強烈な手段でアピールすれば、インパクトが強いだけに攻撃対象がビスフェノールA一点に集中しがちなのだ。中海にはマスコミによって殊更ビスフェノールAだけが環境ホルモンとして煽られてしまうことが心配らしい。

「マスコミが取り上げてくれるなら、それを利用すればいいよ」

「そうできればいいけど、こちらが利用すれば反対勢力も利用しようとするわ」

「反対勢力？ 訴えられた側のこと……」

「もちろん、被告らも含まれるけど……、文明転換に反対の人たちよ。現代文明擁護派ね。彼らは化学合成物質の事前チェックだけでなく、行動原理転換そのものに反対するわ。彼らには『プラス』を増やすことだけが関心事で、そのまゝに『マイナス』を減らそうなんて考えようとしなから」

「『マイナス』が高つくようにすればいいよ。そうすれば事前に『マイナス』をチェックすることになる」

左山が口を挟む。

「彼らはそうなることをおそれて反対するのよ。裁判には負けるわけにいかないし、『マイナス』事前チェックの制度をつくらせたくないし……、とにかく、官僚たちをも取り込んで、業界側は総力を結集して向かってくるわ。科学論争になれば科学者たちも動員されるわね」

「中海さんは悲観的なの。闘うまえからそんなじゃ勝ち目がないじゃないか。もっとポジティブに考えなくちゃ」

「左山さんのほうが楽観的過ぎるわ、いつもそうよ」

「まあまあ、法律家は慎重なんだよね。あっちは金力にまかせてやってくるだろうが、金がなくても闘う術はあると思うよ。こっちは知恵と数でいけばいい」

右野が応える。

「たとえば……」

「裁判に合わせて、食品品に対するプラスチック包装反対運動を起すとか……」

「それもいいけど、こちらが本腰を入れようと構えたとき、相手はビスフェノールAをスケープゴートにしてあっさり引き揚げるかもしれない」

「地之木さん、どうということ？」

「相手は化学会社だよ。ビスフェノールAが問題化したときから次の手を考えているはずだ。ビスフェノールAに代わる新しい化学合成物質の開発がかなり進んでいると思うよ。この辺も計算に入れて戦略を立てるほうがいい」

訴訟の最中でも、企業はつぎの手を用意しているものだ。訴訟の勝敗に企業の命運を賭けるような危険はできるかぎり回避しなければならないか

らだ。

「訴訟では争う対象を特定する必要があるのだから、ビスフェノールAを取り上げた……」

中海としては「マイナス」全体を対象にできればそうしたにちがいない。だがそうできない現実があるのだ。

「だから、裁判外の応援は可能なかぎり広い視野からやることにしてはどうかな……」

地之木に向けられた六つの目がつぎの言葉を待っている。

「ビスフェノールAがダメだとやっつけるのではなく、これを契機に、企業が自ら『マイナス』のチェックをはじめの行動を起こすように仕向けることだ」

地之木は有害な化学合成物質だけが「マイナス」じゃないと言いたかった。誰もが自らすべての「マイナス」をチェックするようにならないならならぬのだ。

「そうできればしめたものだけど、そんなことできるかな。訴訟を起こすことはこちらから喧嘩を売るようなものじゃないの」

「急に悲観的になったね。いつもと違うぞ、左山くん」

地之木は自分がもっと悲観的であることを感じていた。彼は現代文明がすでに転換点を過ぎてはやり引き返すことのできないところまで来てしまっているように思えてならなかった。現代文明から新しい文明へソフトウェアを転換を試みているいろいろやっても、現代文明を謳歌する企業はあの手の手と品を替え、抵抗を重ねるだろう。こうするのは企業だけにかぎらない。そうこうしているうちにすべてが手遅れになり、結局徒労に帰すことになるような気がするのだ。無数の抵抗勢力をまえにして、現代文明に新

しい文明を接ぎ木しようとしても土台ムリなのか。抵抗勢力ともども現代文明をひとまずご破算にしてリセットしなければ、新しい文明を築くことができないのかもしれない。

左山は面長の顔に困惑の表情を浮かべて地之木を見ている。自分も同じ表情をしているかもしれないと思いつつ、彼は左山の自信なげな顔をじつと見た。目が合ったとき、ひとつの考えが浮かんだ。

「今回の訴訟は問題提起だと考えたらどうかかな」

「どういうこと？」

地之木のアイデアはつぎのようなものだった。

それは裁判の場を対被告との争訟の場とせず、被告を説得する場にするというものだ。原告は現代文明の行き詰まりの現状を明らかにして、このままでは現代文明ともども企業活動もいずれ行き詰まることを訴え、これを打開するために被告企業に対して社会的存在としての責任ある行動を促すのだ。併せて、文明転換の必要性を説き、新しい文明実現に協力を求めるという。

現代文明のもとで産みだされる「マイナス」のすべてを解消するのでなければ、人類の未来はない。たとえビスフェノールA訴訟によって環境ホルモンの危険性が問われることになっても、それは化学合成物質による環境汚染の極く一部でしかない。化学合成物質による環境汚染全体に議論がおよんだとしても、それでもまだ環境悪化の一部でしかないのだ。環境悪化には環境汚染のほかに、温暖化やオゾン層破壊などといった地球気候システムの大攪乱や太陽光線の有害化が残されている。さらに森林乱伐、生物種の絶滅といった生態系破壊もある。

環境悪化のすべてが解消されても、そのほかにもまだ「マイナス」があ



るのだ。資源枯渇や自然破壊など欠乏や破壊といった「マイナス」だ。とにかく人類の生存条件を劣悪化する「マイナス」のすべてを最小化するの  
でなければ、人類は生き残れない状況にあるのだ。それらのなかで最も問  
題なのは人類自ら自分の生存条件を劣悪化する「マイナス」である。

「そんなこと言ってもムダね。被告企業を説得しようとしても、そんなこ  
と土台ムリよ。同じ船に乗る相手じゃない。訴訟なのよ。ダメなのはダ  
メと言わなきゃならない。それにそんなことをすればますます反対派を勢  
い付けることになるわよ」

中海は問題外という顔をした。この訴訟と並行して、つぎのような運動  
を起こすべきだと言う。

企業に対しては、環境負荷（マイナス）面から評価を行い、環境に配慮  
しない企業には製品の不買運動などを徹底し、市場から追い出す。行政で  
は、中央地方を問わず、環境を無視し、環境保全に協力的でない官僚はや  
めてもらう。

環境問題を軽視し、環境に配慮しない企業や官僚に与する政治家は不適  
格者として落選させる。また同様に、このような企業側に立つ御用科学者  
に対しては徹底的に批判して、仮面を暴く。市民には省エネ、ゴミ分別、  
リサイクルなど、環境に配慮して「マイナス」全体を最小化する行動を促  
し徹底させる。

「中海さんの言うことも分かるけど、そのような運動を起こすなら、目的  
をはっきり打ちだしたほうがいいんじゃないかな。ただ環境を守るんだと  
いうだけでは弱い。それよりも、現代文明は生態系崩壊をもたらし、人類  
滅亡の危機にある。回避するには文明を転換して新しい文明のもとで環境  
問題のない世界をつくり出すほかない。だからこれに皆が協力するのだと

いうふうにもっていくのほうの説得的だと思う」

左山が中海と地之木に交互に見た。

「左山くんは、この際、問題多い現代文明に対して訣別を告げるべきだとい  
うわけね」

「訣別なんて……」

左山が口を尖らせ、中海に目を向ける。

「新しい文明を明示するということはそういうことなのよ」

「ソフトランディングするために……」

「それは方法論に過ぎないのよ。現代文明から新しい文明へソフトランディ  
ングするといっても、目標は新しい文明の実現」

「……」

左山は助けを求めるような目で地之木のほうを見た。

「現代文明をこのまま放置しておけば、ますます深みに入っていくような  
気がする。いまでも手遅れのように思えて仕方がないんだ。だから……」

「だからといって、現代文明への訣別宣言をするというのはどうか。ソ  
フトランディングを放棄することになる。いまの段階では敢えて新しい文  
明を目指すと言わないほうがいいと思う。まず反対派を極力刺激しないこ  
とだ。文明転換ではなく、文明改造と思わせ、彼らにも新しい文明世界を  
つくり出すための協力をさせればいい」

右野が地之木を制するように言う。

「そうよ。反対派を必要以上に刺激するのはどうかしら。この点からいう  
と、訴訟という手段はあまり妥当な戦術ではないかもしれないわね。これ  
よりも、あせらず外堀を埋めてから本丸に攻め入るべきかも……」

「なにを今更そんなことを言い出すのですか。中海さんらしくもない」

「でもね、彼らを納得付くで協力させる方法があるならばそれに越したことはないのよ。なんといっても訴訟は最後の手段だから」

「それじゃ、訴訟を契機にそうもっていくほかないよ。訴訟を争いの場じゃなく、説得の場とするんだ。中海さんの法廷テクニクでね。われわれには躊躇している時間はないよ。生態系崩壊のときが近づいているのだから。われわれも訴訟に合わせて文明転換活動を大展開することにしようよ、地之木さん」

左山は地之木の背を押すように言う。

「そういうことだね。われわれも相手の出方を見て、そのときどきの戦術を考えればいいだろう。そろそろ喜久枝先生が見えるんじゃないんですか」

地之木は中海に微笑んだ。彼女はいつもの笑顔に戻り、「明日の用意をしくなくちゃ」と言いながら立ち上がる。

中海は本田喜久枝と一緒に明日一番で東京地裁に訴状を提出し、そのあと記者会見を行なう予定になっていた。

13

「うまくいかないな。地之木さん、どうすればいいのかな。新しい文明の基本構造をもう少し明確にできないかなあ」

「もう少し具体的にね。実は新しい文明像の枠組みを考えるにあたって、地球の歴史を振り返ってみてはどうかと思ってるんだ。地球環境システムの発展過程を振り返って現代文明の問題点を探ろうというわけだ。なぜなら、人類は地球の歴史や形成過程を無視して野放図に地球上（地球環境

システム）で行動した結果、今日の地球環境問題の噴出を招いたからだ」

左山は口の中で「なるほど」と呟き、大きく頷く。

「地球の歴史を振り返れば、大まかにいって、地球誕生以来つぎの三つ発展段階があったように思う。最初の段階は生命誕生以前の地球で、これはいわば無機的な世界でいわば物理化学的地球環境システムである。つぎの段階が生命が誕生したあとの世界で、生物生態系が完備したいわば生物的地球環境システムである。そして現在が第三の段階で、人類誕生後の地球環境システムであるが、新しい文明のアウトラインを考えるにあたって、現代文明の支配する現実人間世界から離れて、いわばあるべき人間地球環境システム（と名付けるとすれば）を考えてみよう」

地之木の考えはこうだ。

地球環境システムは旧い前の発展段階を基盤としてそのうえに新たな段階を積み重ねられるようにして形成されてきたが、第一発展段階は物質やエネルギーが主役の物理化学的地球環境システムであり、その基本構造はまさに「循環」である。第二発展段階である生物的地球環境システムはこの「循環」を土台に形成されたもので、基本構造は生物生態系に見られる「共生」であるまいか。

ではこのつぎに形成される第三発展段階のあるべき姿はどうか。第一および第二の発展過程から形成されるべき第三段階の地球環境システムとしてのあるべき基本構造はどうか。「循環」と「共生」を土台に、なにが求められるのか。「循環」と「共生」を維持しさらに進化させるために、人間に対してどのような行動が期待されるのか。端的にいってそれは「連帯」ではないかと思う。

まず地球（自然）対人間の関係をみれば、われわれ人間は地球環境シス

テムから独立して生きているのではなく、地球環境システムのなかの一要素として他の要素と全体的な相互依存関係のもとで生かされているということだ。そうだとするならば、人間同士が殺し合うことなく仲良く助け合うこと（同一種であることの認識）は当然、さらに各人が互いに力を合わせて地球を守る責任があるのだ。

「だから、人間が新たに加わって形成される第三の発展段階である人間地球環境システムのあるべき基本構造は、『循環』と『共生』を土台に、新たに『連帯』が加わったものと考えるべきではないか」

「『連帯』か」

左山が腑に落ちないような声を発した。

「循環」とは人間活動にともなう物質の流れを循環させることだ。現代文明のもとで地球環境に一方的に垂れ流してきた分はもちろん、人工のアウトプットなど、文明のアウトプットのすべてを循環させることによって、環境汚染と資源枯渇を予防する。循環は有限な地球で生きるために不可欠なシステムである。

「共生」とは、人類も生態系の一員として個々の動植物や生物生態系と共存共栄を図って環境の多様性を維持し、地球環境システムの安定化に寄与することだ。これには地上の動植物と等しくわれわれ人間が生態系とともに生き生かされていることを自覚し行動することである。

「連帯」とは、われわれ人間すべてが助け合い、有限な地球の一員として協力し合い、互いが責任をもって行動し、かけがえのない地球を守ることだ。また人間同士が搾取したり搾取されたりせずに助け合うことによって、連帯して平和で公正な社会を目指し、資源の有効な利用に心掛け、再生可能な地球資源の枯渇を抑制することである。

「要するに、新しい文明のアウトラインは『循環』『共生』『連帯』を基本とするシステムと考えるべきではないかと思うよ」

「新しい文明の理念が『循環』『共生』『連帯』だといっても、すでに『循環型経済社会』とか同じような言葉が使われているんで、ピンとこない。なんか今更といった感じがして……」

左山は困惑した目を地之木に向ける。地球環境倫理の啓発普及を担当すると自分で言い出しおきながら、左山はいざ始めようとする段階になって迷ってしまった。どのようにこれを展開すれば新しい文明を実現するために一番効果的か判断がつかないのだ。

地球環境問題が出現して以来、世界的に地球環境に対する関心も深まり、日本でもまがりなりにも環境教育が実施されていた。一般家庭でも「地球に優しい」循環型社会を目指して、エネルギーの節約やゴミの分別収集が実施され、ガラス瓶やペットボトルなどのリサイクルが行なわれている。

このような状況のもとで、新しく「循環だ」「共生だ」といっても、従来の環境対策や環境教育のなかに埋没してしまう。

かといって、新しい文明のことを伏せている以上、この地球環境倫理が新しい文明のためのものだと言うことはできない。それでも「循環」「共生」「連帯」が新しい文明へ繋がる行動規範だと思えば、彼はかまわず地球環境倫理の発信をつづけた。だがいくら唱えても文明転換の認識もない者と同じことを繰り返しているように思えて仕方がないのだ。

ひたすら新しい文明のために発信しているのに、従来のものとなら変わらなく、これではむしろ現代文明の延命策の肩入れになるのではないか。左山は自分の遣っていることの意味を掴めずにいた。

「余りにしないほうがいいと思うよ」

地之木は慰めるような言い方をした。

「と言われても……、なんか現代文明の延命を手助けしているように思えて……」

左山は迷いつづける。なんとなく気にかかるのだ。

現代文明のもとで地球に優しい循環型社会をめざすといってもその全体像がはっきりしない。現在試みられているリサイクルやゴミの分別処理といった対策は余りに部分的であった。新しい文明のための「循環」「共生」を唱えたつもりでも、現代文明の表層を漂っている感じがしてならないのだ。

「はじめのうちはあまり厳格なことを言わずに、とりあえず、一人ひとりの意識が『循環』『共生』『連帯』の方向に向けることができればいいんじゃないかと思う。余り波風を立てずに、既存のもので利用できるものはすべて利用することだよ。徐々に内容を変えていけばいいんじゃないかな。焦っていたずらに混乱や反対を醸成することもあるまいし……。結局、その方が早いよ」

「でも、現代文明のもとでいう『循環』『共生』と新しい文明での『循環』『共生』とは、同じ言葉でも中味は全然違うんじゃないかと思うんですよ。途中で内容を変えることで済む問題ですかね」

左山は無限性を前提とする現代文明のもとで追求する「循環」「共生」をイメージすることができなかった。無限性のもとで「循環」という現象が存在しうるかさえ疑問であった。現代文明という開放系のなかに「循環」といった閉鎖系を組み込むことができるのか。「共生」にしても有限な世界でこそ意味があることではないか。

「厳密に言えばそうだろうな。確かに、大量生産大量消費大量廃棄の現代文明のもとで循環型社会をめざすといっても、それは中途半端なものではないだろう。モノの生産を抑えないでリサイクルを徹底しようとしても、まるで水を出しっぱなししておいて節水しろといっているようなものだから、そう効果があるとは思えないしね。まあ、できるなら最初から新しい文明のための『循環』『共生』『連帯』だと言ったほうがすっきりすると思うのも分かるよ。でも現に『地球に優しい』循環型社会をめざしている人々に頭からそれは間違っているといえれば混乱を生むだけかも……」

「そうかもしれない。でも彼らが現代文明の問題点をそっちのけにして、それだけで満足してしまわないかと恐れるんだ、オレは」

左山には現代文明の延命にどうしても力を貸すわけにはいかないという考えが強かった。それに地球環境倫理という基本のところ、方便だからといっていい加減なことをすべきでないと思うのだ。

「それじゃ、地球の有限性を前面に出してはどうか。有限な地球が地球環境倫理のキーワードというわけだ」

「有限の地球における『循環』『共生』『連帯』のあり方ということにして、地球環境倫理を唱えればいいか。でも現に使われている言葉が同じ『循環』『共生』だから混乱する。ここをなんとかできないのかな」

「われわれが考えている『循環』『共生』『連帯』の三つのキーワードは『持続可能な開発』とか『持続可能な循環型社会』といった国連が唱えた環境開発原理から導き出した類いのものではないんだ。われわれの『循環』『共生』『連帯』は地球誕生からの地球システムの発展段階を振り返り、それぞれの発展段階における特有の支配原理から導き出したものだ。たまたま同じような言葉になったけど、左山くんがそう思うのもムリがないよ。」

これからは有限な地球での地球環境倫理であることを強調し、地球システムの発展段階から導かれるものであることを明確にしたうえで、地球環境容量を関連させて発信することしよう。地球の環境容量が算定できればより具体的にできるけど……」

地之木が譲歩するように言う。

「そうですか。地球の発展段階から導かれるもので、地球環境容量が基本ですよね」

左山は目を光らせる。

「といつても……それをどうやって算定するのだが……」

地之木は左山の強い反応に驚いたふうだった。

「地之木さん、地球環境容量ですよ。これをはつきりできれば、あとはそれに付いていくことになるんじゃないんですか」

地球環境容量は地球のもつ有限な限界であり、地球上における人間活動の許容範囲となるものだ。地球環境倫理は人間活動を地球の許容範囲内に抑えるための基本であり、行動原理もそうでなければならぬ。

「地球環境容量を明示できれば、恐いものなですよ。正々堂々と現代文明を新しい文明に改造できる」

「えっ、なんだって。左山くんはどう思っているのか知らんが、現在、人間活動は地球環境容量をオーバーして行なわれているんだよ」

「もちろん、分かっていますよ。地球環境容量オーバーの事実を明らかにすることによって現代文明が行き詰まってしまっていることを目に見える形にできると思うんですよ。こうすれば世の人々も目を覚まして、新しい文明への転換を真剣に考えるようになるし、われわれの話にも耳を傾けてくれるようになるんじゃないんですか」

「そうならばいいんだけど……、まるつきり逆の反応が起こるかもしれない……」

南極や北極の生物からPCBやダイオキシンなどの残留性の高い化学合成物質が検出されるが、このことは地球環境の有する自浄能力を超えてこれらの物質が地球環境全域に広がって地球を汚染していることを物語るものといえる。この事実からこれらの物質がすでに地球環境容量を超えていると推定できるわけだ。ということは、現実にある汚染物質（原因体）が広く地球環境から検出されれば、その物質の地球環境容量がすでに超えていると考えられるということである。

「地球環境容量がオーバーしている事実を突き付ければ、行動原理の見直しも進むことになるかもしれないじゃないですか。それと『循環』『共生』『連帯』のキーワードが地球システムの発展段階との関係で導き出されたことを明確にしておきましょうよ。そうすれば、なぜ『循環』『共生』『連帯』なのか理解されやすいかもしれない」

左山は密かに地之木と共同で新しい発信文を書こうかと考えていた。

「発展段階とね……、それはいい考えかもしれないな」

「ただ、最後の『連帯』は……」

「実現はまだまだほど遠い状態だが、現代文明の巨大化高度化大量化の状況を考えれば遠からずそうならざるをえない。相争っているのは共倒れになるからね。とにかく人類は『連帯』しなければ互いに殺し合って自滅するだけだよ」

「うん、で、石油や石炭といった化石燃料など資源枯渇に関連して、省エネや省資源が唱えられているけど……、これは持続性との関連で……」

「地球環境倫理の具体的内容としているいろいろ指摘されているけど、われわ

それが唱える『循環』には殆どが含まれていると思うよ。地球システムでは循環のスパンが長い物質（資源）で人間の消費量が多いと枯渇することになる。これを防ぐには節約が有効だがね」

「なるほど……」

「地球環境倫理では、有限な地球の喩えとして、『地球は巨大な宇宙船だ』という考えを前面に出したほうがいいと思うんだよ。ひとつの全体を形成している地球のなかで環境を正常に維持するには、宇宙船の船内におけるように、モノの『循環』や生物との『共生』が重要なんだ。さらに巨大化高度化大量化した人間にとっては互いに助け合う『連帯』がなによりも必要なことだ。核戦争や原子力施設の事故などによる放射能汚染、有害化学合成物質汚染、水やエネルギー資源の枯渇、食糧不足、新型ウイルスや劇症バクテリアなどによる感染症の蔓延などを防ぐには人間同士が『連帯』して互いに助け合うほかないのだから」

左山は地之木の目がなぜか次第に熱を帯びてくるのを感じた。

14

「緊急にご相談致したいことができましたので、臨時の研究会を開催させていただきます。いただいた次第です……」

A社の担当課長中村は大テーブルの中央でズボンのポケットからハンカチを取り出し、禿げ上がった額の汗を無造作に拭くと、テーブルの向う側に離れ離れに並んでいる四人のメンバーの一人ひとりを確認するように見回す。やはり会議室が大き過ぎたと思った。急なことで手配が間に合わず、

役員用の大会議室しか空いてなかったのだ。

大会議室はA社本社ビルの見晴しのいい二〇階にあった。ほぼ中央に据え付けられた楕円形の特製の大きなテーブルの周りには大きな黒革張りの椅子が並んでいる。

研究会は、一九九七年、日本で環境ホルモンが問題化したとき、ビスフェノールAを生産する国内メーカー五社が集まり、科学的事実の調査と対策の検討を目的として設立された。メンバー会社の課長クラスが委員となり、外国の関係業界とも連携し、情報交換や共同研究を実施してきた。事務局は輪番制で担当し、任期は一年である。本年はA社の番だった。

「ご存知のことと思いますが、昨日、ビスフェノールAの使用差し止めと損害賠償の訴えが提起されました。意見交換をはじめるまえに、原告側弁護団の記者会見をビデオに撮っておりますので、まずこれをご覧いただきたいと思います」

課長は離れた席にいる係長に合図した。彼の斜め後ろにセットされた大型のディスプレイに画面が映し出された。四人のメンバーは一斉に顔を上げて画面を覗く。

マイクの並んだ机に中海清子と本田喜久枝を中央にして左右に若い男が二人並んでいる。喜久枝が訴状を示し、提訴した旨の報告を簡潔に述べた後、質疑に入る。

Q：なぜいまごろになってビスフェノールAを問題にするんですか。

A：ビスフェノールAの内分泌攪乱毒性が漸く明らかにできたからです。詳しいことは裁判で明らかにしますが、内分泌攪乱化学合成物質いわゆる環境ホルモンは人類の未来にとって由々しき問題なのです。

Q：ビスフェノールAについてはメーカーがまえから安全だと主張していますが……

A：安全かどうかの評価は第三者に任せて、生産者は安全性が疑われているようなものに代えて全然心配ないものをつくってほしいのです。

Q：環境ホルモンと疑われている化学合成物質はこのほかにもあるようですか……

A：環境ホルモンであることが明らかになればそれらもいずれ取り上げることになるでしょう。今回は取り敢えずビスフェノールAを取り上げたということです。

Q：損害賠償だけでなく、使用差し止めをも求めていますか……

A：未来の世代への影響を防ぐためには当然なことです。環境ホルモン様化学合成物質に限らず、有害な化学合成物質はすべて使用すべきではありません。ことにプラスチック類は大量に生産される一方で毎日ゴミとなって大量に廃棄されており、処理の過程でも有害物質を吐き出しています。石油系プラスチック類はすべて徹底的にチェックして有害なもの排除すべきなのですが、企業はプラスチック類の成分を明らかにしていません。どんな添加物や可塑剤がどの程度使われているのか不明です。それらの化学合成物質が安全なのか、それとも有害なのかさえ分かりません。ビスフェノールAはポリカーボネート樹脂、エポキシ樹脂、フェノール樹脂の原料なので、取り敢えずビスフェノールAを取り上げ、その使用禁止を求めたのです。

Q：ビスフェノールAを原料とする樹脂は広く使用されており、これが使えなくなると広範囲に影響がおよぶことになりませんが……

A：「プラス」面と「マイナス」面を比較して、「プラス」が多いから多

少「マイナス」があっても使用が許容されるべきであるという考えは有限な地球では通用しません。とにかく生産者は有害でないものを提供すべきでしょう。生産物の安全性は社会に提供するまえに生産者が事前に十二分にチェックする責任があるのではないのでしょうか。

Q：たとえビスフェノールAが環境ホルモン様化学合成物質だとしても、ビスフェノールAが発明された当時はもちろん、世界的に大量生産されるようになった一九四五年ごろでもまだ環境ホルモンといわれるようなことは誰にも分からなかったのでは……

A：だとしても、ビスフェノールAが環境ホルモンの疑いがかけられた時点以降の生産者の責任が消えることはありませんね。過失の有無に拘わらずですよ。

Q：現在一般に使用されている化学合成物質は数万種類以上あると思いますが、これらのすべてを事前にチェックすることができるとは思えませんか……

A：生産者が当然、事前に安全性のチェックを行うべきものです。それを怠っていたにすぎません。行政も事後的な規制でお茶を濁しておますが、もつてのほかです。かといって、一〇万種類とも二〇万種類とも言われている化学合成物質のすべてを行政で処理することは不可能なことです。生産者や使用者が自らの責任で事前チェックを行うことです。とにかく化学合成物質を生産するものや販売するものは事前に安全性をチェックすることは当然なことなのです。

Q：ところで被告はA社一社だけですか。ビスフェノールAを生産しているところはほかにもありますが……、なにか特別な意図でもあるのですか。

A：とくにありません。取り敢えずそうしたままで。ビスフェノールAそのものを問題にしているのでは……

Q：でも使用差し止めを請求しているのですから……

A：ええ、差し止めになれば、他のメーカーもなんらかの対応を迫られることになるでしょうね。必要があれば、いずれ他のメーカー相手に新たな訴訟を起すことになるでしょうが、いまのところは考えておりません。

Q：他社の訴訟参加も考えられることでしょうか……

A：そうなることも予想されますが、今回はA社のみを相手として提起しています。業界を相手にしているのではなく、われわれはあくまでも生産者の責任を問っているのですから……

ディスプレイから映像が消えた。記者会見のビデオは終わった。

A社の担当課長は顔を上げ、メンバーを見渡す。だが誰も口を開こうとしない。メンバーの面々は顔を伏せ、なぜ突然こんな訴えが提起されたのか理解できないというような面持ちで、配られた記者会見のメモに目を走らせている。

「B社さん、いかがですか」

議長役の中村は委員の一人を名指し、強引に顔を上げさせる。

「どうしていまごろになって訴訟を起こしたんですかね。どんな根拠なんですか。われわれはビスフェノールAの安全性について何度も確認実験を行い、その結果を公表してきたはずですがね。訴状はまだ届いていないのですか」

訴訟の直接の当事者となっていないせいか、委員の声には他人事のような響きがあった。中村は無然として「まだです」とぶっきらぼうに応える。

研究会をはじめた当初は委員にも熱気があったが、時間とともに緊張感も減退していった。幹事役の彼は訴訟を契機にもう一度委員間に緊張感が取り戻すことができるかもしれないと思い、急ぎ臨時の会合を招集したのだ。だが思惑がはずれ、失敗だった。訴状が届いてからでも遅くなかった。彼は早まった判断を悔いた。

「訴状を受け取ってからでもいいのですが、A社さんはどう対応なさるつもりですか」

端に座っている一人が発言した。外資系日本法人であるD社だ。

中村は虚を突かれた感じがした。彼は委員同士で対応方法を相談しようと考えていたのだ。訴訟への対応策を上諮るまえに、担当者として研究会の協力態勢を整えておきたかった。ビデオを見せれば自分から言い出さなくても、委員間で当然共同歩調を取ろうという話になると思っていた。

「A社さんだけが被告で、なぜわれわれを除外したのですかね。われわれもビスフェノールAを生産するメーカーに変わりがないに……、原告側はA社さんのビスフェノールAを特別と考えているのですかね」

皮肉屋のC社委員だ。メガネを掛けたE社委員が頷くように小刻みに頭を上下している。

「どうしてですかね。記者会見では取りあえずと言っていたから、追々、各社さん宛の訴えを提起するつもりじゃないんですか。そのときのために今回の訴訟に参加することを検討しておかれてはどうですかね。この機会にビスフェノールAメーカーが一丸となって安全性を訴えることにしてはどうですか。原告側はそうなることをおそれて当社だけをターゲットにしたのだと思いますよ。バラバラで対応することはテキの思う壺でしょう」

中村は口を歪めて言う。彼は業界がまとまって対応を考えるべきだと思っ



ていたが、その考えがぐらつき出しているのに気付いた。なにかわけがあるのかもしれない。各社と共同歩調について相談するのも、一度社内でも徹底的に考えてからでも遅くない。もはやなにも議論することはなかった。彼は「訴状が届き、当社の対応方針案が決まったところで、皆さんのご協力をお願いすることになると思いますので、何分よろしく」と言つて、一方的に散会してしまつた。

15

環境汚染の原因物質は人工的に開発された化学合成物質だけではない。アスベストのような有害な鉱物資源もあれば、鉱物資源や石油などの採掘の際に環境に放置されたり漏れ出る重金属など有害な物質を含んだ残渣やズリ、原発や使用済核燃料処理場などの原子力施設やウラン鉱山から出る放射性廃棄物など、さまざまなものがある。現に、これらに起因する環境汚染が世界の至る所で深刻化していた。だが種類や数では人間が作り出した化学合成物質によるものが断然多い。

東京でのビスフェノールA使用差し止め訴訟の提起が合図となつたかのように、各地で各種の環境汚染訴訟が相次いで提起された。

何万何一〇万という化学合成物質が環境を毎日汚染している。農業のように人間が自ら意図的につくり出して広く散布する化学合成物質もあれば、ゴミ焼却炉の煙突から吐き出されるダイオキシンのような製造工程や製品の流通過程あるいは使用や廃棄の段階で不用意にあるいは非意図的につくり出されるものもあつた。

とはいえ、これらの汚染原因物質は人間活動によるものか、あるいはそれにともない派生するもので、現代文明のもとで行なわれる人間活動にかかわることにかわりなかつた。人間が関与したものである以上、細心の注意をもってすれば予防可能なはずだ。にもかかわらず、不用意に環境に放出したり放置して環境を汚染してしまうのだ。

人間がつくり出し、環境へ放出放置した無数の化学合成物質が分解されぬまま大気中に飛散し、土壌を汚染し、河川に流れ込み、海洋を漂う。農作物や果樹を汚染し、鳥や魚を脅かし、人間に跳ね返って人体を蝕む。自業自得とはいえ、これが有限性の支配する地球環境の掟なのだ。天に唾を吐きつづける人間。これを裁判で決着を付けようとする事自体人間喜劇にすぎない。

「いっそのこと、官僚たちを洗脳したほうが早いかも」

右野が机で壁に向かって独り言をいう。

「うん？」

隣の左山が振り向く。右野は頭の後ろを両手で抱え、顔を壁に向けたままだ。

電話のベルが鳴った。反射的に左山が受話器に手を伸ばす。

「クリスティナ・ライネンという女性から電話がありましたよ」

戻ってきた地之木の顔を見て、左山がニヤツとした。

「それで……」

地之木は不機嫌そうに言う。

「もしかしたら、彼女、ここに訪ねてくるかもしれない」

左山は事務所の所番地を教えたという。

「それで……」

「さあ、空港から電話しているようだったけど」

左山と右野が好奇の目を向けている。地之木にはクリスティナ・ライネンという女性に心当たりなかった。だがどこかで聞いたことのあるような気がする。

「ところで相談があるんだが……」

地之木は先に奥の応接セットに向い、二人を待った。

「一体、何事ですか……」

左山は腰を下ろしながら言う。

「地球温暖化がこれまでの予想を超えて、今後ますますスピードアップするそうだし」

彼はソファの左山と右野に交互に目を向ける。二人は黙って、彼のつぎの言葉を待っている。

「異常気象が世界の穀倉地帯を襲えば、世界の穀物生産量がた落ちになる。輸入に依存している日本では食糧不足が現実の問題となるだろう。BSEや鳥インフルエンザなどで食肉の輸入が途絶えたことがあったが、そのときでも輸入先を変えれば牛肉や鳥肉を手に入れることができた。だが世界的な不作で穀物の備蓄量が底を突くようなことになると、価格が高騰して自給率の低い日本は真っ先に影響を受ける」

彼はふと人類に滅亡の危機が訪れるとすれば、長期的には環境ホルモンなどの有害化学合成物質汚染、短期的には温暖化による食糧不足かと思っ

た。「例の急激な気候変動が始まったのですか。あれは短時間のうちに急速に温暖化するんですよ」

左山が思い出したように言う。

従来地球温暖化は二酸化炭素の増加に応じて徐々に地球が温暖化していくものと考えられていた。急激な気候変動はグリーンランド氷床分析で見つかったこれとは別のパターンだ。一〇年単位の短い時間で突発的に気温が上昇し、急速に地球が温暖化するのだ。だがいまそれは別のさらに急激な温暖化がはじまっているらしいのだ。これは藤原が指摘したものだ。

「超急激な温暖化が切迫しているということですか。それはもう始まっているんじゃないんですか」

右野が目を上げた。

「そう……、もっとスピードアップしていくというのだよ」

「新しい文明への転換を急がなきゃ」

「間に合うかな」

「気候システムのような巨大システムが一度攪乱すると、それが収まりもとに戻るには長い時間が必要だ。温暖化の原因となる二酸化炭素などの温室効果ガスの増加を抑えてもなかなかもとに戻らないのだよ。たとえ新しい文明へ転換できても、地球環境システムがまえの状態に戻るまでにはかなりの時間がかかるだろうな。文明転換しても当分温暖化がつづくかも」

地之木は冷たく言い放つ。

「地球環境問題にはすべてそのような傾向があるんじゃないの。いまさらそんなことを言われても……、地之木さんも人が悪い。いくら対策をやっても目に見える効果が出ないのなら、この際、はっきり文明転換が必要であることを言って、新しい文明への転換を急ぐほうがいいんじゃないか。たとえ全員をテキに回してもね」

左山が珍しく気色ばむ。

化学合成物質汚染など現代文明の産物である環境問題は、対処療法でお茶を濁しているうちに、地球規模へ広がり、地球環境問題へと発展していく。これは水を出したまま壊れた水槽の修理や高上げをやっているようなものだ。水槽の補修工事ではまず元栓をしっかりと閉め、水を止めなければならぬ。さもなければ水栓から噴き出す水が水槽から溢れ出るように、環境問題の元栓が現代文明であるなら、いつまでも効果の上がない対策をつづけて人々に飽きられるよりも、原因となっている元栓を明らかにして、これをしっかりと閉めることだ。

地之木には左山の言い分が分からないではなかった。だが文明転換を急ぐあまり元も子もなくなってしまうのは困るのだ。それに新しい文明への転換を明らかにしたからといって文明転換がスピードを上がるとは思えなかった。

「右野クン、どう思う？」

「うむ……」

右野は曖昧な返事をして、地之木の顔を窺う。

「地之木さん、どうなんですか」

「一刻も早く新しい文明へ転換できればそれにこしたことはない。だが現代文明と新しい文明とは質的に全く異なる。現代文明のもとでも同じような『循環』という言葉がすでに使われているけど、新しい文明の『循環』はそれと全然違うものだ。それにもかかわらず、新しい文明を前面に出した途端、これまでの『循環』がそのまま大手を振って歩き出さないか。逆に、同じ『循環』という言葉なのに中味が全然違うのだといえば、いままで協力的だった人々に混乱や反発が生じるおそれがある。だから同じ『循

環』という言葉を使う以上、自然と中味が変わっていくような方法で転換を図れるならそのほうがいい。混乱を避けて中味を変えるのだ」

新しい文明における「循環」は、現在現代文明のもとで試みられている生産されたプラスチック製品だけを対象とするリサイクルと異なり、地球システム全体のなかで考えるものだ。新しい文明における「循環」はより全体的に考え、資源の有効利用から廃棄物の完全無害化過程までを包摂するものとなる。

それゆえ、現代文明のもとで試みられているいわば従来の資源節約型循環は現代文明の延命策にすぎず、新しい文明のものとは相容れないのだ。

「地之木さんは環境問題の対策を徹底していけば中味まで変わり、いずれ文明転換に至ると考えているわけだよ。左山クン、大混乱を招かずにそうなれば言うことないんじゃないの」

「それはそうだけど、余りに悠長過ぎるじゃないの、それじゃ。生態系の崩壊が刻々と迫っているのに、この調子ではそのままに文明転換がなされるか疑問だということだよ。そうならないその保証があればなにも言うことはないが、このままではオレには間に合いそうに思えないんだ。ここは一か八か、新しい文明への転換の必要性を明示して、積極的に皆に協力を求めてはどうかと思うんだ。生態系崩壊はいまや時限爆弾みたいなものなんだ。はっきり説明して選択させればいいんだ」

「それは単純すぎる。話を信じるものもあれば頭から信じようと思わないものもあるだろう。話を信じてこのまま現代文明を享受したいと思うものもあれば、新しい文明への転換を急ごうとするものもあるだろう。生態系崩壊もなんとか回避できると考えるものも出てくるかもしれない。どっちも、混乱は避けられないだろうな」

「協力するものだけでやればいいじゃないか。いまもそうじゃないか。問題をはっきりさせておけば協力者も徐々に増えてくるかもしれない。なにも知らされないで突然崩壊を迎えるようなことになるのは考えものだ」

地之木は黙って二人のやり取りを聞いていた。彼の脳裏に「時限爆弾」という言葉が妙に引つ掛かって離れようとしなかった。

「クリスティナ・ライネンです。ボルダーのビール醸造所のレストランで……、藤原サンがよろしくと言っておりました」

長身の身体を幾分折り曲げ、顔に笑みを浮かべ、突然の訪問を詫ひた。

「クリスティナさんとはあのとき一緒に一緒に訪ねてきたか。藤原くんはお元気ですか」

地之木はソファに招きながら、改めてクリスティナの顔を見上げた。それにしても彼女は一体何のためにここまで訪ねてくる気になったのか。彼はもう一度金髪を垂らした白い顔に浮かぶ淡い青色の大きな目をじっと覗く。

「あのHPを拝見して……」

「そうでしたか……」

地之木を見つめている好奇に満ちた目が大きく開いている。だが彼は彼女のことを思い出せなかった。

クリスティナは軽く二度頷いた。彼女は意を決したように姿勢を正し、真正面から彼の目を見た。

「東京で文明転換運動をやっている人ひとがいることは知っていましたが、藤原さんにお聞きするまではどんな人たちがやっているのか、全然見当が付きませんでした。今回来日を決意したのはこの人ひとと接触し、できたら

連携して運動を進めたいと思ったからなんです……」

地之木は口を閉ざしたまま、彼女の口元に目を向け、ふたたび開くのを待った。

「こうしている間にも地球温暖化は暴走をつづけ、生態系崩壊のときが刻一刻と迫っています。これを回避するために地球温暖化の暴走を止めなければならぬのは分かっていますが、二酸化炭素の排出量を削減するといっても具体的にはどうすればいいのか、現代文明を見直し、地球環境を悪化しない文明へ転換すればいいといわれてもなにをどうすればいいのか判然とできません。いまの文明を一〇〇パーセントすぐ別のものに転換することができればいいのですが、それはムリでしょう」

「時限爆弾が破裂するのはいつごろとお思いなんですか」

クリスティナを横目で見ながら、ソファを明け渡した仲間たちが聞き耳を立てているだろうと思いい、地之木は左山の表現をまねて言う。

「時限爆弾？ ああ、そうも言えるわね」と言い、彼女はくすりと短く笑ったが、すぐ真顔になってつづける。

「すでに生態系崩壊の危険水域に入っていると思えますが……」

「暴走の果てに爆発するのはいつごろですか」

「近い将来、温帯域から寒帯域にかけてかなりの範囲で急激な気温上昇に適應できない植物生態系の崩壊がはじまることでしょう。森林が枯死し、これによって大気中の二酸化炭素濃度が急増し、地球温暖化が幾何級数的に加速することになるでしょう。海面の海水が二酸化炭素によって酸性化が進めば、プランクトンやサンゴにも影響が出て、二酸化炭素の吸収力がさらに減退し、悪循環に陥ることでしょう。そうなれば、地球温暖化が一気に加速して生態系は全面的崩壊へ進むことになるかもしれません」

地之木にはクリステイナの言葉が一瞬悲鳴のように聞こえた。やはり、自分たちが行なってきた文明転換の試みも結局実を結ぶことなく徒労に帰すことになるのか、と一瞬彼は思った。

「地之木さん、そんな暗い顔をしてはいけません。運動家は最後の最後まで希望を捨てないものです。わたしも運動家の端くれとしてあなたがたと力を合わせて新しい文明を実現する運動を推進したいと思っています」

「新しい文明を実現する……」

「ええ、いまずぐ新しい文明を築くのです」

「地球温暖化の暴走は……」

「地球上に新しい文明が広がれば自然と収まります」

「え？ なんですって……」

地之木は余りの極論に驚きながらも、なにかしら悲観的な自分の胸中を覗かれているような気がした。

「これまでいろいろ試みてきましたが、いかなる方法でも思うような効果が上がりませんでした。これには地之木さんだけではなく、一緒に運動をなさっている方々も同感だったと思います。新旧の新たな対立が産み出され、むしろ崩壊を早めるんじゃないかとさえ思いました。アンダーソンらの寒冷化する試みもまだうまくいっていません」

地之木は衝立のかけで聞き耳を立てうずうずしている左山が目に見えなかった。

「分かりました。人類の生き残りのためにはあらゆる可能性を追求すべきだと言うのですね。あなたのお話はわたしの仲間たちも大いに関心があると思うので、彼らを加えて今後の方針を話し合うことにしたいのですが……」

クリステイナの話はこうだった。

地球は現在加速して進んでいる温暖化の暴走の果てに、やがて生態系が崩壊し、これで人類文明も下火になって漸く地球が寒冷化に向かうことになる。そのまえにもしかしたら温暖化を加速させた地球はグリーンランドの氷床を溶かし、南極の氷床を崩壊して現代文明都市を水没させてしまいかもしれない。

そこで、そうなるまえに全世界に生態系崩壊の危機を知らせる生態系危機時計を設定し、防止行動（「マイナス」最小化行動原理への転換の推進など）を喚起する。その一方で、有志が集まり「新しい文明村」の建設を進め、ネットワーク化して次第に世界規模へと広げていこうというものであった。

「新しい文明村」と名付けたからといって、これは別に規模が村落単位でなければならぬということではなく、小区画の地域でも、町の規模でも、また市の規模でもよく、規模の大小は問わない。これは既存の市町村といった行政区画がまるごと「新しい文明村」型への転換の可能性を考えてのことだという。

「世界文明化している現代文明を相手にしていたので、われわれは世界全域での全面的転換を考えてきたわけでしたが……」

「地球環境問題は多少地域的な差があっても全世界をカバーする地球規模の問題だから、『新しい文明村』といっても影響下から逃れることはできないけど……、『新しい文明村』はいいアイデアですね」

左山と右野のやり取りをどこか遠いところで聞きながら、地之木は頭のなかでひとつの情景を描いていた。

迫り来る破滅を目前にし、現代文明に最後の最後までとっぷり浸かって

いた連中が「新しい文明村」へ雪崩を打って押し寄せてくるのだ。

「世界各地につくられる個性溢れる『新しい文明村』はまさに新文明の生きたサンプルになる」

「生態系の崩壊を避け、現代文明から脱したいと思っている人びとのために、世界に向けて『新しい文明村』の建設を訴えましょよ」

地之木の胸の中にはまだしこりがあった。「新しい文明村」といった逃げ場を造るよりも、現代文明を全面的に転換して人類全体を救いたかった。

だが現代文明がすっかり行き詰まり、生態系崩壊の危機に直面し、進むべき方向さえ見失いたずらに迷走を続けているのに、依然として現代文明にすがりついて離れようとしぬ人びとをどうすることもできなかった。

彼らに文明転換が必要なことを理解させることは至難なことだ。破滅目の辺りにしなければ彼らは目を覚ますことはないのだ。彼らは「新しい文明村」も完全に無視することだろう。

地之木は最後の望みを託して、。クリステイナとともに、生態系崩壊までの時間を示す生態系危機時計を設定することにした。

16

クリステイナと地之木は東京のホテルで記者会見し、十一時三十分を指す生態系危機時計の設定を告げた。

「生態系が崩壊するのですか……」

「それは一体どういふことですか……」

「なぜ生態系が崩壊するのですか……」

「崩壊するとわれわれはどうなるのですか……」

「それはいつごろ崩壊するのですか……」

「十一時三十分というのは……」

「今世紀中なのですか……」

「確実に崩壊するのですか……」

「崩壊を回避する方法はないのですか……」

記者たちの質問が相次いだ。

これと前後して、インターネットで世界に向けて生態系危機時計の設定とクリステイナ・ライネン発案の「新しい文明村」のアイデアが発信された。新しい文明を先取りする「新しい文明村」は現実の地球のなかに小型の宇宙船『地球号』を具現するようなものであった。ここではもちろん「マイナス」最小化を行動原理とし、地球環境システムの発展段階から導き出された「循環」「共生」「連帯」を基本構造とするのだ。

世界に衝撃が走った。

生態系危機時計を十一時三十分にしたせいか、小型の宇宙船「新しい文明村」号が世界的な人気歌手のニューアルバムかような関心を呼び起こした。

このことが四人組の行動に新たな局面をもたらした。

地球環境問題対策という覆いが取り払われ、現代文明から新しい文明への転換が行動目標として掲げられた。文明転換を公然としたことで、これまで協力的であった人びとの中に突然態度を変えるものが現れた。だが生態系危機時計の衝撃なのか、逆に四人組の行動に興味を示すものも増えた。それよりも彼らを驚ろかせたのは「新しい文明村」に対する強い関心だった。家族単位や小グループ単位で「新しい文明村」をつくり出そうとする

試みが方々で出はじめ、それらがネットワーク化され、水が染み渡るように世界各地に広がっていったのだ。

「驚いたわ。ビスフェノールA訴訟はどうなるかしら」

中海は「新しい文明村」への関心の広がりに戸惑っているふうだった。

「『新しい文明村』が全世界を覆い尽くすまでには越えなければならぬ障害がまだまだ沢山残されているよ。行動原理が全面的に変わらなければ『新しい文明村』にも被害がおよびかねない。『新しい文明村』といっても地球環境問題の荒波を受けながら現代文明の大海に浮いている小舟に過ぎないのだからね。だからここでビスフェノールA訴訟で勝つことはとても大事なことだ」

「地之木さん、そんなことを言ったって、『新しい文明村』が世界中に広がれば、現代文明そのものが新しい文明に転換されてしまうじゃないの……」

「可能な選択肢があればすべてを試さなければならない。なにもしないで独りでに現代文明に置き変わることはないのだ。現代文明の息の根を止めないかぎり『毒唾』を吐きつづける。現代文明のもとでは決して環境問題が解消することはない。有限な地球では一地域の環境問題でもいずれ地球全体に広がり、地球環境問題になってしまうのだから」

地之木はきつぱりと言いつ切る。彼はなんとか彼女が訴訟を取り下げると言い出すまえに話題を変えたかった。

世界各地につくられていく「新しい文明村」が新しい文明のショーウィンドーとなって現代文明信奉者を改心させてくれるなら、それにこしたことはない。だがそんなことは夢空言にすぎない。文明転換には「新しい文明村」運動のほかに、行動原理転換やシステム改造など現代文明を変える

積極的な働きかけが不可欠なのだ。現代文明と新しい文明は決して両立しない。現代文明が生き続けるかぎり地球環境は悪化しつづけ、地球環境問題は解消することはないのだ。「新しい文明村」とはいえ同じ地球環境を共有する以上その影響を避けることはできない。「毒唾」を吐きつづける現代文明の息の根を完全に止めるまで気を抜いてはならないのだ。

「中海先生、あの訴訟はどうしても勝たなければならない。でなければ、訴えを提起した意味がない」

彼は殊更真面目な顔をして、あらたまった口調で言う。

ビスフェノールA製造差し止め訴訟はビスフェノールAが環境ホルモンかどうかということだけを問題にしているのではなかった。この訴訟を通して原告側が目論んでいるのは化学合成物質全般にわたる事前チェックの制度化だ。これはまた行動原理を「マイナス」最小化へ転換する契機になるにちがいない。いやそうするのだ。

中海は裁判所の廊下で開廷までの時間を潰しながら、喜久枝を待った。

彼女には地之木の思いは痛いほど分かっていった。だが裁判はそう単純ではない。ときには正論よりも法廷テクニクがものをいう。人類が滅ぶことを訴えても、裁判に勝つとはかぎらないのだ。

「ビスフェノールAが環境ホルモンだと主張するなら、原告は厳密な証拠を出してくださいよ。われわれ被告会社は他の同業企業者と共同で、ビスフェノールAが環境ホルモンとして機能する物質でないことを何度も確かめたのです。世界のいくつかの研究所と共同で徹底的に検討してきた成果です」

準備段階で裁判所を訪れたとき、たまたま居合わせた被告弁護団の若い

弁護士が勝ち誇ったように言う。

民事訴訟では訴訟が提起されると、裁判所が原告から受け取った訴状を相手方（被告）に送付して裁判が開始される。裁判は大まかに言って、訴状に対する被告の答弁（書）がなされ、審理の準備、冒頭弁論、証拠の認否、証人尋問、最終弁論を経て結審し、判決の言渡しにいたる。最初の段階で行なう準備に結構時間がかかる。裁判がスムーズに進むように、本格的な審理がはじまる前に当事者双方が互いに準備書面を用意して主張や反論の論点を整理するのだ。被告会社は五人の弁護士で弁護団を結成して全面的に争う姿勢を示し、準備段階から中海原告側に対して威圧的な態度に出ている。

「清子、待った？」

本田喜久枝の後にボサボサ髪の毛の小柄で風采の上がない中老の男性が立っている。

「高木先生ね」

中海は喜久枝の耳元で囁く。彼女は高木に近づき、挨拶を交わす。

高木は原告側が申請した証人の一人であった。本日の法廷でビスフェノールAが環境ホルモンの疑いがあることを証言することになっている。

法廷が開かれ、証人尋問がはじまった。

「証人はビスフェノールAの人体への影響について調査研究していますね」

本田喜久枝は証人台の高木に尋ねる。

「はい」

「どんな内容ですか」

「生殖機能障害について調べております」

「どんなことが分かりましたか」

「男児の尿道口が正常に形成されない先天性異常のひとつに先天性尿道下裂がありますが、環境ホルモンの作用が疑われています。そこで、先天性尿道下裂児をもつ母親と一般の妊婦とのビスフェノールAの血中濃度を比べてみたところ、後者より前者が約二倍ほど高かったことを突き止めました」

「それはビスフェノールAが環境ホルモン作用を及ぼしているということですか」

「そのように推定できると考えております」

「どうしてそのような先天性異常が生じるのですか」

「胎児に尿道と外生殖器が形成される妊娠初期において胎児や妊婦のホルモンの乱れが生じるのが原因だと考えられます」

「ビスフェノールAがそのような乱れを起こしたということですか」

「そう考えております」

高木は証人台で終始優しそうな目をして喜久枝の質問に応じた。つづいて行われた被告側の激しい反対尋問でも彼の態度は変わることがなかった。

「対象としたサンプル数は？」

「血中濃度の測定方法は？」

「ビスフェノールAのほかは？」

「先天性尿道下裂とビスフェノールAとの因果関係判定の根拠は？」

被告側は矢継ぎ早に反対尋問を浴びせ、高木の調査研究方法の不備や問題を執拗に突き、この研究報告がビスフェノールAの環境ホルモン作用を立証するものでないことを明らかにしようとした。

「先天性尿道下裂が一〇〇パーセント発現しない以上ビスフェノールAと先天性尿道下裂の間に因果関係が存在しないと結論付けるのはあまりにも



極論過ぎるものです。ビスフェノールAの環境ホルモン作用については動物実験でもすでに確認されていますが、男児の先天性尿道下裂は生殖器が形成される胎児の初期におけるホルモンバランスの微妙な乱れによるものと考えられるものです。このような影響を及ぼすビスフェノールAの濃度は極めて微量で、他の化学合成物質との複合影響も無視できません。また環境ホルモンに対するヒト側の感受性の違いも無視できません。たとえば、化学物質に対するアレルギー症も年々増加の傾向にあります。これも一〇〇パーセント発現しておりません。また最近増えつつある化学物質過敏症も発現するのは少数の人であって、いまのところ発現しない人のほうが多い。このようなケースでは一〇〇パーセント発現するかどうかで因果関係の有無を判断することは問題です。あくまでも厳密な因果関係でこれらを評価しようとするなら、取り返しのつかない事態を迎えることになるでしょう……」

高木は相変わらず優しそうな目をして反対尋問に応じていたが、最後に一瞬目が光った。

「環境ホルモンは人類存続にも関わる問題です。このようなことが一企業の利潤追求のために許されていいことでしょうか」

その瞬間、法廷が静まり返った。

被告弁護士は慌てて裁判長に反対尋問の終わりを告げた。

17

「全力投球で巻き返しに出てきたわ」

中海が冴えない顔を地之木に向ける。

高木証言が裁判官たちにインパクトを与えたいと考えた被告弁護人は即座に異議を申し立て、証言から最後の発言の削除を求めた。さらに三人の弁護士を加え、弁護団を増強した。これとともに新たに三人の証人を申請した。

「ビスフェノールAが環境ホルモン物質だとすると、原料として使えなくなる。ポリカーボネート樹脂は自動車部品に大量に使用されているから、そうなれば大打撃だ。だからといって、なぜビスフェノールAが環境ホルモンでないか頭から否定するような行動にでるのか。彼らは必死だろうが、次元が違うよね」

地之木は同じ人間でありながら、会社とか企業といった組織体に属しただけで問題のとらえ方や理解の仕方までを変ってしまうことが不思議でならなかった。そこは人間のこころや良心が棲めないところなのか。

「アメリカやドイツから証人を呼んでビスフェノールAが環境ホルモン物質ではないと証言させようとしているのよ。研究成果が世界的だと思わせる演出には敵わないわ。なにか手はないかしら。こちらもクリスティナ・ライネンに頼んであちらの研究者を呼ぼうかしら」

被告会社も参加している研究会が内外の研究機関に環境ホルモンの動物実験を委託していた。被告側はそれらの研究機関の研究員を証人として申請したのだ。法廷は欧米日の研究者による国際学会のような趣で、証言には専門用語が飛び交い、内容は専門家でなければ立ち入ることができないような微に入り細に入り詳細を極めたものであった。

「要するに、これまでも同じような動物実験の結果が出ているのですが、今回、より厳密な実験計画のもとに実施したメダカとラットに対するビス

フェノールAの影響実験の結果、メダカについては親子両世代にわたる期間、ラットには生まれてから死ぬまでの期間、ビスフェノールAを極低濃度から高濃度まで濃度を変えた水を用いて飼育したところ、メダカではいわゆるメス化現象がみられたのに対して、ラットでは生殖機能などに目立った影響を検知することはできなかつたのです。この実験結果から、ビスフェノールAは魚類に対して影響が認められたが、ほ乳類には影響がないことが明らかになったということです。よって、ほ乳類であるヒトに対してもビスフェノールAの環境ホルモン作用は見られないと言えるでしょう」

締めくくりの一言が裁判官の心証に微妙な影響を与えたらしく、中海ら原告側は反論を繰り返しても有効打にならず、気が気でなかつた。

「被告側とは別の角度から攻めてみたらどうかな」

地之木はじつと中海の顔を見た。

地球環境はさまざまな要素から構成されているが、これらの構成要素は個々独立に存在するのではなく、相互に関係し合ってひとつの全体を形成しているのだ。このように相互依存関係にある個々の要素が集まってひとつの全体を構成している地球環境にビスフェノールAのような化学合成物質が入り込むとどうなるか。それは丁度網の目に入り込むようなものであり、当然個々の構成要素のそれぞれとの相互依存関係が生じる。それゆえ、これまで地球環境に無数に投入されてきたさまざまな化学合成物質とは相互依存関係という網の中で相互に関係し合い、当然複合汚染をかたちづくることになる。

地球環境のなかの環境ホルモン物質はさまざまな化学合成物質との複雑な関係のもとで作用しているのであって、特定の環境ホルモン物質のみが全体から切り離されて作用することは決してないのだ。

「でもね……」

中海は自信なさそうな声で呟く。被告側証人尋問では地球環境の相互依存関係や全体性といった分かり切ったようなことすら通じず、客観的な実験計画のもとで厳格に実施されたラットを用いた実験結果を積み重ねる被告側証人の証言があたかも科学的に全体を説明したかのような雰囲気醸し出し、裁判官の心証を包んでいるのだ。

反対尋問に原告側が必死の反論を試みたくとも、微細な項目ごとに新しい証人を次々と繰り出す被告側の物量にものを言わせた応戦に手も足も出ないといった有様なのだ。原告側は防戦一方に追い込まれていった。

中海らは法廷外闘争に活路を求め、訴訟と併行して新たな活動をはじめた。

主だった企業に対して企業の社会的責任についての取り組み方を尋ねる作戦に出た。被告会社も当然対象だ。企業は社会があつてはじめて成り立つ存在なのに、コスト削減には熱心でも、社会的責任を果たすことには消極的な企業が結構多かつた。リスク管理や競争力強化を考えるなら、社会や環境に対して無関心では済まされない。社会や環境と積極的にかかわり合い、進んで責任を果たすことは未来を見据えた企業の当然の姿と思われるのに、未来を見ようとしぬ企業が多いのだ。

「相手のペースに乗せられていてはダメだ。論点を変えて、裁判官をこっちのペースに引きずり込まなくちゃ。それには……」

中海の奮闘を見るに付け、地之木はなんとか現状を打開する方法がないかと思う。

「うん、でも……」

「ビスフェノールAを原料として用いると決定したとき、事前にどのよう

なチエックを行なったか、この点を突くのはどうか」

「地之木さんに出てもらおうかしら、証人として」

中海は半ば冗談混じりに言う。

「いいよ」

地之木も軽く応える。

「ほんと……」

中海は目を光らせた。

研究会は毎月第四水曜日の午後に定例会議を開く。半ばマンネリ化し始めていた研究会であったが、A社に対する訴訟が提起されてから、本件が主な議題のひとつになって様子が一変した。

中村は経過報告するたびにメンバー会社が訴訟参加を言い出さないと密かに期待した。だが気配すらなく、毎回失望を繰り返していた。それでも彼は上機嫌であった。裁判は被告A社のペースで順調に進んでいたし、メンバー会社の協力も申し分なかった。

「秋までに結審し、来春早々判決ができることになると思います。今後ともよろしくご支援のほどお願いいたします」

彼はいつもと同じ言葉で締めくくる。これで散会となるのだが、その日は違っていた。

「あの、アンケートのことですけど……」

委員のひとりが発言を求めた。

「『企業の社会的責任』についてのものですか」

事務局として案件にすべきか迷ったが、中村はなにか引掛かるものがあって取り上げずに放置しておいたものだった。

「ええ、取り扱いはどうしますか」

共通のアンケートがあると、業界は相談して統一の回答を用意することが多い。

「各社さんはどうですか。なにしろ、うちは環境ホルモン訴訟を抱えていますのでね」

中村の声は皮肉っぽく響く。

「それぞれで回答することにしてはどうでしょう」

D社だ。

「そういうことでもいいですか」

中村は微かに頷く出席者たちを険しい目付きで見回す。今日も訴訟参加が話題にならなかった。早く散会したかった。

「ところである筋から耳にした話ですが、ある社でビスフェノールAに代わる物質を開発したらしいとか……」

「本当ですか」

「もう開発したという噂を耳にしましたよ」

「S社ですか」

ヨーロッパの大手の化学会社で、この研究会の海外メンバーだ。

「EUは規制が厳しいからな、化学合成物質に対して……」

EUで化学合成物質の安全評価を企業に対して義務付ける動きがあった。そのとき、早速研究会でも規制案を入手し、検討したことがあった。化学合成物質を使用する企業は安全評価を行い、担当行政機関に対して当該化学合成物質の評価内容を事前に登録しなければならないというのだった。

「なんでも今秋来春には製品化して市場に出すらしいです」

D社がぼつんと言った。

「え？ 本当……」

何人かが大きな声を出した。

中村は一瞬間のなかが真っ白になった。こんな重要な情報を知らずに、裁判に熱中し、ビスフェノールAが環境ホルモンでないことを証明しようと躍起になって奮闘していたとはなんたる間抜けか。それにしてもS社はこの研究会に加入しておきながら、ビスフェノールAが環境ホルモンの疑いを掛けられたときから代替物質開発をはじめていたというのか。この情報をすでに耳にしていたメンバーはどんな気持ちで裁判の経過報告を聞いていたのか。中村は裏切られたような気分だった。

噂が本当だとすると、いままで努力してきたことが根底から覆ってしまふ。中村は全身から力が抜け落ち、宙を歩くような足取りで自室に戻ると、執務机のまえでじっと考え込んだ。だがこれはというアイデアは浮かばなかった。

後片づけを了えたらしく、研究会の事務局を手伝っている部下が自分の席に戻ってきた。上目遣いに中村を窺っている。彼は部下の視線に促されるように腰を上げる。噂だけは一刻も早く部長の耳に入れておかなければならないと思った。

そのとき、不意に、D社の山本という男の童顔が浮かんだ。研究会の委員は各社とも課長クラスで統一していた。D社はいつからか係長の山本を代理出席させていた。D社はそのときすでにS社からビスフェノールA代替物質開発に関する情報をえていたにちがいない。

中村は胸の中で怒りの炎がめらめらと燃え上がるのを感じた。

18

ビスフェノールA代替物質開発のニュースは瞬く間のうちに関係者に知れ渡った。追い撃ちをかけるように、マスコミが相次いでこのニュースを大々的に報じた。なかでも経済専門紙が詳細な分析記事とこれに関する社説を掲載した。

それによると、二〇〇三年一〇月、EUが化学物質による人体や環境への影響を予防するための規制案を取りまとめたが、それに先立ち、S社はビスフェノールAに環境ホルモンの疑いが掛けられたとき、すでに代替物質の開発に踏み切っていたという。ほ乳類に対する影響が見られないとしても魚類への影響がある以上、生態系へ影響をおよぼし、環境への影響は避けられない。魚類に見られたいわゆるメス化現象は、最悪の場合、種の絶滅を引き起すかもしれないのだ。ほ乳類に対する影響が見られないからといってビスフェノールAが放置されていいということにはならない。代替物質が開発された以上、規制を待たずに自主的にこれに代えていくのが企業責任のあり方ではあるまいか。

欧州ではビスフェノールAを原料とするプラスチック類の製造販売を禁止する動きが強まった。手始めに、現在販売中のビスフェノールAが用いられている製品には処理費用が上乘せされた。新たに生産されるものについてはビスフェノールAの使用を禁止、新代替物質への転換を促すことになった。

「おい、自動車や家電機器がEUに輸出できなくなるんじゃないのか」

広田はゴルフ焼けた丸い顔を隣の佐東に向けた。M省S局S課は産業

政策を所管する部署だが、グローバル化にともない重点が国内経済政策から国際経済政策へシフトしていた。課長補佐の佐東はロンドンでの大使館勤務を了えて帰国したばかりだった。

「ポリカーボネート樹脂やエポキシ樹脂を使用するものはそうなりますか。」

自動車部品は一〇〇パーセント現地の規制に合ったものを調達することになるのかな。すべてが現地生産ですね、これからは」

佐東は目を輝かせ、色白の顔を幾分紅潮させた。

「それで問題はないのか」

「おありですよ」

「何だ」

「EUの環境戦略は規制の国際規準化なんです。このままでは日本は国際的に孤立することになる」

「それだけか」

「いや、環境は農業問題と同じなんです。とにかく環境は保護保全しなければならぬのに、その認識を欠いている。しっぺ返しは何年にもわたってつづき、そこに住んでいる住民がともに被害を被るようになる」

「地球環境問題となれば地球の全人口がしっぺ返しを受けるといふことかね」

「課長、そんなのきなことを言っているのですか。日本も戦略的対応を考える必要があるんじゃないんですか」

「で、きみはどんな戦略を考えているんだ」

「グローバル化のもとでは、日本もEUに対抗して環境規制の国際規準化を考えるべきなのです。それと環境対策技術の国際化……」

「ふむ……」

「もっと先鋭的に考えるべきかも……」

佐東は執務机で前を見たまま、同期の小山に誘われて参加した会合ではじめて会ったもじゃもじゃ頭の右野という男を思い浮かべ、呟くように言った。

「どういうことだ」

広田は短い首を強くねじって、じろっと佐東を見、先を促す。

「いいですか……」

佐東は椅子を動かし、課長のほうに体を向ける。

「……究極の総合的環境対策技術の開発ですね。たとえば『新しい文明村』システムのハードソフトの技術開発をすすめ、全世界に向けて輸出するのは。これを日本の新しい産業政策として立ち上げるのはどうですか」

「なに、『新しい文明村』システムだと……、なぜ、これが究極の総合的環境対策技術なのか」

「地球温暖化で気候システムはすっかり攪乱してしまい、世界のいたるところで異常気象や気象異変が頻発していますが、エネルギーを浪費する現代文明のもとでは温暖化の原因となる二酸化炭素の排出を減少させることはなかなかできない。エネルギー浪費型現代文明の延命を図るような環境対策を繰り返しても意味がないでしょう。いっそのこと、日本から現代文明に代わる新しい文明を発信してはどうですか。究極の環境対策技術として文明転換策を打ち出していくのはどうですか」

「バカ言うな。文明転換なんて、簡単に言うけど、おおごとだぞ」

「現代文明はシステムが巨大化しているうえに、企業が効率を追及するあまり極めて脆弱なものになっています。一寸した切っ掛けで雪崩現象を起こして崩壊する可能性があるのです。ですから、文明転換を誘導しよう」と

「……」

「企業には今後金儲けよりも環境に配慮するなど社会的責任を果すことを第一に考えて活動するよう仕向けることです。そうしなければ企業自体が社会的に淘汰されてしまうからです。それとともに、産業政策としての究極の環境対策技術を提示して技術開発の方向性を打ち出し、企業にその気にさせることが重要なのです。たとえば、従来のエネルギー多消費タイプの高温高圧型技術から省エネタイプの常温常圧型技術へ、ワンスルー型システムから循環型システムへといった具合です」

「それでこれらをセットして『新しい文明村』システムを輸出しようというわけか」

「さまざまな部品やサブシステムを豊富に加えていけば、文化や地域の特性を活かして風土や慣習に合わせた個性ある『新しい文明村』システムを組み立てることができるでしょう。なんらかの切っ掛けを与えれば、現代文明が支配する巨大都市はいとも簡単にモザイク型ネットワーク社会へと転換していくことでしょう」

「もちろん、企業だけが文明の担い手ではない。一般の消費者をもニーズの意識的な変化を通して新たな社会の実現に寄与させるのだ。」

「M省S局の一室で課長と課長補佐が議論を交わしているとき、法廷前の廊下で、中村は冴えない顔で中海を待っていた。」

「中海先生……」

中村は急ぎ足で近付いてくる彼女を呼び止める。

「はあ、ああ、A社の……中村さんでしたかしら。今日は……」

「ビスフェノールA裁判の日ではなかった。中海は不審そうな目で生気ない中年男を見直す。」

「法廷終了後、お時間頂けませんか。実は部長が是非お会いしたいと申し出ておまして……」

「代理人は同席なさるのですか」

「訴訟のことなら双方の代理人間で話し合い、当事者が直接相手方の代理人に話しかけるようなことは通常ない。」

「いずれそうなるかもしれませんが、今回は……」

開廷の時間が迫っていた。中海は曖昧な返事をして中村を振り切り、法廷に入っていく。その日は別件の証人尋問が予定されていたが、相手方代理人から証人の病氣理由に延期申請が出ていて、次回期日を決めるだけだった。中海は相手方代理人と一言三言葉を交わしてから法廷を出た。

中村が近付いてきた。中海を待っていたらしい。中村の後ろにひとりの男が立っている。背は低いが肩幅が妙に広い。

「いつも中村がお世話になってます。神田と申します。例の訴訟の件でご相談したいことがございまして……」

男はA社総務部長の名刺を差し出した。近くの公園のなかにあるレストランに席を用意しているといって、中海を誘う。個室が予約されていた。

「早速ですが、S社がビスフェノールAの代替物質を開発して今秋にも出荷するということです。当社はビスフェノールAが人間に対して影響をおよぼすような化学合成物質でないと信じておりますが、魚類への影響が指摘されていることに配慮して、代替物質の開発を機にビスフェノールAか

「これへ転換することを決定しました」

神田の額に汗が浮いている。隣の席の中村は神田の横顔を盗み見しながら、反応を確かめるように中海へ視線を送る。

中海は中村の視線を無視し、先を促すように大きく頷く。

「つきましては、当社としては訴訟を継続する意味がなくなりましたので、早急に終結してしまいたいのです。どんな形で終結するかは代理人の先生にお任せすることになりますが、先生にその意思がおりかどうかをお尋ね致したくて、不躰ながら出先まで伺い、ご無理を申した次第です」

神田はテーブルのおしぼりを取って、額を軽く拭いた。

「条件次第ですね。わたしどもの条件がすべてクリアされればすぐにも同意することになるでしょう」

中海はどんな条件にするか、一度喜久枝と相談しなければと思った。石油を原料とするプラスチックには先行きはなく早晚生分解性物質に置き換わるはずだ。だがそのまえに未だに家庭ゴミの大半を占める石油由来のプラスチックを即刻追放しなかった。それにしても企業はしぶといものだ。他社開発の生分解性物質に置き換えても生き残ろうというわけか。これでは家庭ゴミの量は変化しないだろう。行動原理の転換の目論みもあえなく頓挫したということか。

「じゃ、よろしいんですね。ではそういうことでよろしくお願いいたします」

神田はテーブルに両手を付いて深々と頭を下げた。

## 第四章

19

「計画中止だ。予想外に加速している」

受話器の奥からアンダーソンの慌てた声が響く。藤原が理由を尋ねようとしたとき、電話は切れていた。

「オスロにいる。明日帰る。詳しいことは帰ってから話すが、取りあえず調査は中止ということ……」

アンダーソンからふたたび電話が入ったのは数時間後だった。

藤原が遅れて参加することになっていたグリーンランド氷床調査が急遽中止になったというのだ。なぜ急に調査を中止しなければならないのか、彼はなにか釈然としないものを感じた。彼は氷床調査のあと凍土の融解によるメタン発生状況をシベリアで現地調査する予定だった。

北半球に広がる永久凍土は陸地の二三パーセントにもおよぶが、温暖化が進み、広範囲にわたって永久凍土の融解がはじまっていた。油田地帯のある西シベリア平原一帯で永久凍土の融解が著しく、大量のメタンガスを放出しているという。

永久凍土が溶けたすと、凍土のうえに設置した建造物の土台が揺らぎ、崩壊の危険が生じる。夏には電柱は傾き、道路が泥濘みとなった。開発が進んだシベリア地区の工業地帯では毎年建造物の補強工事に追われ、生産活動が滞り、経済や生活に悪影響をおよぼした。

ことに西シベリア地方の石油生産の落ち込みが激しかった。これが世界

の石油価額を急騰させる一因となった。永久凍土の予想を超えた融解速度にロシアなどの関係国は神経を尖らし、対策の協議をはじめた。

藤原の関心は二酸化炭素の二十倍以上もの温室効果をもつメタンガスの大量放出が温暖化をさらに加速させるおそれがあることだった。

シベリアでは約三万年前に凍土が形成された。年間を通じて0℃以下にある土壌や岩石を永久凍土といい、地中の水分が氷結して氷となっている。メタンガスが発生している湿地帯で凍土が形成されると氷の中にメタンガスを一緒に封じ込めてしまう。封じ込められたメタンガスが凍土の溶融によって分離し大気中へ飛び出す。

二酸化炭素やメタンなどのガス状物質は発生源から放出されると大気中で拡散し希釈され、地球をとりまく大気層のなかで時間とともに均一化していく。だが気流や気温などの関係で必ずしも迅速に拡散されるとは限らず、発生源付近の濃度が幾分高いことが多い。高濃度の放出が継続するところでは濃度の高い状態がつづき、全球に拡散して均一になるまでにはかなりの時間がかかる。

温暖化の激しい高緯度から北極圏の温暖化予測の精度を上げるためにはシベリア地方における最新のメタンガスの発生量と地表濃度のデータが欠かせない。地表から離れた大気中濃度や地球探査衛星データだけでは十分で物足りなかった。藤原はグリーンランド氷床調査のついでに足を伸ばして同地方の現地調査を是非行いたいと思っていた。

藤原は椅子に深く腰を下ろし、組んだ両足を机に載せ、頭の後ろで両手を組み、窓の外へ視線を走らす。一体、なにが調査を中止に追い込んだのだろうか。アンダーソンが「予想外に加速している」と言ったことと関係があるのだろうか。彼はあれこれと思い巡らす。



電話が鳴った。

「藤原サン、なぜ調査が中止になったのですか」

クリスティナだった。アンダーソンのプロジェクトチームの一員となった彼女も調査に同行することになっていて、彼を思い出し、彼は身を起し受話器を左手に持ち替える。

「アンダーソンから連絡があった？ キミに電話しようと思っていただけだったけど……中止の理由は知らない」

「アンダーソンが寒冷化実験を計画していたことを知っていましたか」

「え？ ほんと？」

実験とは初耳だった。アンダーソンもグリーンランド氷床分析で発見された急激な気候変動に関心もち、寒冷化のメカニズムについて考えていることは知っていたが、どんな実験をやるうというのか。彼には皆目見当がつかなかった。たとえ実験だとしても現地で行うとなれば一人でできるようなものではあるまい。関係国や住民たちの了解も必要だろうし、何人かの協力がなければ到底実行できるものではない。現在進行している温暖化を阻止して寒冷化に向かわせようとするのは、単なる試みとはいえ、対象は地球規模のものだからだ。

「『ヤンガードライアス事件』のこと知ってますよね。あれに類したことを考えていたんですよ」

ヤンガードライアス事件とは約一万二千年前氷期が終わり徐々に温かくなっていたとき突然急激に寒冷化したことを指す。数十年の間に地球の平均気温が五度Cほど低下し、ふたたび上昇して数十年に平均気温七度Cも高まったという。この気候激変期間は「ヤンガードライアス期」と呼ばれているが、この原因についてはこれまでにいろいろな説が唱えられてきている。

そのなかで有力な考えは近くにできた淡水湖「アガシー湖」の決壊により大量の真水が北大西洋に流れ出したというものであった。大量の真水の流入が北大西洋における深層海水の生成を妨げ、海洋深層大循環（コンベヤーベルト）を弱めた結果、寒冷化を招いたというのだった。

「なんだって……」

彼は嘔然とした。受話器を置くと、彼は研究室の中を歩き回った。頭が空っぽだった。なにも考えることはできなかった。

落ち着きを取り戻すと、彼は次第に落ち込んでいった。なぜ落ち込むの自分でも分からなかった。なにか自分だけが取り残されたような孤立感が襲ってきた。温暖化の予測にのめり込んでいた自分が腹立たしかった。

翌日、不意にアンダーソンがACARの研究室に訪ねてきた。

「中止せざるをえないことが起こって……」

藤原はじつとアンダーソンの目を見た。焦点のぼけた目のなかで瞳が浮いて落ち着きがなく動いている。

「……………」

口をきつく閉じたまま、彼はアンダーソンが口を開くのを待った。

「近いうちにグリーンランドの東部および南東部で氷床の大崩壊が起こるようだ。北東部や内陸部でも連鎖反応が起こるかもしれない」

黙っている彼にアンダーソンが探るような目を向ける。彼は寒冷化実験について訊ねようか迷った。だが自分からアンダーソンの秘密を暴くようなことはしたくなかった。彼はじつとアンダーソンから打ち明けるのを待つほかなかった。

「もし氷床が大量に崩壊するとどうなるかな……」

アンダーソンは目を窓に向け、呟くように言う。

「調査中止の理由はなんですか」

藤原はしびれを切らして声を上げた。

「……………」

アンダーソンは驚いて振り向いたが、口を開こうとしない。

「なぜ急に中止にしたんですか」

彼は再度詰め寄る。

「……………実は……………スポンサーからの指示なんだ」

「え？ スポンサーだって？ 研究資金はACARから……………」

ACARの研究プロジェクトには自前の資金で実行するものと外部から資金を集めて遂行するものがある。

「実はR研究所から一部が出ている」

R研究所は国防関係の機関に属する研究所だった。するとクリスティナが言っていた寒冷化実験はアンダーソン個人の考えによるものではなかったのか。R研究所は環境操作技術を開発しようと考えているのか。

藤原は迷った。この問題に深入りすればプロジェクトから離れることができなくなるおそれがあった。そうなれば当分日本に帰ることができなくなる。だが寒冷化実験についてもっと詳しく知りたいという思いも強かった。

「今回の調査にはヨーロッパ勢も参加することになっていたが、そのなか  
に素性のはっきりしない者がいたらしい。別に秘密のデータを取るわけ  
もないのに……………まあ、そういうわけでキミが望んでいたシベリアの調査  
もふいになってしまったが……………」

「……………」

彼はまだ釈然としなかった。かといってさらに追及する気にもなれなかつ

た。

「ところで、氷床崩壊のことだが、大量に崩壊するとどうなると思う？」

海面上昇は別にして……………」

「大量崩壊？ 大規模な崩壊のことね。まあ、崩壊の場所と量とによるが

……………」

「氷床に無数の亀裂が走っている。それらが連鎖的に継続して崩壊してい  
くとすれば……………」

「うむ、純粹に科学的に考えれば……………、もつとも北大西洋のほうに流れ出  
るか、それとも北極海に出るかによって影響が異なるだろう。だがどうし  
て大々的な崩壊が起きるようになったのかな」

「北大西洋に向かうとどうなる？」

「大規模の崩壊でも氷塊が小さく砕けて途中で溶けてしまえば、量が多い  
と深層水生成を妨げることになりかねないね」

「もし北極海のほうに流れ出せばどうなる？」

「温暖化が加速しているから北極海へ流れ込む温かい海水が優勢なので、  
このほうが確率が高いかも。この場合も氷塊が溶けながらベーリング海へ  
向うことになる」

「その場合がどんな影響が考えられるかな」

「詳しいことは分からないが、これまで以上に世界各地で異常な気象が起  
こるだろうな。北アメリカ大陸では干害、ことに中西部の穀倉地帯におけ  
る乾燥化がさらに進むことになるだろう」

「すると穀物不足から世界の食糧危機がさらに深刻化することになるのか」  
アフリカでは食糧不足から餓死者が増加し、食べものを求めて国境を越  
える環境難民が年々増えていた。これが世界中に広がるのは時間の問題だっ

た。

「温暖化の暴走を止めることはできない」

彼の頭のなかでアンダーソンの寒冷化実験のことが渦を巻いていた。

「なんとかして止めることができないか」

「もはや手遅れじゃないかな」

彼は意識していたわけではないが、ことさら悲観的な言い方をした。

「そうかな。いろんな方法が考えられると思うが……」

「たとえば……」

アンダーソンは藤原の目をじっと覗き込む。

「温室効果ガスを減らせばいい」

「そうしようと各国が努力したけど、世界の二酸化炭素排出量は増え続けている。それに永久凍土からのメタンも噴き出しているし……」

「……………」

「大噴火が起きて、噴煙が地球を覆うことになっても、日傘効果は一時的だ。むしろ気候を激変させるだけだ。海洋大循環を止めることができれば寒冷化に向うことだろうが、温室効果ガスが増え続けている状態ではどれだけ効果があるが分からないし……、とにかく人間に地球環境システムをコントロールすることはムリだと思う」

「たとえそうだとしても、なんとかすべきじゃないのか。二酸化炭素を吐き出しながら懺悔しているだけでは救いはない」

「いまさら救いはないだろう。自然に対して畏怖の念をもってひれ伏し、裁きを待つ以外ないだろう。われわれはやりたい放題なことをやってきたのだから」

「いろいろなことを遣りたい放題してきたのだからこそ、無為にすこすこ

とはできないんだ。なんとかして温暖化を乗り越えることだ。自然のサイクルではなく、われわれが自ら招いた温暖化ならわれわれの手で解決しなければならぬじゃないか」

「できればね。何十年にもわたって二酸化炭素などの温室効果ガスを削減しようとしたら、各国まちまちで足並みが揃わず、削減するどころか増え続けているではないか。二酸化炭素の最大排出国であるこの国が話し合いをずっと無視してきた。これはどういふことかね」

藤原の脳裡で無数の亀裂が走るグリーンランド氷床が端から音もなくドミノ倒しのようにつぎつぎと崩壊していく。

20

「暑いな。節水はいつまで続くのかなあ」

左山がうめき声を漏らす。

「こっちで雨が降っても山元では全然降らない。時間給水も時間の問題だな」

地之木はディスプレイのままで軽く応えながら首筋の汗を拭く。右野は口を閉ざしたままキーボードを叩いている。

冷房需要のため電力量が連日ピークを更新していた。電力会社は老朽発電所をも動員して電力需要に応える一方、節電を呼びかける。四人組はそれに応えてできるだけクーラーの使用を控えていたのだ。周囲の開発が進み、背の低い事務所ビルを取り囲むように立ち並んだ高層ビルが日覆となつて、幸いなことに殆ど陽が当たらない。これで午前中はクーラーなし

でなんとか我慢できた。

四人組は文明転換のためにさまざまな試みをつづけてきたが、これといった成果をなにも生むことがなかった。行動原理転換を目指したビスフェノールA訴訟も期待したほどのインパクトも与えなかった。現代文明システムは巨大で複雑しすぎるのか、どんな試みも空回りするだけだった。

温暖化は相変わらず暴走を続け、危機時計は刻々と時を刻み、生態系は崩壊に向って確実に歩を進めていた。だが現代文明には変容の兆しすら見られなかった。それでも四人組は相変わらず地球環境問題対策の必要性を訴え、情報を発信しつづけていた。

地球環境は日増しに温暖化の度合いを強めた。東京では三〇度を超える真夏日が五月に現れ、何日も続く。七月になると、連日夜になっても三五度を下らない熱暑の日が続いた。八月九月と灼熱地獄が続き、十月に入っても、熱波や熱風が荒れ狂う。

東京はすっかり熱帯化していた。冬が過ぎるとすぐ夏になるのだ。毎日ほぼ決まった時間に大粒の土砂降りがあった。その都度、銀座、日本橋一帯のマンホールから雨水とともに汚水が噴き出す。ここばかりではない。大田区から足立、葛飾、江戸川区に広がるゼロメートル地帯でも同じようなことが生じていた。毎日のように短時間に集中して降る一時間三〇ミリもの大雨が下水道めがけて一斉に流れ込む。処理能力を超えた下水道から雨水が溢れ出るのだ。

雨雲が去った後はふたたび強烈な太陽光線がビルの壁を射る。一瞬、雨滴の蒸発による気化熱で涼気が漂うが、すぐ熱気が戻る。ビルの谷間を湿った熱波が襲い、下水の異臭と排ガスが充滿する。汚染された都市大気は強烈な太陽光線を受け、熱せられて変質する。紫外線や熱によって大気中の

さまざまな化学合成物質が反応を促がされ、有害化学物質に生まれ変わり、光化学スモッグなど新たな大気汚染現象を生み出す。

日が暮れると、どこからともなく蚊の大群が押し寄せる。西ニル熱を広めるイエカやマリアアを媒介するハマダラカなどのさまざまな種類の蚊が方々の溜水に産み付けた卵がボウフラとなり羽化しているのだ。血に飢えた蚊は見境なく人間を刺す。

道路にこびりついた汚水の異物が乾燥して風に煽られ舞い上がる。空中から散布された蚊退治の殺虫剤とともに、異物のダストに付着したさまざまなバクテリアが熱風とともに都市住民を襲う。汚染された細かな微粒子は鼻孔から吸い込まれ、口腔から肺へと入り込む。

高層ビルが林立する現代都市東京にもマリアアや西ニル熱などの患者が溢れ、さらにさまざまな感染症患者に熱中症患者が加わる。いたるところで患者を乗せた救急車が日に何回となく警笛を鳴らして病院へと突っ走る。

高層マンションの一室で今日も独り住まいの老人が熱中症で息を引き取った。コンクリートの壁越しの隣部屋でマリアア熱に浮かされた少女が毛布に包まり夜を過す。

東京に限らず、世界の大都市の多くで、水と電力が不足していた。節水でよろちよろ水となった水道は水洗トイレを詰まらせ、臭気をばらまき、汚物の山を築く。電力供給が冷房需要に追いつかず、ワンポイント停電が常態化した。

大量交通機関がマヒし、断水マンションには臭気に満ち、停電マンションはオーブンと化し、感染症や熱中症の温床となった。

温暖化は年々加速していき、世界中でさまざまな影響が出はじめていた。

気候システムが大きく攪乱し、大気状態が極めて不安定化していた。最大風速六〇メートルを超える台風のもとに、大洪水が襲う。洪水が引いたあとに感染症を媒介する蚊や病原菌がはびこる。干ばつがやって来て水不足を招く。

こんなパターンで、局地的に極端に変わる気象現象がさまざまな二次災害を引き起こしていた。

世界各地を異常気象や気象異変が襲い、桁外れの豪雨で洪水や土砂崩れをもたらすかと思えば、一方で日照りが何日も続く。酷暑と冷夏が一週置きに交互に襲い、熱波、雷、雹、集中豪雨、竜巻、山火事、あるいは大寒波、暴風雪など、なんでもありといった有様だった。

大きく変動し不安定化しているのは大気ばかりでなかった。海水温の上昇が著しく、水高を増して饅頭のように膨れ上がった水温三〇度Cの巨大な暖水塊が赤道から遠く離れた日本近海まで広がった。

海水温の変化は表層海流の流れを変え、大気状態に影響をおよぼす。大気が一層不安定化し、異常気象を引き起す。熱帯性低気圧が頻発し、台風が大型化し、猛烈台風となる。

また表層海水の水温上昇は深層海水の水温にも影響をおよぼし、上昇をもたらす。殆ど変化しない深層海水の水温が上昇すると、深層水の流れや深層生物生態系に決定的な影響がおよぶ。深層水の流れが変わると、海洋の熱循環が影響を受け、海域の熱分布に変化が生じる。

熱波が襲ってビル壁がフライパンのように焼けても、大雨が降って大洪水が襲っても、相変わらず「茹で蛙」をつづける現代人には微妙な変化ぐらいにしか感じることはなかった。多少の変化はむしろ程よい刺激となって居心地のいい環境であったのだ。

温暖化が加速して進み、地球環境システムの攪乱がしだいに広がり、他の地球環境問題を巻き込み複合化し、極めて激化し出している兆候が現れだした。それにもかかわらず、世界は相変わらず成長を求めて経済活動を拡大し、大量生産大量消費大量廃棄に励み、石油や天然ガスなど二酸化炭素を吐き出す化石エネルギーの大量消費を続ける。また穀物生産が低迷し食糧不足が深刻化しているのに、世界人口も増え続けた。人口増加の一方で、餓死するものも増えていく。

北米大陸の穀倉地帯が連続して干害に襲われた。世界の食糧事情が極度に悪化し出した。異常気象で世界の穀物生産が著しく落ち込んでいるところに、穀倉地帯のトウモロコシの生産が壊滅的打撃を受けた。家畜用飼料の供給が著しく不足し、食肉の供給が年々先細りの状態にあった。世界の穀物価額の急騰は、食糧不足の貧困国を直撃する。国外から輸入したくても手が出ず、都市には飢えた群集が溢れた。

人の群れがコンクリートジャングルの廃虚のなかをあてもなく彷徨い、喘ぎ、息絶え絶えになってのたうち回る。現代文明の粋を尽くした巨大都市は内部から崩壊し、文字通りモニュメントと化しつつあった。

四人組の活動にもかかわらず、現代文明が以前より増して巨大化高度化大量化を加速していた。吐き出される現代文明の「マイナス」も巨大化高度化大量化している。

危機時計の針はゼロ時に向かって確実に進んでいく。有限な地球での限りなき巨大化高度化大量化は自ら自分の首を絞めることであった。

「現代文明は一向に衰えそうにない。まるで全速力で自壊を目指しているようだ。これではいずれ有限の壁に激突してしまうな」

右野が呟く。

「われわれのこれまでの行動は全然効果がなかったのかな。知らずのうちにかえて現代文明を延命させてしまったのかな。大体、地球環境問題対策で文明転換を図ろうなんて虫が良すぎたのかもしれないな」

地之木は自分の無力を痛感していた。早く戦略を転換し、後日に備えるべきではなかったのか。効果的な戦略はないのか。

「これまでの行動を転換して、自壊後に備えて生き残りを図りますか」  
右野が他人事のようにいう。

「われわれも『新しい文明村』を建設してはどうですか。ね、地之木さん」  
左山が熱い眼差しを向ける。

クリスティナ・ライネンの提案ではじまった「新しい文明村」の建設運動が燎原の火のように世界中に広がっていた。

地球上をくまなくカバーしている現代文明システムのなかに「新しい文明村」を新たに建設することはあたかも人体を支配する免疫システムのなかに異物を持ち込むようなものであった。だがいまもって「新しい文明村」は現代文明システムの小さな異物のままで、現代文明の存続を脅かすまでには育っていなかった。それどころか世界中に建設されている無数の「新しい文明村」が束になって対抗しようとしても全然問題とならず、圧倒的な力を有する現代文明から相手にされることすらなかった。

「現代文明に対するインパクトが殆どないのはなぜだ。『新しい文明村』が問題提起にさえなっていないじゃないか」

文明転換の尖兵になるといつて誰よりもクリスティナ・ライネンのアイデアに惚れ込んだ左山が大きな溜息をつく。

世界各地に点在する「新しい文明村」はネットワークで結ばれ、まがりなりにもひとつのシステムを形作っていた。だが問題は名前が共通であっ

ても個々の形態がまちまちで、中身も多様でばらばらな集まりにすぎなかった。文明転換の拠点となるべき「新しい文明村」が新しい文明についての認識の違いからいつの間にか現代文明からの逃避場所と化しているものもあった。

「文明転換のために『新しい文明村』を大都市のただ中につくるべきじゃないのかな。ガン細胞のように増殖させて大都市を内部から食い殺すように仕向けることだね」

右野が椅子を回転させ、二人に悪戯っぽい眼差しを向ける。

「なるほど、ガン細胞か。現代文明から新しい文明への転換をスムーズに図ろうと考えてきたけど、残された時間を考えると、新しい文明モデルを提示して、もっと積極的に『新しい文明村』の建設を進め、文明転換を押し進めるべきときかもしれないな」

地之木はあまりにも文明の全面的転換に拘っていたことに気付いた。彼にははじめから現代文明の転換は部分的ではなく全面的に進めるべきものという考えしかなかった。そうすることが文明転換の混乱を最小限に抑える方法であると信じていた。地球全体を覆い尽くしている地球温暖化などの地球環境問題の存在がその考えを後押ししていたのだ。

そのうえ、彼は文明転換をスムーズに行なうことにことのほか神経を注いだ。人体に譬えれば、体質改善のような方法で現代文明から新しい文明への転換を図ろうと考えていたのだった。

だがそれはムリだった。そのことに気付いて「新しい文明村」のアイデアを取り入れたものの、これは彼の考えと大いに異なるものであった。彼にはあくまで「新しい文明村」建設運動は局所的なものにすぎなかった。

譬えて言えば、「新しい文明村」はまさに現代文明のなかにガン細胞を

植え付けるような試みであったのだ。とはいうものの、これまで建設された「新しい文明村」は現代文明を食い殺すガン細胞として効率良く増殖するまえに現代文明の免疫組織に取り込まれて仕舞っていた。

そもそも現代文明が支配するテリトリーのなかに建設された「新しい文明村」が現代文明に対してガン細胞的に機能しうるかは疑問であった。巨大な力を持つ現代文明は最初から「新しい文明村」を無視し、攻撃対象と認識することさえなかったのではあるまいか。運動を進める側にも問題があった。わざわざ「新しい文明村」と名乗りながらも新しい文明の実体があいまいであった。これでは誰も文明転換を真に受けるはずがない。新しい文明の実体なしに「新しい文明村」をいくら建設しようと、そこが文明の転換拠点となることは決してないのだ。

地球環境問題対策による文明転換は完全に行き詰まっていた。また「新しい文明村」にも見るべき成果はなにもないのだ。

地之木は現代文明のなすままに任せて生態系の崩壊を待つほかないかと思つた。いまさら「新しい文明村」を建設したいと思つてもみなかった。

「それにしても暑いですね。そろそろクーラーを入れましょうか」

左山がこらえ切れないような声を出した。

クーラーから熱い空気が吹きだした。

突然、彼の脳裡に裏山の小川で産卵にやって来るトンボをじっと待っていた少年の頃が蘇ってきた。草いきれがむんむんする暑い夏の日だった。

青臭い草の匂いが鼻を突く。その途端、彼にひとつのアイデアが湧いた。

「われわれのこれまでの行動を具現化するつもりで、草深い田舎に『新しい文明村』を建設することにしようか」

「じゃ、強力なガン細胞をつくりましょうよ」

右野がニヤツとする。

「ガン細胞？」

左山は右野に目を移す。

「新しい文明を世界に広めるための拠点となるような元気のいい『新しい文明村』をつくらうということだよ」

「それがなんでガン細胞なんだ」

「ガン細胞のように現代文明内で増殖して本体を食い殺すというわけさ」

彼は左山と右野のやり取りを見守り、一段落するのを待つ。

「そう期待して『新しい文明村』を建設することにしよう。新しい文明のサンプルとなるような『新しい文明村』をつくれば……」

「なんですか」

口を嚙み、一息入れている彼を左山が急ぎ立てる。

「『新しい文明村』を生態系崩壊防止の砦とすることができるかもしれない」

「そうか。そのことを前面に出しますか。環境問題対策なんてカモフラージュする必要がないんですね」

左山はようやくやく得心したような笑みを浮かべ、じっと地之木を見る。彼は左山の目にはじめからそうしなかったことに対する非難ともつかない複雑な光が浮かんでるのを感じた。

「誤解しちゃう困るよ。ガン細胞化というのは言葉の言い回しだよ。現代文明のなかに『新しい文明村』を建設することはいわばゲリラ戦法のようなものだ。究極的には現代文明を全面的に新しい文明へ転換するのだからこれまでやってきたようなことも不可欠なことだ。新しい文明のサンプルとして『新しい文明村』のモデルを提示すれば、これを見て現代文明から新

しい文明への転換を積極的に支持する人びとが出てくるかもしれない。そうなればスムーズな転換を意図したこれまでの対策も大いに役立つはずだ」  
左山と右野は頷きながら彼の話の話を傾けていた。だが彼は言わなくてもいいようなことを言う自分をいささか持て余していた。残り時間が刻々と短くなっていくとき、なにを議論しようというのか。それでも彼には譲れないものがあつた。どさくさに紛れていい加減なものにしたとは言われたくないのだ。もしそんなことをすればこれまでの努力が完全に水泡に帰すことになるだろう。

21

「藤原くんが来ている。話があるらしい。そっちへ行っていいか」

池田だった。

地之木は返事を聞かずに切れた受話器を返しながら、藤原がなぜ突然帰国したのか訝った。あれから何年にもなるが、彼はACARに藤原を訪ねた日のことを思い浮かべた。つい最近のことのようにも、またずっと昔のことのようにも思える。

「池田先生は用事ができて遅れて来られるそうです」

やつれた顔をした藤原が彼に微笑みかける。アムステルダムから今朝成田に着いたばかりだという。

「いつまでこちらに」

彼はソファの背にもたれるように座っている藤原をじっと見た。疲れを押して訪ねてきた訳を早く知りたかった。

「夕方の便で発ちます。明日、打ち合わせがあるので……」

直接米国へ戻る予定だったが、是非話しておきたいことがあつて東京に立寄つたのだという。

「これからお話しすることは池田先生にもまだ話しておりません。先生は政府の委員もなさっておりますし、わたしも考え方も違いますので、徒らに巻き込んで迷惑をお掛けするわけには参りませんから……」

こんな前置きをして藤原が話したことはこんなことだった。

シベリアの油田地帯で永久凍土が溶け出し、石油の採掘に影響が出はじめ、温暖化を食い止めるための国際的な行動計画が動き出しているという。

これが実施されると、地球が温暖化から逆転して寒冷化に向うことになる。

「温暖化を減速できればいいでしょうが、そんなことができるんですか」

「大量の淡水を北大西洋に流し込んで深層海水の生成を抑え、コンベヤベルト（深層大循環）を弱めようという計画なのですが、問題があるので……」

「ヤンガードライアス事件を再現しようというわけですか。でも、どうやって大量の淡水を……」

「そこが問題なのですが、最近、冬にはグリーンランドに大量の積雪がありますので、これを利用しようというのです。雪崩を起して大量の積雪を一気に海へ落とそうとしているらしいのですが……」

「人工の雪崩ですか……」

「大量のダイナマイトが使われることでしょうか」

「でもその程度のことではコンベヤベルトに影響を与えるほどの淡水がでるのですかね。疑問です」

「実はグリーンランドの東側と南側では海岸に向かって氷床が流れ出し、か



なり奥まで無数の亀裂が走っているのです。人工雪崩を起せばこれらの氷床も連続崩壊を起すことでしょう。もしかしたらこのことも計算に入れているのかもしれませんが……」

「コンペヤーベルトがストップすることになりますか」

本当に大量の淡水が流入すれば深層海水の生成が妨げられるのか。これによってコンペヤーベルトが影響を受けると考えるのは妥当なことなのか。

「うまくいけば……」

「寒冷化することになるのですか」

「多分そうなるでしょう」

「寒冷化すれば寒冷化したで新たな問題が生じることになるんじゃないんですか。生態系にも温暖化とは逆のインパクトとなるはずだし……」

「寒冷化そのもの問題も出てくるでしょう。ヨーロッパでは、冬にはいたるところで河川が凍結するとか……、その他のこともありますけど……」

「……」

「実は……」

藤原が急に暗い顔になった。輝きを失った目を窓に向け、じつとなにかを堪えているふうだった。彼には藤原がなにを堪えているのか分からなかった。ふたたび口を開くのをただ待っただけでなかった。

「アンダーソンが死んだのです……」

「え？ アンダーソンが……」

声が出なかった。

「グリーンランドから帰った直後体調を崩して……、でも原因が分からない」

「……」

「検査の結果、これまで見たことがないウイルスが検出されたとか、新型のインフルエンザウイルスかもしれないとか、噂されている」

「グリーンランドとなにか関係でも……」

「同行者にも犠牲者がでたのです」

「すると……」

「そうです。未知のウイルスの仕業かと……」

グリーンランド氷床の氷は過去数万年から数十万年の間に降り積もった雪が解けずに圧縮されて形成されたが、氷の中には太古の微生物も閉じ込められているのだ。氷床が崩壊すれば、未知のウイルスなど太古の微生物も氷から解き放たれて息を吹き返すことだろう。

「グリーンランドがウイルスに汚染されているなんていうことがあるんですか。南極には雑菌類を持ち込まないように気をつけているじゃないんですか」

「そんなことはムリですね。現に、DDTやPCBなどの化学合成物質が南極ペンギンの脂肪組織からも検出されているし……、グリーンランドは暖かかったときもあつたし……」

「グリーンランドには現在でも数万人の人々が住みついていますよね」

「彼らはまだ未知のウイルスと接触していないのかもしれない。それとも彼らにはそのウイルスの抗体ができていないのかもしれない。もし未知のウイルスがグリーンランドに潜んでいるのなら」

「でもそんなことはこれまでも……あつたんですか」

「大分前のことですが、北海で大量のアザランが死んだことがありましたね」

「あれは北海の化学合成物質汚染のせいじゃなかったですかね。汚染され

た魚介類を大量に摂取したせいとか、ウイルスのせいとか言われていましたけど、当時は……」

「アザラシが大量に死んだのはジステンパーウイルスだったらしいのですが、あれも未知のウイルスとの遭遇だった……と言えませんか」

22

大量死の原因についてはアザラシがPCRBなどの化学合成物質汚染によって免疫不全を起していたとかさまざま言われていたが……。彼は思わず戦慄を覚えた。アンダーソンの生命を奪ったのはもしかしたらグリーンランド氷床から崩壊した氷のなかに潜んでいた未知のウイルスの仕業だったのではあるまいか。

藤原はじつと地之木の顔を見た。彼も藤原の顔を見つめた。二人は口を開くの忘れ、沈黙のなかにいた。

氷床が崩れ、未知のウイルスを宿している氷塊が溶けながら北海へ流れ込み、東と西に分かれ、一方が北ヨーロッパ諸国の海岸に押し寄せ、もう一方が北大西洋を南下して北米大陸東海岸へ流れ着く。

他方、北極海に流れ込んだ氷塊は海流に流されて彷徨い、ベーリング海峡を通り抜けた氷塊群は北米の西海岸を目指し、一部が親潮に乗って日本列島を襲うことになるのだろうか。

しばらくして藤原は「そろそろ成田に行かないか」と言いながら、腰を上げた。

別れしなに、藤原は地之木たちの活動についてクリスティナから聞いていたので、是非このことを伝えておきたくて立ち寄ったのだと明かした。

「『新しい文明村』運動は大いに推進してほしいですね、いまとなつてはこれが唯一生き残る道かもしれません」

彼は藤原の後ろ姿を見送りながら、なぜか胸騒ぎを覚えて仕方がなかつ

た。

日本列島のほぼ中央に位置する山間部にある古い家屋敷が四人組の『新しい文明村』造りの拠点となった。地之木、左山、右野の三人が先に出発し、中海はオフィスに残った。

三百年経ているという古い家はクモの巣だらけで廃屋寸前の状態だった。屋敷の石垣のまえには草が伸び切った休耕田が広がっている。

家中の戸を開放すると、古い家特有の匂いのなかに青臭い草の匂いが流れ込んできた。

三人は囲炉裏端に座り、目の前の広がる荒れた田園風景に見とれた。

かつては水田が広がっていた一帯が高齢化から少子化と続く社会変動のなかで完全にうち捨てられていった。食糧不足を迎えても息を吹き返すことはなかった。

「ステイブンス・ジョンソン症候群（SJS、皮膚粘膜眼症候群）という皮膚障害ね。原因が医薬品の副作用かと疑われているらしいけど、ボクに言わせれば、あれは人間が自らつくりだした化学合成物質の体内複合汚染だね」

左山は右野を相手にお喋りをはじめた。

「なんだって、急に。あれが化学合成物質の複合汚染だって」

地之木が割って入る。

「原因と疑われている医薬品は約三百種類ほどあるらしいけど……、医薬

品といっても多くは化学的に合成したものだし、総合感冒剤なんて一〇種類以上ものさまざまな化学合成物質を混合したものだ。医薬品という名が付いてはいるが化学合成物質にかわりがない。これらを一度に体内に入れるのだから、まさに自爆的な化学合成物質複合汚染じゃないかと思うんだよ」

「まあね。でもそれじゃ身も蓋もない言い方じゃないの」

「ボクが言いたいことは、ビスフェノールA単独の生殖障害に限ればメダカに影響があってもほ乳類のラットには影響がないかもしれないが、人間の体の中では当然他の化学合成物質と複合した状態になって複合的な影響が醸し出されているはずだということだよ。だからね……個々の化学合成物質について各々単独の影響を説明すればこれで十分とはいえない。一緒に存在する他の化学合成物質との複合的影響についてもチェックしなければ化学合成物質の影響を説明したことにはならないということだ。これは人体内だけに限らず、われわれの地球環境も同様だと思うよ。地球環境はすでに他の化学合成物質ですっかり汚染されていることを考えれば、単独の影響よりも複合影響の解明に重点をおくべきだと思うんだ。むしろ複合影響の解明を中心にしなければならぬということだよ」

左山は現代文明のもとで科学が部分思考に毒され、全体思考を忘れてしまっている現代人の思考法の問題点を指摘したかったらしい。いや「新しい文明村」の建設においてもつねに全体からチェックしながら進めなければ、とんでもない怪物をつくりだすことになりかねない。「木を見て、森を見ず」では困ると言いたかったらしい。

「目の前の休耕田にもいろんな農薬が散布されていたんだろ。ここで野菜を栽培するとなると、これらの化学合成物質で汚染されるにちがいな

い。『新しい文明村』といっても現代文明のテリトリーのなかに造らざるをえないんだから似たようなものだけだ」

地之木は日増しに濃くなる木々の緑に目を向けながら、北極海を彷徨う水塊群を思い浮かべていた。水塊は暖かい海水と出会い、溶けて小さくなっていくのか。溶けて生じた淡水はすぐ海水と混じりあってしまうのだろうか。それとも淡水は混じりあうことなく浮いて流れていくのだろうか。

突然、寂しく微笑んでいる藤原の顔が浮かんだ。彼は不意をつかれたようにしばらく呆然としていた。

四人組は「『新しい文明村』への旅立ち」というサイトを立ち上げ、建設を予告した。彼らは自ら建設を進める「新しい文明村」に関する議論や検討経過、設計理念や方法、実施計画などについてその都度発信して計画を練り上げ、モデルとなる「新しい文明村」の建設計画を策定し、建設に着手する。

危機時計の針に追われながら、内外に向かって「新しい文明村」運動への参加を勧誘する一方、世界に点在する「新しい文明村」とも連携し、自ら「新しい文明村」建設の実践活動を通して最後の最後まで現代文明の新しい文明への転換を試みることにしたのだ。だがいくつか問題があった。

「新しい文明村」の建設を始めるの当たって、四人はオフィスで何度も会い、議論を重ねた。

「まず、『新しい文明村』のための一般共通基本モデルだが……、これを考えるまえにもう一度確認しておきたいんだが、人間活動が巨大化高度化大量化してしまっている以上、現代文明に代わる文明システムでは現実の地球に合わせて人間活動をコントロールすることが不可欠だということね」

彼は念を押す。

「有限な地球では野放図な自分勝手な行動が制約をうけるのは地球環境問題対策の基本でもあるけど、だからといって人間の行動を頭から束縛したり、人間活動を闇雲にコントロールしたりするわけにもいかないのでは……」

右野が地之木に目を向ける。

「これまでどのように活動すれば限りある地球環境容量をよりよく利用できるかというようなことを考えることはなかったが『新しい文明村』ではそうはいかない」

「現代文明のもとの人間活動方法はご破算にして、宇宙船『地球号』型新文明における人間活動のあるべきあり方を考えるのですよね。地球の歴史に沿って地球環境システムの発展段階を踏まえて『循環』『共生』『連帯』を基本に……」

左山が目を輝かせる。

「現代文明の支配する地球のなかに『新しい文明村』を建設することは、いふなれば地球のなかにひとつの小さな宇宙船をつくることだ」

「新しい文明村」の設計原理に基づき、設計図が徐々に具体的になっていく。

「『新しい文明村』の建設場所には条件がある。海面上昇に備えて、海抜一〇〇メートル以上の内陸部、海岸付近なら三〇〇メートル以上必要だ……」

「南極大陸の氷床が全部融解するとすれば一〇〇メートルは低いし、三〇〇メートルは高すぎるのでは……、それに南極大陸の氷床が全部溶けるとはいんじゃないのかな。溶けても数一〇〇〇年先かも……」

左山が反論する。

彼は未知のウイルスのことを仲間の誰にも話していなかった。池田がたびたび電話してきたが、藤原のためにもこのことは伏せておいた。温暖化の果てに未知のウイルスが人類を襲うといっても、誰も信じまい。あまりに荒唐無稽な話なのだ。

これまで何度もグリーンランドで氷床調査が行なわれてきたし、調査員がウイルスにやられたという話もなかった。数万の住民にも問題がない。

このような状況のもとで未知のウイルス来襲を警告すれば、四人組の信用が一挙に地に落ちてしまうにちがいない。現代文明の問題点について警告を發し「マイナス」最小化への行動原理転換を試みてきた四人組の活動について多少理解を示してくれた人々も、グリーンランド氷床に潜む未知のウイルスについてはこれを率直に受け入れることはないだろう。

「いずれ温暖化転じて寒冷化するだろうから、南極大陸の氷床が全部溶けることがないだろうが、かなり溶け出すとして……」

彼は曖昧に応える。

「でもなぜ三〇〇メートルなの、海岸部では」

左山には腑に落ちないらしい。池田ら日本の科学者たちも参加して作成された国連の報告ではこのまま温暖化が進んでも二一〇〇年に約一メートルの海面上昇が予測されているにすぎないのだ。グリーンランド氷床がすべて溶け出すことがあっても数メートルの上昇にすぎない。

「台風時でも波の飛沫が飛んでこないようにだよ」

「そんなの飛んできても平気ですよ」

「……かもしれないけれど、とにかく安全第一、これが『新しい文明村』の掟だよ」

彼はこの問題にあまり深入りしなくなかった。

「大きさは……」

「とくに制限を設ける必要はないでしょう。われわれだけでもいいし……」

小さいところから始めても地球全体に広がっていつて欲しいですね」

「それじゃ、周りを柵で囲って『新しい文明村』とする……」

左山が先を急ぐ。

「その範囲が宇宙船『新しい文明村号』となる。なかには『マイナス』を一切持ち込まないし、そこから『マイナス』を一切出さないようにする」とだ。これが基本だよ」

「『マイナス』なしね、具体的にどうするんですか」

「当然『マイナス』最小化行動原理を採用することになるね」

地之木は大きく息を吐いた。まだややこしい問題が残っていた。なにを「マイナス」とするかだった。定義の問題だが単なる定義の問題ではないのだ。より具体的に考える必要があった。

「『プラス』でないもの、じゃないよね」

左山が右野の顔を見る。

「われわれが『新しい文明村』で実現しようとしている目標を仮にあるべき人間環境システムということにしよう。ではあるべき人間環境システムにおける『マイナス』とはなにか」

「地球環境問題とか……」

「そう、このようなものが最小化の対象となる『マイナス』に該当する」

「なぜ『プラス』じゃないものでいけないんだ。同じように思えるけどなあ……」

左山は口を尖らす。

「同じことのようにだけど、そうでもないんだ。『プラス』と『マイナス』の間のどっちともいえない中間地帯、まあ、グレーゾーンがどうしても残る。これがあるので『プラス』じゃないものを『マイナス』とすると、『マイナス』でもないグレーゾーンまで『マイナス』に取り込むことになる。それにマイナス最小化を行動原理として採用している以上、『マイナス』は『プラス』と切り離して取り扱うべきなのだよ」

グレーゾーンのことは別にして、「プラス」でないものを「マイナス」とすると、「マイナス」最小化を行なうにはなにが「プラス」に該当するかを前もって決めなければならない。だがこれを完全に決めることができない。それに「プラス」を特定すること自体問題なのだ。

対象となる人間社会や人間環境システムといったものは時間とともにつねに変化する。いわば発展あるいは進化する動態的存在である。そのうえ、これらについての知識や情報も不完全である。このためこれらを完全支配することは不可能である。また価値観が多様化しているので絶対的基準で「プラス」を特定することにはムリがある。このような状況のもとで、これが「プラス」だと特定されるとその「プラス」のみを対象に最大化を指向することになる。「プラス」となればそれを最大化しようとするのだ。とにかく「プラス」は最大化行動原理と結び付きやすいからである。

その結果、特定された「プラス」のみが最大化の対象とされ、他の「プラス」は排除されることになる。そうなると全体が偏向するだけでなく、多様であるべき価値観は画一化し社会システムの硬直化脆弱化を招くことになりかねない。

それゆえ、「プラス」の多様性を阻害しないために「プラス」を特定することを止め、あえて「マイナス」側に視点をとり、これを最小化すること

とにしたのである。一見同じことのように見えるが、「マイナス」を最小化することには「プラス」を最大化することと異なり、全く別の効果すなわち価値観の多様性に寄与する効果があるのだ。これは「マイナス」最小化行動原理のもう一つの効用なのだ。

「『マイナス』最小化は有限性の支配する世界における行動原理でしたよね。地球が有限であるから、新しい文明における行動原理もこれでなければならぬ。『マイナス』は『マイナス』自体を定義してから特定すること」と

左山が復唱するような口調で言う。

「でも『マイナス』にも時間による変化や完全支配不能など同様な問題があると思うけど……」

右野が嘴を入れる。

「その通りだね。だから『マイナス』を固定的に考えるのではなく、社会の変化に応じて見直すことも欠かせない。それは疑わしいものをも『マイナス』として取り扱うことでかなり救えるけどね。『プラス』最大化行動原理で社会の画一化硬直化を招くよりも、多少の問題があっても社会システムの多様性を確保するために直接『マイナス』を特定するほうが問題が少ないと思う」

「『マイナス』を特定するにあたって新しい文明をどう描くかが問題となる」

右野が呟く。

「そうだね。文明活動を行なう人類の行動指標は新しい文明モデルから導かれることになるけど、有限な地球環境システムにおいて基本的に排除すべき『マイナス』は人間活動によるエントロピーの増大と多様性の阻害だ

ね」

「エントロピーの増大と多様性の阻害？」

左山が異議を挟む。

「いたずらに地球環境システムを攪乱させてはならないのだ。地球のような巨大システムではひとたび攪乱しだすと攪乱が攪乱を呼び、システム全体が安定するまでにかかりの時間を要する。地球環境システムの攪乱は人類にとって命取りになるかもしれない。このため、システムの攪乱を呼び起すようなことは控え、システムの安定化を阻害しないように配慮する必要があるというわけだよ」

「攪乱の原因がエントロピーの増大と多様性の阻害というわけ……、基本構造とも関わるけど」

有限な地球に生きる生物は自ら有限性の支配を無視し、システムの安定化を阻害するような行動をしてはならない。地球環境システムは安定化を目指して攪乱の原因となるエントロピーの増大を最小限度に抑えようとにも、システムを一層安定させるためにシステム構成要素の多様化を図ってきたのである。このための効果的な方法として、地球環境システムが発展過程をとおして確立してきたのが「循環」と「共生」であり、あるべき人間地球環境システムで求められているのが「連帯」なのである。いいかえれば、「循環」「共生」「連帯」は地球環境システムの安定化を目指すエントロピーの減少と多様性の確保のための最適な装置ということだ。

「すると『マイナス』の基本的基準は地球環境システムの進化の方向と特性を基礎に基本モデルから導き出すことになると考えていいわけですね。

このなかで人間活動条件をどのように考えるべきか」

右野の総括癖だ。

「人間活動ではこれまで無視してきた地球との関係をまず考えるということね」

新しい文明は有限な地球環境のなかであるべき人間環境システムの実現を目指す。とすれば、人間活動によって地球環境システムを攪乱したりしてはならない。地球を宇宙船に喩えれば、まず宇宙船『地球号』のいわば安全運航が第一であり、望ましい人間活動条件はこれに合わせて整備することになる。いいかえれば、安全運航が人間活動条件の制約条件ということだ。

「では『マイナス』の指標は……」

左山がしびれを切らしたようだ。

「まず、地球環境システムの安定化を阻害しないこと、それにはエントロピーを増大させないこと、多様性を阻害しないことである……。地球環境システムの特性から求められる指標は固有の時間性を損わないこと、固有の空間性を損わないこと、有限性を損わないこと、全体性を損わないこと、階層性を損わないことの五つだ」

宇宙船のような有限な地球で生きるものはまず地球のことを考え、それに合わせて生きなければならぬ。人類は地球の有限性を無視し、これを無限なものとして仮定して自分本位に征服・支配してきた。その結果自ら制御不能な巨大化高度化大量化を招き、地球環境問題を噴出させたのだ。

すでに満杯になった状態の地球で人類が生き残りを図るには自分勝手な生き方を止め、より厳格に現実の有限な地球に合わせてその範囲内で生きるほかない。と同時に、地球を自分勝手に改造してはならない。地球はひとつの全体を形成しており、全体でシステムとしてのバランスを保っているからである。人類が不完全な情報や不完全な知識のもとに地球の改造や

改変を促すなら、地球システムは攪乱を起し、システム全体の不安定化を招くことになるのだ。

「『人間の命は地球より重い』んじゃなくて、『人間は地球環境システムに生かされる』ということですよね」

「じゃ、『マイナス』を出さないようにするにはどうすればいいのかわかんないシステムを考えるのか」

「事前に『マイナス』をチェックすること。人間の働きかけによって生じる地球環境システムへの『マイナス』を最小化することですね」

「それじゃ『マイナス』を生みださないシステムをどう考えるのか」

「地球は誕生以来、地球環境システムは安定化を目指して、最適な方法を繰り返し模索してきた。その地球環境システムのキーワードが『循環』『共生』『連帯』でしたね。これが宇宙船『新しい文明村号』の基本構造だ」

左山が叫ぶ。

「『新しい文明村』ではとくに『連帯』が重要ですね。なにしろ、人類は自然に対して能動的に働きかけ征服しようするばかりでなく、人類が相互に競い合い殺し合いまで平気です。人類の歴史は戦争の歴史と言われるくらい、殺し合いを重ねてきた。文明の発展とともに、戦争のための兵器が巨大化高度化大量化を辿り、いまや世界中に大量殺戮兵器が行き渡り、人類を何十回何百回も殺せる量の核爆弾や通常兵器が貯蔵されているという。とすれば、人間地球環境システムを維持するうえで一番重要なことは人間同士の争いの放棄だ。だが地球環境問題のほか人口爆発などさまざまな地球規模の問題が噴出する現在、これだけでは足りない。これらの問題解決には人類が連帯して積極的に対応するシステムが不可欠なんだね」

「だから地球環境倫理を全人類が遵守するようにしなければならぬ」  
左山に目を向け、地之木は大きく頷く。

「で、『新しい文明村』の一般モデルは……」

右野がもう待てないというふうに分走る。

「村民たるものは『マイナス』最小化を旨として、『連帯』して生物と『共生』を図り、物質の『循環』を徹底させるということ」  
地之木は一息ついてつづける。

「まず『循環』についていえば、採取採掘、生産、消費、廃棄の各レベルで循環を徹底し、化学物質などの環境への放出放出をゼロにする社会システムを構築する。これを裏付ける技術の開発が不可欠だ。これとともにこれまでの技術の見直しを行い、不適なものを除去し、適切なものと取り換えることになるが、そのまえに……」

循環を徹底するということは自然の循環に近づけることだ。これには循環のためのエネルギー消費は極小化する一方で、再生可能な資源の消費は必要最小限にする必要がある。再生可能な資源は再生可能なスピードを超えないようにしなければならない。

だから一〇〇パーセントのリサイクルを目指すといえながら、経済規模の縮小を恐れてリサイクルの対象となる生産物を減らそうとしないことは問題なのだ。ペットボトルのリサイクル率を増やすまえにペットボトルの使用量を減らすことが重要なのである。リサイクル率をいくら高めてもリサイクルする量が多ければそれに要するエネルギーも増える。たとえ自然に分解する生分解性プラスチックがこれと取って代わっても量が増えれば原材料や分解に要する時間も増え、資源浪費や生態系攪乱など新たな問題を生み出すことになるのだ。

「『循環』というのは最終段階での処理方法だということですよ」  
左山は代弁するように言う。

「『循環』のまえに、資源やエネルギーの節約というより、適正消費を考える必要がある。『循環』においては地球の有限性から大量生産大量消費大量廃棄という経済システムを問題にすべきなんだね。大量生産大量消費大量廃棄システムを放置したまま、いくらリサイクルを進めても意味がない。地球の有限性を無視する大量生産大量消費大量廃棄大量リサイクルじゃ話にならない」

「経済成長主義そのものも見直さなければならぬということですかね」  
右野が口を挟む。

「そうね。第一に、地球環境システムは有限な地球の一部で有限性の支配下にあることを忘れてはならない。だから『循環』（『共生』『連帯』）を徹底するまえに、まず地球の特性である有限性への対応を図らねばならないのだ。『循環』『共生』『連帯』は地球環境システムの発展段階での原理にすぎないのだから。新しい文明の基本構造は『循環』『共生』『連帯』であるけれども、それらは有限性などの地球の特性が支配する構造のなかに組み込まれ機能するように設計されるということだ」

地之木は左山に煽られて最初に「循環」を取り上げたが、急いで修正を試みる。

「分かった。有限な地球ということが第一の制約条件だということだね」

「『循環』のつぎは『共生』だ」

左山は右野に遅れじと口を挟む。

「これは地球上のあらゆる生命体と共生することだけど、それには生命体の生存の場である地球環境システムとも共生することになる。まあ、生物



は長い時間かけて形成されてきた地球環境システムのなかで生きている以上、これを人間だけの都合で改変しようとしたりしないことだ。開発と称して、人間が徒に山を削ったり、谷を埋めたり、海岸をいじくり回したりしてはならない。むやみに動物たちのすみかを奪ったり殺したり樹木を伐採したりしないということとともに、これらの生物の生存条件をむやみに変化させたりしないことだね。要するに、生物生態系との共生だ。大きくいえば、地球環境システムとの共生だね」

「森林を破壊して生物種を絶滅に追いやれば結局人類も滅んでしまう。だから生物は生命を維持するためにもっと積極的に互いに生かしあうということでしょう」

右野が割り込む。

「そうね。人類といえども、地球環境システムを構成する生態系の一員だという認識が必要だということ」

地球上に降り注ぐ太陽エネルギーを受け、光合成を行なう生物が出現して還元状態であった地球環境は一変する。光合成の過程で大量の遊離酸素が放出され、大気中の酸素濃度が高まり、海洋が酸化されていったのだ。このことが生物界に大きな影響をおよぼす。酸素を利用する生物が現れ、さまざまな大型生物が出現することになった。

無尽蔵の太陽エネルギーのもとで専ら光合成を行なう植物が繁茂し、地上を覆い尽くすようになると、それを餌とする草食動物が増えていく。草食動物が増えるとこれを餌とする肉食動物が現れる。

無機物から光合成で有機物をつくり、これを消費し、廃棄物は分解して無機物に返す。このような生産から消費、そして分解という循環を個々の生物が相互に協力し補完しあってバランスを取りながら行い、生物界全体

を支えているのだ。さまざまな生物がそれぞれの役割を持ち、大気、水域、土壌、太陽エネルギーなど無機的環境のもとで生物群集が共生関係を保ち、互いの生命を維持しあい、ひとつのシステムを形成維持している。これが生態系なのである。

「人類が誕生してこれを破壊しだしている」

地球環境システムは「循環」に「共生」を重ねて発展してきた。ところが生物の一員であるはずの人類が逸脱して自分勝手な文明を築き、「循環」や「共生」を無視して地球環境（自然）の征服に乗りだしたのだ。

「不完全な文明を引っ提げて欲望のまま暴走しているからですよ」

「かといって、生物の一員としての自覚を取り戻すだけでは十分ではない。というのは、大きな脳を持った人類は地球環境システムに新たな発展段階すなわち人間地球環境システムを形成してしまったからだ」

「『循環』『共生』といったキーワードのほかに、巨大化高度化大量化した文明のもとで生き残るための人類倫理ともいべき新たなキーワードとして『連帯』が必要なんですよね。人類同士の争いを止め、宇宙船『地球号』の安全運航を図らなければ自滅するだけだから」

左山はこれで終わりといった調子だ。

「そうそう、その通りだ。でも現実……」

「悲観的になってもはじまらない。さあ、宇宙船『新しい文明村号』の基本モデルだ。骨格は有限性の支配構造に『循環』『共生』『連帯』の仕組みを組み込んで構成するが、これを十分機能させるにはいわば安全運航のためのコントロールシステムといった装置を内蔵させる必要があるね」

「右野くん、流石だね」

地之木は右野の要領のよさに感心した。

「『新しい文明村』では食糧、水、エネルギーは自給自足が基本だ。なに「  
」とも地産地消が原則だ」

「でも孤立しちゃだめよ。当面『新しい文明村』は現代文明が支配してい  
る現実の地球のなかで生きるコミュニティであるべきよ」

仕事の関係で遅れてようやく合流できた中海が早口でまくし立て、地之  
木に大きな目を向ける。彼女は『新しい文明村』運動に関心がないわけ  
はなかったが、これまでの環境問題対策を通して文明転換を図ることによ  
り熱心であった。現実的な彼女はこれから建設する「新しい文明村」が現  
代文明から孤立した独りよがりの理想郷となることを懸念しているのかも  
しれない。

「この『新しい文明村』はガン細胞型にするんだよね」

左山が右野にウインクする。

「ガン細胞型ってなんなの」

「ガン細胞のように自己増殖を繰り返してひとりで増えていくタイプの  
『新しい文明村』だということ」

「そうなの。じゃ、貪欲に現代文明社会を食い潰していくのね」  
中海が念を押す。

四人組の「新しい文明村」の建設が始まった。現代文明一色に塗りつぶ  
されている地球上に、マイナス最小化行動原理に従い、新しいコミュニティ  
をはめ込んでいくのだ。簡単な仕事ではない。既存の物件や技術でも利用  
できるものは可能な限り利用する。何度もマイナス最小化行動原理による  
チェックを重ね、新しいコミュニティが形造られていった。

必要な資材は中海がチェックし選択した業者や会社から調達する。彼女  
はNGOの仲間とともに、組織や企業の行動について環境に対していかに

配慮しているかの評価を行っていたのだ。

二酸化炭素を排出するエネルギーは極力使わない。電気エネルギーは風  
力や太陽光による発電のほかに、小川の水力を利用して小型水力発電装置  
を設置する。とにかく自前のエネルギーを確保する。雨水の再生利用を心  
掛ける。

「エネルギーの節約や水を大切にすることはもちろんだが、『循環』『共  
生』『連帯』のためのソフトハードの技術を開発し、さらに充実する必要  
がある」

現代文明社会でもリサイクルが進められ、各種の循環事業が行なわれて  
いたが、地之木には不満があった。第一はゴミや廃棄物の量が減らないこ  
とだ。いくら循環を徹底させても量が減らないことには効果が半減する。  
第二は循環のためのエネルギー消費がバカにならないことだ。バクテリア  
などによる自然分解は少なく、高温高圧型技術の利用が多いのだ。これ  
はいくら循環を徹底させたところで問題は解決しない。

成長経済を前提として循環やリサイクルを試みることはまやかしのだ。  
産業界も行政も成長経済の微温湯から脱け出ようとせず、小手先の循環や  
リサイクルでお茶を濁し、さらなる経済成長を夢見ている。これではい  
くら循環を押し進めてもエネルギーの消費量は増え、二酸化炭素の排出量  
が増え続けるだけだ。

根本から現行システムを見直さなければ地球環境問題を解消することは  
できないのだ。

行政指導で大量のゴミ焼却を前提に大型のゴミ焼却炉の建設を進めたも  
のの、ゴミの量が減ってくるとリサイクルに回していたプラスチック廃棄  
物や埋め立てられた可燃物を掘り起こして燃やそうとする。

「この国の行政も政治もあてにならない。自前で、「ゴミや廃棄物をゼロにするソフトハード技術やシステムを造りださないといかん」

現代文明のもとのこれまでの技術体系を見直して、新たな「循環」技術、「共生」技術、「連帯」技術の体系を確立する必要がある。「新しい文明村」は新しい技術の開発拠点でもあるのだ。

「差し当たり包装類を廃止し、容器の再利用を徹底させることだ」

「買ったときにもその場で包装類をすべて取り除き、そこに置いてくる。容器も詰め替えるようにしよう」

「即実行だ。早速運動を起そう」

「そうなる包装業界がパニックだ。日本経済もおかしくなるかも」

右野が古巣を思い出したのか、幾分心配そうに呟く。

「そうかね。成長経済から安定経済に転換すればいいんじゃないかな。いや、経済というシステム自体を見直すことだね」

「そう簡単じゃないよ。産業界の再編から産業構造の変革が伴うことになる」

「大げさな。問題企業を庇うのか」

「というわけでもないけど、それなりの手順を考えないと必要以上の『マイナス』を生み出すことになる」

「そういう理屈で変革を先延ばしにするのが官僚や行政の手だ。変革には痛みが伴うのは当然だ」

「その痛みを半減しようというのだ」

右野の反論がつづく。

「それならいいけど、往々にして大したこともないのに大げさに痛みがあるといつて先送りしようとするからね」

「それは政治家の手法だよ」

「議論はいいわ。とにかく『マイナス』最小化を目指して『新しい文明村』を建設することよね、地之木さん」

一オクターブ高い一言に、右野と左山は顔を見合わせた。

中海が手配して環境配慮企業から調達してきた資材を用いて農家の古い家屋を改造していく。当面の住居の用意がなされた。

彼女はふたたび資材の調達に出掛ける。

23

「藤原が死んだ」

受話器の奥から池田の暗い声がした。悲痛な響きがあった。

「いつ？ 死因は？」

地之木は反射的に質したが、池田の返事を聞いていなかった。

アンダーソンそして藤原、相次ぐ二人の死はなにを意味するのか。やはり、アンダーソンの命を奪ったのは氷床に閉じ込められていた未知のウイルスだったのか。グリーンランドからの帰途わざわざ立ち寄り、未知のウイルスについて話したとき、藤原は同じウイルスに侵されていることに気付いていたのだろうか。死を予感していたのだろうか。だがなぜ敢えて危険を冒してまでグリーンランドへ赴く気になったのか。

もし藤原の死が氷床のウイルスだとしたら……。グリーンランド氷床の大崩落によって北海へ崩落した氷床塊からウイルスが飛びだし、スカンジナビア半島からヨーロッパ大陸西海岸を襲うのだろうか。西を南下して北

米大陸東海岸を襲えば、どうなるか。一方、北極海へ崩落した氷塊がベーリング海を通り抜け、アラスカ海岸を舐め、北米大陸西海岸や日本列島を襲うことになったら……。

「クリステイナ、詳しく説明してくれないか。藤原の死因はなんだったの。遺体はどこにあるの」

地之木は怯えているような目をしたクリステイナをじっと見た。

池田から連絡を受けて、クリステイナと連絡をとったが、彼女は何も知らないと言うだけで、多く語ろうとしない。彼は彼女がなにかを隠しているような気がしてならなかった。彼は自分の目で確かめようと、その日のうちに米国に向けて飛んだ。

「よく分からないの、なにが起きたのか……」

クリステイナは地之木を不思議そうにじっと見ている。なぜ彼が大学に突然現れたのか、まだ理解できないふうだった。

昼時を過ぎたカフェテリアには真空のような空間が広がり、空いているテーブルがいやに目立つ。彼は冷めかけたコーヒーを一口飲んだ。そのとき、視線を感じて目を上げると、壁際の席で新聞を広げている髭面の中年男と目が合った。

「クリステイナ、振り向いたらダメだよ。後ろの壁際の男がずーと僕らを見ているが、知り合いかな」

「え？ ゴードンかしら。アンダーソン教授の知り合いだった男よ……」

クリステイナは大学に残り、アンダーソンの死後も同じプロジェクトチームの一員として働いていた。

「ゴードン？」

ふたたび顔を上げると、壁際の席には男の姿はなかった。

「ジョージ ゴードン、WPの記者よ」

「WPの……どうしてここに……」

「取材でしょ。彼なら藤原さんのことを知っているかも。ほうぼうに顔を出しているらしいわ」

「藤原くんがなぜグリーンランドへ行く気になったのか」

「……………」

クリステイナは暗い顔をしてじっと考え込み、口を開こうとしない。

「わたしには彼がグリーンランドへアンダーソンの死因を確かめに行ったような気がしてならないんだ」

「アンダーソンの死因は結局わからずじまいだったわ。藤原さんはグリーンランドのウイルスの仕業と睨んでいたらしいけど、CDC（疾病管理予防センター）に依頼した検査でもそれらしいウイルスを発見することができなかったそうよ」

「CDCに？ アンダーソンが死んで、藤原が死んだ。二人ともグリーンランドから帰ってきた直後にね。変だと思わないかね」

「……………」

クリステイナは上目遣いに彼を見たまま、口を開こうとしない。

「実は彼がグリーンランドからの帰途東京に寄ったんだ。そのとき、彼から未知のウイルスがグリーンランド氷床に閉じ込められているかもしれないという話があったんだよ」

彼はじっと待った。

「それホント、そんなことを話すために藤原さんがわざわざ地之木さんのオフィスを訪ねたなんて信じられないわ。藤原さんからもウイルスが発見

されていないのよ。それに藤原さんと接触した地之木さんはなんともなさそうね」

クリステイナは彼をじろじろ見る。

「経口感染ウイルスかも。だからわたしは感染しなかった」

「……………」

クリステイナはまだ半信半疑の面持ちで彼を見つめている。彼女の疑わしげな目を見ていると、彼はふとウイルスに感染しているような気がした。もしかしたらそのウイルスは高地のボルダーと感応して激症化し、二人の生命を奪ったのだろうか。そんなことはない。彼は急いで妄想を追い払う。

「アンダーソンのグリーンランドでの調査ルートを教えてくれないか」

「だめよ。プロジェクトに関わることは無断で外部に洩らしてはならないことになっているから。もしかして、地之木さんもグリーンランドへ行くつもりなの」

「藤原はアンダーソンから調査ルートを聞いていたのだろうか。ウイルスが発見されなかったのは本当かな」

彼はクリステイナから藤原が担ぎ込まれた病院を聞き、大学を出た。彼はバスで今夜泊まるホテルへ向う。

チェックインを済ませ、エレベーターで四階の部屋に入ると、ベッドに倒れ込んだ。疲れがどっと出た。彼はそのまま眠り込む。

眠りの中で電話のベルが鳴っている。瞼を開こうとしても閉じたままになかなか開かない。ベルが鳴るままにして彼は眠り続ける。一度鳴り止んで、また鳴り出した。

東京からだった。

「池田だけ……、藤原くんの死因は分かりましたか」

「……うん、まだだよ」

「場合によってはこちらも対応しなければならぬからな。なにしろ彼はうちときみのところに立ち寄っているからな」

「分かり次第知らせる」

「だがあまり深入りしないほうがいいぞ。帰ってこれなくなるかもしれない」

地之木は何事にも慎重な池田の心配そうな顔を思い浮かべ、早々に受話器を戻した。彼は目を開けたまま、しばらくベッドに仰向けになっていた。

身体を起こし、受話器をとった。

「クリステイナ、ゴードンに会いたいんだが……」

「同じホテルの泊まっている筈よ。彼を見かけたら伝えておくけど、用事があったら遠慮なく言ってみてね」

クリステイナは別人のような明るい声で、今日は無理だけど、明日なら病院へも案内すると言う。

彼はふたたびベッドに横になった。耳元でクリステイナの明るい声が響く。大学で会ったときの暗い顔が蘇った。電話の女は本当にクリステイナだったのだろうか。もしクリステイナだったなら一体なにが彼女を急に明るい気持ちにさせたのだろうか。

彼は空腹を感じて目を覚ました。窓から差し込む明かりは消え、部屋の中にも夕闇が広がっている。いつのまにか、微睡んでいたらしい。彼は身体を整え、部屋を出た。

一階にあるホテルのレストランは、夕食には間があるせいか客の姿は疎らで、白いテーブルクロスだけが目立つ。彼は入口で案内を待っているとき、背後に人の気配を感じて振り向く。

髭面の男が近づいてくる。

「地之木さん？」

「ゴードンさんですね」

二人が同時に声を発した。

「クリスティナ・ライネンからあなたが会いたがっていると聞き、ホテルに戻ってすぐ電話したのですが、外出しているようでしたので探していたところですよ」

ゴードンが案内されたテーブルの椅子に腰を下ろしながら、地之木に微笑みかける。

「お仕事を妨げては心苦しいのですが、クリスティナからアンダーソン教授とお知り合いだったと聞き、教授のことをお訊ねしたいと思ったのです」

彼は自分でも幾分ぎこちない喋り方が気になった。

「わたしも藤原さんのことに関心があるんですよ」

「そうですか。特別の情報がありましたら是非お聞かせください。彼のことを調べるために東京からわざわざ来たのですが、情報が少なく困っていたところですよ。もっとも着いたばかりですがね」

ゴードンが藤原のことを調べているらしいことを知って、彼は急に饒舌になる。

「地之木さん、あなたは藤原さんの死を不審に思っているのですか」

「彼の死因を知りたいのです。わたしの知りたいことは、正確に言えば、彼の死がグリーンランドの未知のウイルスに感染したことによるものか、それとも全然関係がなかったのかです」

「グリーンランドウイルスですか。どうしてあなたはそう考えるのですか」  
「アンダーソンが死に、藤原が死んだからです。二人ともグリーンランド

に出掛けた直後に亡くなったのです」

彼は藤原自身が未知のウイルスに対する疑いをもっていたことを伏せておいた。

「藤原さんもグリーンランドに行ったのですね」

「アンダーソンの死因も、また藤原の死因も不明です。遺体からウイルスが検出されていないようですが、ぼくには信じられません」

「誰かが意図的に隠しているのじゃないかと言われるのですか」

「分かりません。でもアンダーソンはグリーンランドから帰ってきてからおかしくなったのです。そのことを知っている藤原はアンダーソンの死因を確かめるためにグリーンランドへ出掛けたのです。二人が相次いで同じような死に方をしているのに、世界最高の病理研究機関を有するこの国で死因を解明できないなんていうことがありえますか。あなたはどう思えますか」

「アンダーソンに次いで藤原さんが亡くなったので変だと思いましたが、ありえないことはない。でも偶然にしちゃ重なりすぎですかね。アンダーソンが急に亡くなったのでどうしたのかと思ひ、わたしも方々を訪ね回って彼の死因について聞いているのですが、未だに判然としません。でも一体なにが問題なのですか。あなたには犯罪の匂いでもするのでしょうか」

「この問題は二人だけの個人的なものではありません。もしかしたら人類全体に関わる問題になるかもしれないですよ」

ゴードンは目を丸くして地之木をじっと見た。

彼は温暖化によってグリーンランド氷床が大規模崩壊を起しそうなこと、崩壊した氷床が冰山や氷塊となり、海流に乗って世界中に広がる可能性があることを話した。

「もし氷床のなかに閉じ込められていた未知のウイルスが氷塊とともにスカンジナビア諸国、イングランドや西ヨーロッパ諸国の海岸に流れ着いたらどうなりますか。北米東海岸を襲ったらどうなりますか。日本列島、朝鮮半島、極東ロシア、中国の海岸を襲い、北米西海岸を襲う可能性もあるのです。もし未知のウイルスが世界中に蔓延するようなことになったら、人類は大打撃を被ることになるでしょう」

「そんなことが本当に起こりうるのですか。グリーンランド氷床がそんなに簡単に溶けるのですか。大規模な崩壊が明日にも起こりうることなのですか」

ゴードンはまだ半信半疑の面持ちだった。

「アンダーソンはそのことを確かめるために出掛け、藤原もそれを確認していますよ。以前から、彼は急激な気候変動によって温暖化が暴走し、グリーンランド氷床が大崩壊を起す恐れのあることを警告していたのです」

「いつ起こるのですか」

「急激な気候変動という現象は一〇年とか二〇年といったオーダーで急速に温暖化が進むと言われているものです」

「すると……」

「ですから、未知のウイルスの仕業かどうか早く知りたいのです、二人の死が……」

「……………」

「もしそうなら関係国が連携して一刻も早く対策を講じなければならぬ。さもなければ大災害を引き起すことになる……」

ゴードンは大きく頷いた。

彼はゴードンと別れて部屋に戻ると、シャワーを浴び、ベッドに横になっ

た。だが妙に頭が冴えて眠れなかった。彼は意識することなくいつのまにかゴードンと交わした会話を反芻していた。

彼は自分が一方的に話し、ゴードンはおっぱら聞き手になって彼がなにも話していなかったことに気付いた。ゴードンのことをアンダーソンの知り合いだとクリスティナから聞いていたことが彼から警戒心を奪っていたのかもしれない。だが彼が一方的に話す気になったのも、こころのどこかに新聞記者であるゴードンの協力を願う気持ちがあったからではなかったのか。

ゴードンは別れ際、明日藤原が担ぎ込まれた病院へ同行して、死因調査に全面協力すると約した。

突然、不安が襲った。池田が深入りするなといていたことを思い出した。もし二人の死因が未知のウイルスと分かったら、即座に自分も隔離される恐れがあるのではないか。

彼は迷った。

ここで引き返そうというのか。どんな危険が待っていようと、もう一歩踏みだしてみたらどうだ。でも隔離されて東京に帰れなくなったらどうするか。

この国は未知のウイルスに対する情報を世界に発信し、国際的な対策を講じようとするだろうか。それともなにも知らざれることなく、日本列島はまんまとウイルスの餌食になってしまうのか。

池田の声が響く。彼は長い間ベッドのうえで輾転としていた。

ふと、藤原が身の危険を省みず、グリーンランドに赴いたことを思い出した。どんな危険があろうと、藤原の死因を確かめなければならぬのだ。あとのことはそのときになってから考えればいいことだと彼はこころに決

めた。

24

勝手気ままに振る舞ってきた人間に対して、地球の仕返しが始まった。自然は浄化作用を停止してしまつた。化学合成物質などの異物が自然の浄化能力を超えてしまい、生態系がいたるところで綻びだしているのだ。

地上には人間の吐き出す汚物や化学合成物質が浄化されることなく溜まり、汚染した大気が充滿し、河川や湖沼には汚水が流れ込み、悪臭を発する。一見清浄に見える大気や水域にも無数の化学合成物質が溶け込んでいた。海岸にはポリ容器やペットボトルなどのほかに、使用済みの汚染された注射針や血液製剤の容器などが混じっている。ゴミが大量に押し寄せ、農地は農薬の大量使用により酷使されて不毛化し、乾燥して砂漠と化する。

強風に大量の砂じんが舞い上がる。なけなしの地下水を汲み上げて農作物に与えても、すぐ蒸発して地下水の溶け込んでいる塩類が噴き出す。

化学合成物質は殺虫剤など農薬として広く散布されたり、さまざま製品に使用されて製造過程や使用・廃棄過程で環境に流れ出る。流れ出た化学合成物質は下水や河川から海へ行き着く。化学合成物質は海から水蒸気とともに大気を昇り、雨に取り込まれてふたたび地上にもどって汚染を繰り返す。

環境に放出されたDDTやPCBなど無数の残留性の高い化学合成物質がわずか数十年の間に地球上くまなく広がった。いまや地上には無垢の地はなく、地球環境は化学合成物質によって完全に汚染され尽くされたしまつ

ていた。

化学合成物質が分解されずに長期にわたって環境に残留すると、食物連鎖を通して濃縮していく。

プランクトンや藻類、草木などに吸収された化学合成物質はこれらを消費する魚介類や動物の脂肪組織蓄積される。これらをさらに上位の捕食者である大型の魚や動物に食べられることを繰り返すうちに何千万倍何億倍に濃縮されていき、高濃度な化学合成物質を蓄積し、有毒化していくのだ。食物連鎖の頂点にいる最終的な捕食者である人間は有毒化した魚介類や動物を食べ、致死量を超える毒物を体内脂肪組織に蓄積していくのだ。

一九八八年のことだ。北海で二万頭ものアザラシが死んだ。ヨーロッパ全域に棲息する数の約半数にあたる。わずか六カ月の間の出来事だった。当初は有毒な藻類、地球温暖化、化学合成物質の流出など複数の原因によるものかと考えられたが、やがてウイルスが原因と判明した。その後、アザラシが餌とする魚にPCBなどの化学合成物質が蓄積しており、これらがウイルスに対する抵抗力を弱めたことが明らかになった。

生息環境を汚された生物たちは体内に毒物を高濃度に蓄積して人間に復讐を試みているのだ。

これだけではない。これらの化学合成物質のなかには、たとえばビスフェノールAのような環境ホルモンという内分泌攪乱物質が存在する。これに曝されると、ワニなどの動物は生殖器の未発達や卵の孵化率が低下する。暴露実験では実験動物に睾丸のガンから精子数の異常な減少までさまざまな生殖機能異常が発生した。

北欧諸国、米国、オーストラリア、ニュージーランドなどでは、一九六〇年以降、五十歳以下の睾丸ガンの発生率が二倍ないし四倍に達し、男性



の生殖機能の発達異常が増加している。

残留性の高い有機塩素系化学合成物質であるDDTは、現在では世界の多くの国で製造・使用されていない。だがアフリカ諸国を中心に一九九〇年でマラリア予防にまだ広く使用されているのだ。

マラリアは住血胞子虫類プラスモジウム属に属する寄生原生生物によって引き起されるが、この寄生原生生物（寄生虫）を人間に媒介するのがハマダラカ属に属する約六〇種類の蚊だ。マラリアを媒介するこの種の蚊は熱帯と亜熱帯に広く生息し、気温が高いほど伝染力を増す。寄生虫がより早く成虫になるからだ。

地球温暖化が進めば、熱帯と亜熱帯が広がり、マラリア感染危険地帯が拡大する。東京も熱帯となるのだ。このため世界中でいまより多くの量のDDTが散布されることだろう。残留性の高いDDTは気候変動にともなう暴風雨、大雨、洪水などの異常気象により拡散されて世界の隅々まで運ばれ、使用を止めた地域にもDDTが降り注ぐ。

DDTは合成エストロゲンに分類されている。この種の化学合成物質は環境ホルモンとして動物に影響をおよぼすほか、植物に対しても影響する。小麦やトウモロコシなどでは穀物の重要な栄養素である窒素吸収能力を阻害する。大豆などのマメ科の植物ではこれらの化学合成物質が窒素固定プロセスを九〇パーセントも遅らせるという。

こうしてマラリア予防のために大量散布されるDDTが地球の窒素循環をも攪乱することになるが、窒素は植物の必須栄養素であり、動物のタンパク質合成にも欠かせないものである。

一方で、食糧増産のために農地に大量に散布される化学合成窒素肥料が自然の窒素循環を狂わせている。多すぎる窒素は生態系ばかりか人間に対

しても悪影響をおよぼすのだ。

温暖化により増えたマラリア媒介蚊を退治するために使用する化学合成物質によって穀類などの生産量が減って食糧不足を招くことになるのか。人口爆発がつづくなか、地球温暖化はさらに飢餓人口をも増やすことになるのか。

世界の人口大国で、現に、一三億人の人口を抱える中国と一一億人のインドはともに水不足に悩まされている。経済発展にともない、急速に増大した都市用水や工業用水の需要に河川が干上がり、地下帯水層が枯渇し出しているのだ。

しわ寄せを受けて農業用水への供給量が激減し、農業生産が低下する。食肉消費が増えた中国では急増する飼料用需要に穀物生産が追いつかず、穀物輸入国へと転換してしまった。インドでも農業用水が不足しはじめ、中国の後を追うのも時間の問題である。

水需要の増大にともない、水の奪い合いが激増した。河川管理や流水配分を巡って地域間や国際間で新たな争いが増えている。

降雨量が少なく、河川がなかったり、流量が少ない地域では不足分を地下水に頼るほかない。世界人口の一五億人から二〇億人は飲用水を地下水に依存している。

アジア太平洋地域では一〇億人から一二億人もが地下水を使用している。地下水は無尽蔵ではないし、多くの地下水層が農薬や硝酸塩、塩素系溶剤、ベンゼン、ヒ素、重金属などさまざまな化学物質で汚染されている。耕地、庭やゴルフコースに散布された農薬が浸透したり、廃棄物の埋立処分地や製造施設からの漏洩や廃水によるものだ。

地球温暖化は世界の降水量を激変させる。雨が降らなかつた地域に大雨

をもたらし、洪水を引き起すかと思えば、雨を奪い、干ばつを見舞う。

赤道付近で上昇した空気は中緯度付近で乾燥した下降気流になって、その付近を乾燥させるが、地球温暖化によってこの傾向がますます強まっていく。北極周辺の高緯度付近では強い風をとまなう大雨が襲い、洪水が繰り返されるが、ヨーロッパ大陸中南部から中東、北米大陸中南部の穀倉地帯には熱波が襲い、激しい干ばつに見舞われ、水不足に悩まされることになるのだ。

水不足は水の汚染を助長する。乾燥地帯では飲用に適さない水といえども貴重な資源であり、これが飲用に供されることもある。下水は処理されないまま流され、いたるところに汚水が溜まり、大腸菌、サルモネラ菌、ビブリオ菌、コレラ菌、赤痢、A型肝炎ウイルスなど感染症の温床となる。溜まり水はまた、デング熱、黄熱、マラリア、日本脳炎を媒介する蚊の大きな生息場所となる。

地球温暖化による気候変動はさまざまな異常気象や気象異変を引き起し、水を奪い、食糧を奪うか、洪水で生命、財産を呑み込んでいく。さらに気候変動と酸性雨や紫外線などが複合化して過酷な影響をもたらす。

急激な気温上昇による気候帯の変化は植生に致命的な影響をおよぼす。気温変化に植物は適応できず枯れていく。温帯や寒帯の森林が枯れ、熱風に乾燥し、山火事が多発した。激しい風雨が焼け跡から表土を奪う。これが繰り返されて、森林生態系は崩壊して乾燥化し、砂漠となる。

気温変化は動物の生息地や生息域を変える。いまままで支配していた種が追い出され、新顔が現れる。生息地から追い出された動物たちは新たな生息場所を求めて彷徨うが、餌となる木の实や若芽もなく、もはや生息に適したところはどこにも残されていない。

棲息地や餌場を失った小鳥や小動物たちは餌や水場を求めて彷徨う。移動に疲れ、大型の動物の餌食になる。昆虫や小動物たちは絶滅し、草原や森林の生態系も破壊され、大型動物も餓死してしまふ。

海水温の変化は魚介類やサンゴなどの海生生物に甚大な影響をおよぼす。海水温の上昇によって冷水魚が姿を消し、暖水魚が現れる。海流の流れが変わり、サンゴが死滅し、海洋の生態系が崩壊していく。

一箇所の生態系が破壊し崩壊すると、隣接する生態系に影響がおよび、つぎつぎと連鎖反応を起こして崩壊範囲を広げていく。さまざまな生命を育んできた地球が人間の勝手気ままな振る舞いによって、まるで荒れ狂う荒野と化していく。

動物植物だけではない。気温や湿度の振幅が大きくなり、水不足や洪水など相次ぐ自然災害で農業の生産性が極度に低下し、農民の多くが農地を放棄し、環境難民となって住み慣れた農村から都市に向かう。都市には環境難民が溢れる。飢えた環境難民は大挙して国境を越え、水を求め、食糧を求めて当てのない旅に出る。

東南アジア諸国や中国の国境付近で、武装した環境難民の大移動がはじまった。これが切っ掛けとなって、水資源を巡る国際間の小競り合いから戦争へと発展する。

世界各地で暴動が頻発し、国際社会が一層不安定化していった。

25

「藤原くんの死因はとうとう分からなかった。いや、まだ分からないとい

うことだよ。あとはゴードンに任せて、きみの忠告に従って帰ってきた」  
地之木は東京に戻ると、池田を訪ねた。池田はいわくあり気な目をして、彼の話をじっと聞いていた。

白い蛍光灯の光が陰影を奪い、すべてを平面的に照らしているなかで、池田の周囲だけが妙に薄暗く陰気な雰囲気漂わせている。池田はウイルスを恐れているのか、黙って暗い目で彼をじろ見るだけで、口を開こうとしない。

彼はふと池田が藤原についてなにか自分の知らない情報を掴んでいるような気がした。ホテルのレストランでゴードンと会った翌日、二人は藤原が担ぎ込まれたという病院を訪ねた。そこで彼は検体のため藤原の遺体の一部がCDCへ送付されていることを知らされた。

「CDCからの回答はまだなのだね」

CDC（疾病管理予防センター）は当初南部のマラリア対策のために設立されたが、一九七〇年代になって連邦政府の機関となり、国民の健康維持増進を目指して公衆衛生から疾病全般をカバーするようになった。新しい疾病の原因解明と、ウイルスや病原菌の特定に内外の評価が高い。

「まだだ。ゴードンから調査結果について知らせてくることになっているが……。藤原は自分が死亡したら原因を徹底的に調べて欲しいと書き残していたらしいんだ」

クリステイナがゴードンの激しい追及に藤原から生前一通の封書を預かったことを白状した。そのなかの一通にその旨記してあったという。

「そうか」

池田が焦点のぼけた目をあらぬほうに向けたまま、ぼつんと言った。

「このことについて、きみはなにか知っているのか」

彼は池田と会ったときのいわくあり気な顔を思い浮かべた。クリステイナのもう一通の封書はどこに届けられたのか。あれは池田に宛てたものではなかったのか。わが身の危険を省みず、あえてグリーンランドに赴いた藤原のことだ。帰途わざわざ東京に寄った彼がなにも言い残さず黙って死んでいくことは考え難い。最後になにかを池田に託しているにちがいない。彼はもう一度池田の目を覗き込んだ。

池田の目になんの動揺も見られなかった。まるで死んだ目のよう動きがない。

「もう一通の封書のことだが……。どんなことが書いてあったのかな」

彼は半ばカマをかけるように言う。一瞬、池田の目が動いた。

「クリステイナだったね、彼女はなにか言っていたのかね」

「……………」

さらにカマをかけるか、彼は迷った。

「CDCから回答があったら話すよ。それまで先走った行動を控えることだ。これには複雑な問題が絡んでいるらしいからな」

あっさり言うと、池田は立ち上がった。これから会議室を出た。彼は釈然としなかったが、追い出されるようにして研究室を出た。

大通りに出ると、車の喧騒と排気ガスに急ぎ立てられて、地之木は地下鉄の潜り込んだ。まだラッシュには間があったが、空席はなかった。降りる駅は二つ目だった。彼はドアの手摺りに掴まり、鉄路の上を激しく回転する車輪の金属音と振動に身を任せた。

クリステイナは詳しく話すことはなかった。彼は頭から彼女が封書の内容を知ることがないと決めて掛かっていた。だが、彼女は藤原の封書の内容を知っているふうにもみえた。それなのになぜ彼女は話そうとしなかつ

たのか。もしかしたら彼女はわざわざ東京からポルダーまで藤原の死因を調べに来た彼も当然その内容を知っていると思っただけなのかもしれない。だから彼女は詳しく話す必要がないと早とちりしたのだ。

すると二通目の封書は池田宛てだったのか。封書には多分、地之木にも伝えて欲しいと付記してあったのではないか。グリーンランドの帰りに彼を訪ねてきたのもウイルスの情報を伝えたかったからにちがいない。それなのに池田は知らぬふりをしている。なぜか。彼はいろいろ頭を巡らす、空回りするだけだった。

「相談したいことがあるんだが……」

オフィスの戻ると、彼は仲間を呼び集めた。慎重居士の池田がなにを言おうと、彼の腹は決まっていた。帰途疲れを押してわざわざ立ち寄った藤原の意を無にすることはできない。一刻も早くウイルス感染症について国際社会に警告を発し、最善の対策を講じなければならぬ。さもなければ多大な犠牲者を出すことになるのだ。

「デンバーはどうでしたか」

地之木の航空券の行き先がデンバーとなっていたせいか、左山は彼がポルダーではなくデンバーに行ってきたと思っただけだ。

「ポルダーだよ。デンバーから車ですか」

右野にはボストンで一年暮らした経験があった。

「中海さんは……」

彼には余裕がなかった。二人と雑談をする気が起こらなかった。藤原が必死の覚悟でグリーンランドに出掛けたのに、池田のよそよそしい態度を思うと怒りが沸々と湧いてくる。

「もうすぐ戻ると思うけど……、相談してなんですか。『新しい文明村』の

ことですか。明日にも現地へ行く予定ですが……」

「左山くんはオフィスを移したほうがいいと言っているけど、この件についても話し合ったほうがいいんじゃないかな」

「そういう右野くんの考えはどうなんだ」

「できればここは早く引き払ったほうがいいと思う。相談しておきたいこともそれと関係のあることです」

地之木のいつもと違った様子に、左山と右野は互いに顔を見合わせる。中海が勢いよくドアを開け、帰ってきた。「暑いわ」と言いながら、鞆を机の上にどすんと置いた。

「中海先生、四者会談ですよ」

左山が奥のソファから声を上げる。

中海が隣の椅子の座るのを待って、地之木はこれまでの経緯をかいつまんで話した。

「ホントですか。地之木さんは藤原さんにはなんどもお会いしておられるんですよね」

中海が隣から、幾分体を後ろにそらして彼を窺う。

「そう。もし藤原くんの死因がウイルスだとすると、彼と接触しているわたしも感染しているかもしれない。でもまだわたしは発症していない。いまもって発症していないのを見ると、そもそも感染していないからかもしれない」

「じゃ、ウイルスではないのじゃないの」

「グリーンランドに行った二人が相次いで死んでいる。ウイルスでなければなにが原因だろうか」

「あちらからの報告を待つほかはないのかしら」

「池田教授もそう言っていたが……、それを待っている時間が残されているかどうか」

「かといって、原因が分からなければ手の打ちようがないわ」

彼はまだ疑わしそうな目を向けている中海を振り返る。いっそのことグリーンランドからの帰りの藤原と接触した池田が彼自身が発症しておれば原因解明も簡単だったろうし、対応も早くできたのかもしれない。

「感染経路によって感染しやすいウイルスもあればそうでないものもある。インフルエンザウイルスのように空気感染タイプのウイルスでは患者と話しただけでも感染の危険があるけど、経口感染タイプのものは話したり接触したくらいでは感染しないよ」

彼と中海のやり取りを黙って聞いていた左山が口を挟む。

「グリーンランド水床が大規模崩壊を起して、未知のウイルスが親潮の乗って日本列島を襲うかもしれない。一刻も早くなんらかの手を打っておく必要があると思うよ」

右野がつづく。

「そんなことが考えられるの。ウイルスは単独で生きられるの。宿主がいなければ生き続けられないんじゃないかなかったの」

「宿主と一緒に……」

「ウイルスの正体が分からない。まして宿主はなにかも分からないのよ。それで手の打ちようがあるの」

「警告を……」

「どんな警告が考えられるというの。『地球温暖化で海面上昇の恐れがあります』、海水には未知のウイルスがいるかもしれないので、気をつけて下さい」とでも言うわけ」

中海は徒に警告だけを発してもパニックを起すだけだと言っただ。

「かもしれない。でもアンダーソンが死んで、藤原が死んだ。死因が分からないという。だがそんなことがあると思うかね。なにかが隠されているような気がしてならない。それが明らかにされないまま、手遅れになってしまうのを待つか、それとも問題提起をして、国際的な協力のもとに二人の死因を追及するか。ウイルスのせいなのか、そうでないのか。とにかく、事情をオープンにして死因を調べることを提案するのはどうかな。藤原もそれを期待してわざわざ危険を冒したのではないかと思うんだ」

彼は藤原の死をムダにしたくなかった。藤原の心情を思えば、危険を避けて問題を先送りするようなことは許されなかった。それにこのような情報を知っていながら、沈黙を守り、自分たちのための「新しい文明村」の建設に勤しむことはできなかった。

彼の気迫に押されたのか、中海はなにも言わなかった。左山にも右野にも異論がなかった。

26

それは突然やってきた。

五月の末から連続して真夏日が六〇日以上続いていた。冷房による電力需要が増加し、ピークを何度も更新した。

連日連夜都市のあちこちで局所的な停電が断続的に発生していた。

需要期を迎え、発電所はフル回転態勢にあったが、毎日のように更新する電力需要の増加に応じて設備をやりくりしている電力会社にはもはや突

然のピーク負荷に備えて発電できる設備の余裕がなかった。

停電が発生した。

熱帯夜にはインバーター付きのクーラーによって電力負荷が局所的に極度に集中する場合がある。突然の需要増によって過負荷に陥った場合、電力供給ネットワーク全体に被害がおよばないように、負荷に堪えきれない箇所が発生するとその部分がネットワークから自動的に離脱する仕組みが組み込まれているらしいのだ。

その夜も熱帯夜だった。深夜になっても電力需要が衰えることがなかった。

地下街の深夜巡回に出た初老の警備員が排水口から水が滲みだしているのに気付いた。警備員は別の排水口に移動して確かめた。一面濡れている。排水ポンプの故障かと思い、機械室の扉を開けた。モーターの回転音が響いている。停電でも非常用電源が自動的に入り、排水ポンプは駆動しつづけることになっている。もう一度排水口に引き返して水漏れを確かめる。まえよりも広がっている。警備員は不審に思いながらも、報告を後回しにして巡回を続けた。

帰り道、警備員は階段を下りて懐中電灯で排水口を照らした。

「あっ……」

一面水浸しだ。排水口あたりから水が噴き出し、次第に水高が増していく。

「水が溢れ出て……」

警備員は携帯で本部と連絡をとった。

数時間後、方々の地下施設から警報が鳴り響いた。サイレンを鳴らした消防車が深夜の街路を走り抜けていく。

地之木は誰もいないオフィスのソファに横になって、停電が回復するのを待っていた。もう一度メールの点検をしておきたかった。

四人は身の回りを整理して「新しい文明村」の建設に活動の中心を移していた。左山と右野はすでに「新しい文明村」へ移住して生活をはじめている。オフィスも近々閉鎖する予定だった。

彼はまだオフィスに留まって、グリーンランドウィルスに関する情報を発信しつづけた。ゴードンからまだ連絡はなかった。池田もなんとも言っていない。

突然、足音がした。ドアのまえで止まる。

カギ穴に鍵を差し込む音がした。ドアが開いて、黒い影が入ってきた。

「誰？」

彼はソファから身を起こしながら、闇を透かしてみる。

「あ、ビックルした。地之木さんね。わたしよ。いくら待っても電車が動きそうにないので今夜はここに泊まろうと思って……」

中海の声だった。

彼は下着姿に気付いて急いで身支度を整える。ズボンを穿き終わったとき、突然蛍光灯が灯り、室内に照明が戻った。額から汗が滴り落ちた。

「どうしたんですか。まだこっちに仕事が残っていたんですか」

彼は中海に下着でいたことを見られ、些か慌てた。ソファから離れ、机に戻ると、停電で切れたパソコンに電源を入れる。

「地之木さんはここで寝泊まりしていらっしやるのですか」

下着姿の彼を見たせいかわ、中海は目をそらしたままだ。

「疲れて眠り込んでしまうこともあるけど……」

熱帯夜が何日も続いてきた。時折開け放たれたベランダから生暖かい風が吹き込む。遠くでサイレンの音がした。

「蒸すわね。これじゃ、ゆっくり休めないじゃないの。クーラーはダメなの」

彼は振り返って中海を見る。ハンカチで汗を拭いているいつもの彼女の顔があった。彼はパソコンのディスプレイを覗き、メールを開く。

電話が鳴った。ゴードンからだった。

「大分時間が掛かったが、漸くグリーンランドウイルスの全貌を掴んだよ」

藤原の遺体は最初の病院から軍施設に移送されたこと、CDCなどの協力による病原菌検定で検体から溶血性ウイルスの痕跡が見つかったこと、水温でも生存できるオキアミの一種に棲みついているウイルスらしいことなどが判明したという。

「よく分かったな。さすが新聞記者だ」

「きみたちのグリーンランドウイルスについての発信のせいだよ。あれでマスコミが騒ぎ出したので、当局もいつまでも隠しとおおせると思えなくなったのか、とんでもないことが起きてしまった」

「え？ 一体、なにが……」

ゴードンの声が途絶えた。息遣いだけが微かに感じられる。話そうか、迷っている様子だった。急に受話器の奥からクラシックのメロディが流れてきた。ポリリウムを上げてCDをかけているのか。

「聞き取りにくいかもしれないが、我慢して聞いてくれ。こうしないと通信を妨害されるかもしれないから。実は、温暖化でグリーンランドウイルスが激症化することが分かったので、早急に寒冷化プロジェクトを実行に移すことになったらしいのだ。もしかしたらもう実行しているかもしれないな

い。なにしろ、北極海で例のオキアミの異常繁殖がはじまっている……」

ゴードンの声がブツンと切れた。

突然、彼は身を震わせた。いや、ひとりでに身体が震えだしたのだ。

「地之木さん、どうかした？」

中海が飛んできた。

「通信妨害……」

「なんですって……」

彼はまだ受話器を握っているのに気付き、急いで戻すと、間近で彼を覗き込んでいる中海に顔を向けた。

「海面が急上昇する。東京が水浸しになるかもしれない」

「え？ 予報で大潮と台風が重なって、明日東京湾は高潮に襲われるかもしれないって聞いたけど」

彼はまだ天気予報を見ていなかった。必要なときに携帯用テレビが持ち込まれたことがあったが、オフィスにはテレビを置いてなかった。誰かが仕事しているときにひとりだけテレビを見るわけにいかなかったし、また、四人と一緒にテレビを見るようなこともなかったからだ。

「それとは別の話だけど、そうなればさらに海面が上昇することになる」

彼は気が気でなかった。受話器を取って、池田を呼んだ。何度呼んでも呼び出し音が鳴るだけで誰も出ない。

「一体、なにが起こるの」

中海の抑揚のきいた声が響いた。

彼は大きく息を吐いた。今更慌ててみるもはじまらない。すでにグリーンランドウイルスについては前から警告済みだったではないか。政府機関にも地方自治体にも連絡は済んでいる。

サイレンが鳴った。

「なにかしら……」

中海がペランダに出た。彼も後を追う。

数時間前の停電であらかた閉店し、商店街は静まり返っている。街灯に照らし出された街路にはひとりの人影もなかった。時折タクシーが通り抜ける。遠くでサイレンが鳴っている。近くでサイレンが鳴った。

突然、彼の脳裡にある疑念が湧いた。藤原の遺体からウイルスが見つかったというが本当だろうか。間違いないのか。ウイルスの宿主らしいオキアミが異常発生しているというのなら、付近の魚介類はすでにウイルスに汚染されているはずだ。それなのに、なぜこのことを公表して操業している漁船や沿岸住民らに対して注意を喚起しないのか。なぜ急いで寒冷化プロジェクトを実行しようとするのか。

たとえ寒冷化プロジェクトを実行しても、これによって即座に地球温暖化の暴走が止まり、気温が下ることを期待できないことはわかっているはずなのになぜこれを実行しようとするのか。そもそもグリーンランドウイルスは本当にいたのだろうか。もしかしたら藤原の死因は全く別の原因によるものではないのか。あの国は皆がグルになってなにかを隠そうとしているのではないか。

机に戻ると、彼は受話器をとった。ゴードンはいなかった。藤原についての情報を求めてクリステynaにメールを送った。

彼はニュースサイトを開く。グリーンランド氷床崩壊のニュースを探した。

中海が携帯ラジオを取りだし、スイッチを入れた。

「地之木さん、地下街が水浸しになっているらしいわ。地下鉄はどうかし

ら」

「どうして……」

JR東京駅の地下には商店街が網の目のように広がっている。地下道は有楽町から銀座へと連なり、連絡するビルの地下には商店街がある。

二人はペランダに走った。路面が濡れているのか、薄暗い街灯の光が反射して微かに光っているように見える。

彼は中海を振り返った。

「急いで東京を出たほうがいい。いまずぐ『文明村』に行くんだ」

「電車は止まっているのよ。ダメよ。でもどうして……。大潮と台風が去れば、海面も元通りに戻るんじゃないの」

中海が強がり言う。彼はゴードンと交わした電話の内容を話した。

「海面が上昇して、あのグリーンランドウイルスを含んだ海水が襲うというの……」

「確実なことは分らないが、その可能性があるのだ。タクシーを拾って、レンタカーを借りるんだ」

「それじゃ、地之木さんも用意して……。一緒に出ましょ」

「いや、わたしはここに残る。連絡があるかもしれないし……」

彼はゴードンの言ったことが本当かどうか確かめなかった。たとえわが身を危険に曝してもグリーンランドウイルスの存否を目で確認したいのだ。

「パソコンは持っていけばいいじゃないの。どこでも連絡はとれるわ。電気も切れるし、水道も止まるのよ。食べものだってないでしょう」

「早く、タクシーを呼ぶんだ」

彼は強く言う。だが中海は電話をかけようとしな。流しに走っているような容器に水の汲み置きをはじめた。



彼は迷った。自分勝手な思いから一人の人間を死に追いやろうとしているのか。一緒に出れば、彼女を死の危険に曝さずにすむ。かといって、いまここを去れば、この先ずっと後悔しつづけることになるだろう。

「中海さん、そんなことはないから早く行ってくれ。さあ、出よう。タクシーを拾ってやるから。いや、レンタカーを借りに一緒に行こう」

「いやよ。わたしには車の運転はできないわ」

「そんなこと言わないで、『文明村』へ行ってくれないか。頼むからそうしてくれ」

「イヤよ」と言って、中海はベランダへ逃げる。

「地之木さん、見て、水が……」

路面で幾条もの水の線が光っている。二人は寄り添い、一本の水の線が道路から目の前の空き地に向ってゆっくり流れ込んでくるをじっと息を詰めて見守った。

サイレンが近くで鳴った。浸水の危険を知らせる警告のマイクが流れ、赤い光を点滅させた消防車が路地を通り抜けていく。

パソコンがメールの着信を知らせている。

彼は机に戻り、メールを開く。

クリスティナからであった。

「例のプロジェクトは失敗。巨大な氷塊が漂流中。すべてを忘れて下さい。これで終わりです」

新雪の大規模雪崩を起して深層海水形成海域へ大量の淡水を流し込もうとする計画が失敗したのだ。氷床の大崩壊をも引き起して、北大西洋へ巨大な氷塊が十数個流出し、そのうちの数個が南下し、数個が北上して北極海を漂流しているという。

メールに目を向けたまま、彼はしばらく呆然としていた。確かにこれで終わりだ。相変らず地球温暖化は暴走をつづけ、地球上の生態系を崩壊させるだろう。そのまえに、グリーンランドウイルスは牙を剥き、人類に襲いかかり、最後の一撃を加えるというのか。

不意に、漂流する巨大な氷塊が目の前に浮かんできた。北極海からベーリング海峡を通り抜けた氷塊はどこへ向うだろうか。ひとつは米国西海岸を指し、ひとつは親潮に乗って日本列島を指すのだろうか。

無数のオキアミを引き連れた巨大な氷塊がカムチャツカ半島の東海岸から千島列島沿いに南下し、銚子沖に向うことだろう。氷塊に巣付いているオキアミやこれを食べた小魚がタラやニシン、サケやマスの恰好の餌となるにちがいない。

彼は銚子に向った氷塊が細かく砕けて、房総半島東側沿いに南下して台風の波浪に煽られ、岸に打ち寄せられて飛沫となって飛び散るさまを思い浮かべた。戦慄が走る。北上している台風が東京湾を指して氷塊の飛沫を内陸深く吹き込むことになるのか。

そのとき、蛍光灯が一瞬赤くなって消えた。一帯が停電になったらしい。パソコンの液晶画面だけが光っている。搭載している電池が切れれば、これも消えてしまう。彼はふと水中にひとり取り残されたような孤独を感じた。

ベランダに出た。暗い影があった。彼は影に近づき、隣に並ぶ。

街灯は消え、暗闇が支配していた。路面に海水が流れ込んでくるのか、微かに潮の匂いがする。それとも、時折強く吹く風が運んでくるのだろうか。

「台風が近づいているのかしら」

彼は黙って彼女の背に腕を回し、引き寄せた。

地之木は雨の音と強風に目を覚ます。暴風雨がガラス戸を叩き付けている。薄明のガラス戸のまえで黒い人影が揺らいだ。

中海だった。目を覚ました彼に気付いて、振り返った。

「浸水しているわ」

そう言ったとき、彼女はガラス戸のまえでじっと外を見ている。彼は身を起し、彼女のシルエットに目を向ける。昨夜の出来事が思い浮かんだ。

彼はガラス戸に近づき、彼女の隣に佇む。

「堤防が決壊したのかしら」

「いや、防潮堤を越えて海水が流れ込んできたんだ」

彼には防潮堤を越えて押し寄せてくる大波がはっきり見えた。

「え？ 海水が……」

「まだ間に合うかもしれない。脱出しよう」

「『新しい文明村』へ行くのね」

二人は身支度を整えると、タクシーを呼んだ。なかなか携帯電話が繋がらなかった。漸く繋がっても、道路が冠水していることを知らせると配車できないという。電車は動いていなかった。

彼は迷った。冠水している道路を素足で歩いて行って大丈夫だろうか。

氷塊とともに流れてきたウイルスが海水とともに浸入しているのではあるまいか。運良く東京を脱出できたとしても、ウイルスを「新しい文明村」に運び込むことになりやしないか。

彼は地方へ脱出した水没被災者がウイルスを撒き散らし、原因の分からない死病が全国に蔓延していく状況を思い浮かべた。

「しばらく様子を見ようか。浸水した海水が例のウイルスに汚染されているかどうか、一度チェックしてからにしよう」

中海はちらっと彼を見ると、ペランダのガラス戸に寄り、外に視線を向ける。雨が時折強くガラスを叩き付けた。

携帯が鳴った。池田の声がした。

「例の新聞記者からそんな連絡があったのか」

「ゴードンからの報告を黙って聞いていた池田が驚いたふうに言う。」

「結局、彼らが藤原の死因を利用したんだな」

「利用？」

「ウイルスの脅威を吹聴して、例のプロジェクトについて関係国の了解と協力を得たに違いない。だが彼らは自然の力を軽んじている。甘く見ている。自然を支配できると思っていたんだ。科学技術をすっかり過信してしまっていた。今回のプロジェクトが失敗したのもそのせいだ」

池田は興奮気味に言う。

「そうかね。きみがそんなふうには驚きだ」

いつもと違う池田に彼はなんとなく白々しさを感じた。

「ふん、ひとは見かけによらないということもあるさ。ところで浸水しているのか」

「うん」

「無理するなよ。藤原のこともあるからな」

池田の声が切れた。彼はしばらく携帯を耳にあてていた。

突然、あの変なメールが頭に浮かんだ。あれも寒冷化プロジェクトを実行するための世論対策だったのだろうか。

地之木はメールの予告通りに進んでいることに戦慄を覚えた。彼は急い

で中海の姿を探した。彼女はベランダのガラス戸にへばり付くようにして外を見ている。

不意に、鍋の中から必死で外へ出ようともがいている蛙が浮かんた。なんとか鍋の火を消そうと必死になったが、結局、外へ飛びだすことさえできなかつたのか。

彼は重い足を引き摺り、彼女が佇むガラス戸へ向う。

## エピローグ

東京湾から上陸した巨大台風は日本列島を縦断するように北上していった。大雨と強風が各地に洪水や山崩れを引き起し、建造物の屋根や樹木を吹き飛ばした。

首都圏では東京はもちろん、千葉、埼玉など被害は首都圏全域に及んだ。上陸時に大潮と満潮時とが重なったこともあって、約六メートルの防潮堤を越えて波浪が襲い、滝のように流れ込んだ海水がゼロメートル地帯一帯を水浸しにした。

南から張り出した暖水域が東京湾の奥まで達した。台風は高温の海水からエネルギーを補給して巨大に発達し、三浦半島を目指して北上してきたのだ。大潮の満潮時でいつもより潮位が高いうえに、低気圧の台風がさらに潮位を吸い上げ、高潮となった。

だが台風が去ったあとも潮位が戻らず、海面が高いままだった。満潮時が過ぎても、海水は引く気配がなかった。防潮堤にはいつもより数十センチ高い波が打ち寄せ、満潮時のような状態がつづいた。人々は海面が高いのは大潮のせいだと思った。

洪水はゼロメートル地帯を超えて広がった。ポンプを総動員して排水に当たったが、汲めども汲めども尽きることがなかった。人々は漸く海面の異常変化に気付いた。

北半球の海岸低地でも同じような現象に見舞われた。ことに大陸の東海岸で潮位変化が激しく、汀線が内陸部へ後退し、海が広がっていく。

大都市沿岸部の砂浜は侵食され、時を追うごとに防波堤やリゾートホテ

ルやプールなど、海の中に取り残される建造物が増えていった。

一週間が過ぎた。海水は引かず、ゼロメートル地帯や低地帯は全域水浸しになったままだった。道路やライフラインの復旧はままならなかった。道路は水没したままで、下水道から汚物が一面に溢れていた。

地下鉄や地下街が水の中に取り残されたままだった。地中に埋設された電気やガスの送配管路用の共同溝には海水が浸入して手の施しようがなかった。

ギリギリ燃える太陽に焼き付けられるなか、水中に取り残されたマンションや家屋で最後まで復旧を待つて籠城していた人々もついにわが家を見棄てて、大挙して避難場所へと移動しはじめた。

だが何十何百万の被害者を収容できる避難所は近くなかった。

背を太陽に焼かれ、熱風の吹くなかを何十キロも移動してようやく避難所にとり着いたものの、老人や幼児らには熱中症が続発した。また体力を消耗した被災者たちは免疫力が極度に低下しており、感染症の蔓延が心配された。

ゼロメートル地帯では排水が進まないまま、水が淀み腐りだした。溢れ出た下水が混じり、病原菌には恰好の繁殖場となった。一部でコレラの蔓延の兆しが現れた。

水没地帯の広がりとともに、微弱な地震がつづいた。大地震の前触れかという噂が広まった。

水没地帯から水が引く気配がなかった。排水ポンプを動員し、フル回転させても水位に変化がみられないのだ。排水してもその分どこからともなく新たな海水が流れ込んでくる。それに隅田川、荒川、江戸川の水位が上がり、氾濫の危険が生じた。

復旧に時間が掛かると悟ったのか、途絶えることのない微弱な有感地盤振動のせいか、すし詰めの避難所の被災者のなかから地方へ疎開する動きが出た。被災者たちは持てるだけのものをもって地方に散っていく。東京だけでなかった。大阪や名古屋などの浸水を被った地帯でも同様だった。

しばらくして、全国で原因不明の病気による死者が続出した。水没被災者に多かったが、そうでない人々も含まれていた。

日本と同じようなことが北大西洋に面した英国やヨーロッパ諸国、北米大陸の東西海岸でも起こった。

原因不明の病気はほどなく収まったが、地球温暖化の暴走はつづいた。かつての温帯、亜寒帯、寒帯で森林の枯死が相次ぎ、大規模な山火事が頻発した。それと競うように、グリーンランド氷床の溶融と崩壊が加速し出し、海面が上昇して海流に急激な変化が生じた。

世界の各地で散見された生態系崩壊の兆しが燎原の火のように地球全体に広がりだしていた。

(完)

(この物語はフィクションであり、登場人物および団体名は実在するものと一切関係ありません。)

#### 主要参考文献

天野博正『環境科学—人間環境の創造のために—』(1983)

同『人類は滅亡への道を歩みはじめた』(1994)

R・B・アレー他『グリーンランドの氷が語る気候の激変』(日経サイエンス)1998年5月号

特集「南極メルトダウン」Newton(ニュートン)2000年8月号

新聞報道記事およびテレビニュースのほか、とくに、WORLD・WATCH(ワールド・ウォッチ日本語版)の各号を参考にさせていただきました。

襲い来る殺人氷塊―現代文明の毒唾 2

生野以久男

二〇〇六年六月一日第一版発行

© Ikuo Ikuno 2006

発行所 kinokpress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一― 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 [www.kinokpress.com](http://www.kinokpress.com)内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN なし